

しら露もまだ置なれぬ浅茅生のむら雨ながらくるゝ宿哉
 せみ鳴て夕日かげろふ山かげの茅原の露に秋はきにけり
 夕日さす浅ぢがはらにみだれけりうす紅の秋のかげろふ
 秋の日のもふぐれなるに露みえて浅ぢが末葉色付にけり
 初霜のおきゐてきけばむしのねも夜なゝかるゝ庭の浅ぢふ

○蘭

袴によせある詞を上下にたちいれて多くよみたり

- きしへにさける ○ほころぶ ○ほころびわたる ○香に匂ふ ○その香にめづる ○たがうつり香
- うつり香匂ふ ○野べを匂はす ○草の枕に匂ふ ○匂ふむらさき ○わかむらさき ○むらさき
- 色むつまじき ○いろ深く ○ゆかりの色 ○うべも匂へり ○つゞりさす ○糸のさぢめ
- さゝがにの糸 ○君がため ○折人の心のまゝに ○人の形見 ○から人のかたみ
- さる人なしに ○たがぬぎかけし ○ぬししらぬ ○ぬしやたれ ○かりにくる ○きてみれば
- 露のぬき ○露のこぼれて ○露はむすべど ○しら露の ○むらゝみゆる ○しぐれの雨に
- わぎもこが裾野 ○秋の野風 ○秋の野とこに ○野毎に

名所 佐保川(大和) 春日野(同) 御垣が原(同) 武藏野(武蔵)

古 何人かきてぬぎかけし藤ばかまくる秋毎に野べを匂はす
 同 宿りせし人のかたみか藤ばかまわすられがたき香に匂つひゝ
 同 さゝがにのいとのとちめやあだならんほころびわたる藤袴哉
 金 佐保河のみぎはにさける藤ばかま波のよりてやかけんとすらん
 同

元 雅 景 尙 宣
 雄 足 樹 行 長

勅 代

わぎもこが裾野に匂ふ藤ばかま露はむすべどほころひにけり
 みな人の心にまがふ藤ばかまうべ色深く匂ひたりけり
 つくま野のわかむらさきの藤ばかま立てみるてみあかぬ色かな
 花の色は露のまがきの藤ばかま匂ひのみこそやつれざりけれ
 かけてほすかき根の野へのふぢばかまいつまで露のひるまなからん
 たがちざりうすむらさきの藤ばかまきてみる人もあらし野べ哉
 秋風にはころび初て程もなくひとの匂ふ藤ばかまかな
 藤ばかまほころびぬとはしらねどもこの比しるき秋風ぞ吹

○朝顔 槿花 あさがほ

打まかせて朝顔といふは牽牛花の事なれど槿ムゲをもしか云へりまた字鏡には桔梗をも
 あさがほとよめりいづれも其花の朝に咲て夕をまたぬ物なるよしなり其名はひとし
 けれどその物はおのゝ異なりされどかよはして朝顔とよみてくるしからず

- 花の朝がほ ○匂ふ朝がほ ○露の朝がほ ○軒の朝がほ ○かきの朝顔 ○れぐたれがみの朝顔
- かぞふる花 ○あだおる花 ○花のひもさく ○花に宿かる露 ○花のすがた ○ふまひのすがた
- さく ○もろくさく ○朝なゝくに咲かへて ○ふむ ○しほむ
- 匂ふ ○さかりほごなき ○葉がくれ ○露にほころぶ ○露にあらそふ ○露にひもさく
- 露に打ふむ ○露にかゝれる ○露おひて ○露よりけなる ○露のむすぶ ○露の身
- 白露のおくたまつた ○朝露おきて ○しなれてかゝる ○こぼれてかゝる ○玉ゆらかゝる

顯 平 契 蘆 基 景 濱 仰
 輔 城 沖 庵 政 樹 直 杖

○風ふけば ○有明の月 ○日かげにうつる ○日影をしらぬ ○日かげまつま ○日かげなまつ
 ○朝日がへれ ○しのよめ ○しのよめならで ○夕かげにさく ○夕かげまたぬ
 ○おきてみむ ○もごかしさみる ○いかゞみるらん ○目のまへに ○竹にまごふ ○竹にまつばる
 ○かきれの竹 ○竹のまがき ○柴のまがき ○柴の袖がき ○あし垣 ○かゝる筈もたどろく
 ○山がつのかきは ○まがきなうづむ ○きりのまがき ○きりのたえま ○賤のあみ戸 ○はかなき軒端
 ○のどかに物をおもふ ○たごふべき方なき ○しげしげ翁 ○ねたしや
 ○おぼつかた ○世中をしらす

朝がほは朝露おひてさくといへど夕かげにこそ咲まさりけれ
 おきてみむとおもひしほどにかれにけり露よわけなる朝がほの花
 しら露のおくをまつまの朝がほはみすそ中へあるべかりける
 をはりおもふすまひかなしき山かげに玉もらかるゝ朝がほのはな
 おぼつかたれとかしらん秋ぎりの絶間にみゆるあさがほの花
 朝顔のはなのすがたをみつるよりくれをまつべき心ちこそせね
 いつまでか折てみるべき日かげまつ露にあらそふ朝がほの花
 風ふけばかゝるまがきもたじろきていとあだなる朝がほの花
 世中をしばしわすれてながむれば日かげかゝりぬ朝がほの花
 葉をしげみ日かげへだつる朝がほは露のひるまも猶のこりけり
 垣もせにさく朝顔のひとさかりはかなきこともわすれてぞみる
 咲あまる庭の朝がほはすはまた柴の袖がきもひそへてみん

萬 新 勅 同 同 堀 同 月

よみ人 好 宇 後 俊 肥 公 廣 幸 秀
 しら 忠 于 京 頼 後 景 海 文 雄
 極 子 極 頼 後 景 海 文 雄

葉がくれをまだ明ぬ夜とおもふらんさかんともせぬ朝がほの花
 竹がきの露に日かげのかよふまをしばしわが世の朝がほのはな
 あまりにもうつろふ色よわか草のつまにはみせじ朝がほの花

○鴨頭草 つまきつ つゆき

露草とよめる哥も多くみもうつり安き花なれば大かたはかなきよしを專によめり

- 秋の月草 ○花ごころ ○花田のいろ ○浅はなだなる ○朝にさく ○つさにさく
- 咲すさぶ ○あだに粧こく ○うつろふ ○うつり安き ○朝露 ○夕べは替る
- いろごり衣 ○衣をする ○衣にほはす ○衣いろざる ○衣染る

月草に衣ぞ染る君がため色どり衣すらくおもひて
 月草に衣いろどりすらめどもうつろふ色といふかくるしさ
 朝露にさきさびたる月草の日くだつまにけぬべくおもほは也
 月草に衣はすらん朝露にぬれての後はうつろひぬと
 月草のはかなき花の色にだになど染やすき心なるらむ
 置露の色こそことにさやかなれ秋を時なる月草のはな
 我門のむぐらの中の月草も時めく秋にはやなりにけり
 露深き野中の草の朝かげに匂ひすしき月草のはな
 敷しげきむぐらが中の露草に月もてほやす秋と成けり
 道の邊にははななくさける露草の花の色にしむ心かな

萬 同 同 同

よみ人 景 春 元 廣 千 邦 同 同 同
 しら 樹 夫 孝 海 蔭 直 直 直 直 直

○葛

風によく葉の吹かへさるゝものなれば裏をみる心を恨にそへて多くよめり

- くず花 ○くずかづら ○くすの葉 ○くすの葉分 ○くすのうら葉
- くすの青葉 ○くすの葉風 ○くすの秋風 ○はふくず ○玉まくゝず ○かさほのくす
- 岡のくす葉 ○野へのくす原 ○眞くす ○眞くす葉 ○眞くす花 ○眞くす原
- 眞くす原 ○垣根の眞くす ○さく ○露にさく ○咲匂ふ ○匂ふ
- 松垣にはふ ○はふ ○竹の籬にはふ ○所せくはふ ○山下しげく ○いろづく
- うつろふ ○霜にうつろふ ○かれかれて ○うらがらゝ ○うらみ ○うらがなし
- 秋風の吹うらがへす ○神のいがき ○あやかりやすき ○ひかばよりこむ ○いつかはくりて

名所

眞野の入江(近江)

深草の里(山城)

布留野(大和)

片岡山(同)

信太の杜(和泉)

浅野小澤(攝津)

萬 同 古 後 新 同

かりがねの寒く鳴しも水ぐきの岡の葛葉はいろ付にけり
 わがやどのくす葉日毎に色づきぬ來まさぬ君になに心ぞも
 千はやぶる神のいがきにはふくすも秋にはあへすうつろひにけり
 足引の山下しげくはふくすの尋てとふる我としらすや
 神なびの三室の山のくすかづら吹うらがへす秋は來にけり
 ひとりねやいとさびしきさを花の朝ふす小野の葛のうら風
 石上ふる野のまくす風ふけど世はむかしにもかへらざりけり

よみ人 しらす
 貫 兼 家 兼 貫 同
 之 覽 持 王 之 之
 契 顯 家 兼 貫 同
 冲 綱 持 王 之 之

○荻萱

かるかや

むさし野のついきの岡のまくす原秋吹風のはてはみえけり
 あれわたるまがきのまくす風ふけばうらぶれてのみ音の聞ゆる
 葉がくれに匂ふまくすの花もみむうら吹かへせ月の下かせ
 みるめなきまくすも秋の花かすに結びもらさぬ野への露哉
 水ぐきの岡のやかたにはふくすのしげるや月のうらみ成らん
 眞くすはら下はふ風の折々に吹立る秋に成にけるかな
 色かへぬ岡への松にはふくすのうらみはたれにかけんとすらん

千 古 春 豊 廣 有
 陸 道 海 滿 中 功 卿

俗にちがやといふものこれなり萬葉にわがかるかやとも高がやともよみ六帖にはか
 や野ともよめれば只かやとのみよむべきをその用の語を体言になしてかるかやとい
 ひなれたるなりはやく六帖にもかやかるかやと二つにわけていだせり

- 萱が下葉 ○されかや ○れつろ高がや ○音かるかや ○庭のかるかや ○なびくかるかや
- 野へのかるかや ○枕にもかるかや ○ほにいづる ○ほずる波ふる ○葉におく露 ○上葉をわたる
- 下葉みだるゝ ○末葉みだるゝ ○みだるゝ ○みだれふす ○みだれちる ○みだれがちなる
- みだるゝ野へ ○しのにみだるゝ ○いさゝもみだす ○露にみだるゝ ○あさみだれたる ○しごろにみゆる
- しごろもごろ ○しごろにふす ○下折ねらん ○かたよりなびく ○ふみしだく ○露むすぶ
- 露こぼるゝ ○下おく露 ○秋風に下折 ○秋風に ○ふく風に ○吹かへされて
- つかの問も ○つかぬる ○つかね緒 ○しげるまがき ○まがきもあれて ○ませゆふ庭

名所

也きゝの岡(大和)

秋津野(同)

ふる野(同)

いかなれば上葉をわたる秋風に下をれぬらん野べのかるかや
 おしなべて草葉の上を吹風にまづ下をるゝ野べのかるかや
 秋くればおもひみだるゝかるかやの下葉や人のこゝろなるらむ
 さらぬたにみだれやすなるかるかやのつかの間もなく結ぶ露哉
 としふればまがきもあれてかるかやの世を秋風に思ひみだるゝ
 風ふけばしのにみだるゝかるかやも夕はわきて露こぼれつゝ
 かるかやの野べ吹たびにみだるれば露も心や風におくらむ
 いづかたになびくとなしにおのづから風まちげなる野べのかるかや
 かるかやはみだれもあへず下をれぬあまり野分の風のつよさに
 みだるゝをおのが名にたつかるかやをおもへば風のとがにぞ有ける
 吹わたる野風をあらみかるかやのみだれもあへず下折にけり
 秋風のふかぬさきだにあるものをけさかるかやのしどろなる哉

よみ人 甲斐 師頼 三河内侍 俊成女 春満 邦直 春夫 御杖 尊朝 景樹

○草花 秋花 秋のはな

秋さく花のたぐひは皆よむべし萩を花くす花女郎花なをでしこの花藤ばかり朝がほ
 以上七草なり月草かは花など其外にもなほあるべしまた桔梗紫苑龍膽などをよむ
 べしといへどもそは字音なるによりおもてにあらはさずして多くは物の名によみい
 れたりまたたゞもゝ草千草八千草の花などよめり

- | | | | | | |
|-------------|---------|-----------|----------|--------------|--------------|
| ○小草の花 | ○もゝ草 | ○八千草 | ○千ぐさ | ○いろの千草 | ○花の千草 |
| ○ま垣の草 | ○きりの下草 | ○花野の草葉 | ○花のいろく | ○花のすがた | ○花の香の日をへてかはる |
| ○花ぞかへりて露を染る | ○花の上露 | ○花になりゆく | ○花の下糞 | ○花の糞さく | |
| ○花のやざりこ | ○花さく野べ | ○花野の秋 | ○花分衣 | ○さまんゝの花 | ○あたら花ちる |
| ○また花さかぬ | ○月は花の光 | ○秋の花野 | ○秋の花園 | ○その色さおもひもわかす | |
| ○咲そむる | ○匂ひわたる | ○匂ふさかり | ○さかりに過ぬ | ○染いだす | ○うすくこく |
| ○しげみにまどる | ○打なびく | ○をれふす | ○しめゆふ | ○うつしうゝる | ○うつし植し |
| ○露おもみ | ○露ながらなる | ○露にしろるゝ | ○露打はらび | ○露打はらふ | ○露のやざり |
| ○露もおささず | ○こぼれぬ露 | ○こぼるゝ露 | ○うつろふ露 | ○朝露に | ○朝おく露 |
| ○朝露にぬるゝ | ○夕露に | ○雨ふれば | ○雨そゝぐ | ○雨にしなるゝ | ○きりのまがき |
| ○秋風 | ○秋風さわぐ | ○定めなき秋の野風 | ○野分だつ | ○野分の風 | ○秋の野をうつせるやど |
| ○野毎にちる心 | ○野べのにしき | ○野べのあるとき | ○あかぬ野べ | ○わけゆく | ○分行袖 |
| ○袖に露おく | ○玉の衣 | ○かたみにする | ○手玉もゆらに | ○みる人のなくて | ○秋は猶 |
| ○秋をしる | ○朝ぼらけ | ○夕まぐれ | ○鹿の音きかぬ夕 | ○汀にたてる | ○やざれる虫 |
| ○心うつるふ | ○いづれさか | | | | |

高圓の野べのかほ花おもかげにみえつゝ妹はわすれかねつも
 秋の野にさきたる花を手に折てかきかぞふれば七種のはな
 みどりなるひとつ草とぞ春はみし秋はいろく花にぞありける
 植たてゝ君がしめもふ花なれば玉とみえてや露もおくらむ
 石上ふる野の草も秋は猶いろことにこそあらたまりけれ

家持 意良 伊勢 元方

わがやどに千草の花をうゑつれば鹿の音のみや野べにのこらん
秋の野の千草の色にうつろへば花ぞかへりて露を染ける
置露もしづ心なく秋風にみだれてさけるま野のはぎはら
秋の野の千草の花の色々を露ばかりしていかゞ染らむ
秋の野の千草も草さく花にあさげは露のおきものこさず
さきとさく花野をみれば世のひとの染なす色は限有けり
色ごとに心ぞうつるも草の花のかけゆくしら川のみづ
よもぎふの垣ねつゝきの草の原秋は花野となりける哉
露をおもみねたるもあるを小萩原はしたなきまですめる月哉
うつし植て野べの千草の花かすをおもひのこさぬ宿の秋哉
いろくの花のかざりをうつし植てあれぬ庭をも野とぞなしつる

頼家 二品親王 紀伊 通景 高陸 千庵 直兄 久胤 春海 景樹

○露 つゆ

いにしへより四季にわたりてよむこと今もかはる事なけれど秋を詮とせり但露むす
ぶとは秋ならでもよめり露吹むすぶとは秋にかざるべしといへり

- 露霜 ○露ばかり ○露吹むすぶ ○露かゝりき ○露すがる ○露けき
- 露寒き ○露所せき ○露分衣 ○露のいろ ○露のぬき ○露のひかり
- 露のあはれさ ○露のあだ物 ○露の間 ○露の身 ○露のしがらみ ○露の夕えは
- 露の玉ゆら ○露のしら玉 ○露にしなるゝ ○しら露 ○朝露 ○夕露 ○いろこき露

- なみだの露 ○木の下露 ○草木の露 ○淺ぢが露 ○芝生の露 ○萩の下露
- 萩のうへの露 ○稻葉の露 ○葉のぼる露 ○こごばの露 ○夜ほのしら露 ○あかつき露
- 曉おきの露 ○しづく ○おく ○おきあまる ○おきかへて ○むすぶ
- 吹むすぶ ○むすびもこめぬ ○葉末をつたふ ○こぼるゝ ○みだるゝ ○おつる
- きゆる ○ちる ○かわかぬ ○しげき ○ふかき ○あさき ○もろき
- はかなき ○あだもの ○玉かさまがふ ○しら玉 ○つらぬきさめぬ玉 ○みあげる玉
- 光清らに ○光すゞしき ○千々に染る ○雨にまさる ○枝もさなゝに ○枝わたる
- 草木にあまる ○風にみだるゝ ○衣手におく ○袖におく ○さゝわけし袖 ○我うへに
- 尾花がうへ ○月の光に ○月にさやけき ○月にみあげる ○月にさえゆく ○月にてりそふ
- 月に敷そふ ○月かけやどす ○月かけながら ○日かけます ○日かけをうつす ○ゆふべはわきて

秋萩におけるしら露朝な／＼玉とぞみゆるおけるしら露
 此ごろの秋風寒し萩の花ちらす白露おきにけらしも
 君が代はまひの上葉におく露のつもりて四方の海となるまで
 さゝの葉を夕露ながらをりしければ玉しく旅の草まくらかな
 大かたの露には何のなるならんたもとにおくはなみだなりけり
 吹むすぶ風はむかしの秋ながら有しにも似ぬ袖の露かな
 秋はたい心よりおく夕露を袖の外とおもひけるかな
 庭の面にしげるむぐらにことよせて心のまゝにおける露かな
 おぼつかな野にも山にもしら露の何事をかはおもひおくらむ

よみ人 しらす 同 同 安藝 圓信 小町 越前 基俊 天曆御製

玉とみて手にはとられぬ白露や月のかつらの雫なるらむ
 露となり氷りとならんはじめぞとおもへばかなし野への白露
 夕ぐれは風よりさきともとあらの小萩の露に月をこそまて
 秋はたゞ露より外の色ぞなきまがきも野らとなりはてゝより
 花すゝき袖打しめる夕ぐれは露もおもひのありげなるかな
 さくら田の稻葉のあらし吹立て露の花ちる秋の明ぼの
 月清みなにぞとゝひし昔さへながめてけりな草の上の露
 草も木もぬるゝ夕の露みれば人は物をもおもはざりけり
 風の間もみだるゝ秋のしら露をむすべるものとおもひけるかな
 それとなのしらぬ草の末葉までおきもへだてぬ野への夕露

契 安 宣 保 春 正 景 源 同 東
 伎 伎 長 敬 夫 隆 子 樹 喜
 冲 良 長 歌 夫 隆 子 樹 子

○虫
むし

虫また何の虫また虫何などいふ題にはたゞ虫ともまたきり／＼す松むし促織虫す
 虫轡虫など何にてもすべて秋のむしをよむべし

- むしの音 ○むしのこゑ ○むしの鳴音 ○むしのわぶる ○むしきく夜は ○むしのやどり
- むしこ ○秋のむし ○ごもなふ虫 ○多かる虫 ○夜はの虫のれ ○音になく
- こゑしきる ○こゑうらがなし ○こゑのあや ○こゑしげき ○こゑのかぎり ○うらむこゑ
- よわるこゑ ○なきあかす ○なきよわる ○なくれわびしき ○なきつくす ○こゑらなく
- 露になく ○ふり出てなく ○籠のうち ○おのお時 ○おのおさま／＼ ○ありかきだめず

- 長きおもひ ○涙もよほす ○かれ／＼になる ○花のれぐら ○露をいのち ○露のやどり
- 風にめだるゝ ○月さゆる夜 ○月にさほふ ○月にすむ ○月にさえゆく ○くるゝもまたぬ
- ゆふべさびしき ○夕日がくれ ○秋の夕ぐれ ○草がくれ ○草むらごこに ○草の原
- 草むら ○眞くす原 ○八重むぐら ○むぐらがもこ ○むぐらにしげき ○よもぎがもこ
- あさぢふ ○浅ぢふの宿 ○野中の庵 ○草の庵 ○草のまくら ○枕にちかき
- 枕の下 ○ゆかの下なる ○あれたる宿 ○まがきがもこ ○ふるさこ ○野原
- 野へごこに ○くれゆく野へ ○色かばる野へ ○片山かけ ○かごがましき ○夜寒
- たが秋 ○うき世を秋

名所 深草野(山城) 片岡(大和) 春日野(同) 眞野(近江) 武藏野(武藏)

古 我ためにくる秋にしもあらずに虫のねきけば先ぞかなしき
 同 秋の夜は露こそことに寒からし草村ごとに虫のわぶれは
 同 秋の夜のおくるものしらすなく虫は我ごともはやかなしかるらん
 拾 おぼつかないづこなるらんむしの音をたづねば草の露や亂れん
 千 さま／＼の浅ぢが原のむしのねをあはれひとつにきゝぞなしつる
 新 虫の音もながき夜あかぬふる里に猶おもひそふ松風ぞふく
 代 庭草の露のかすそふ夕ぐれに夜深きむしの聲ぞかなしき
 同 わがためと鳴むしの音にあらねどもねがめなればやかなしかるらん
 同 さびしさもきけばまざるゝむしのねのたよりにぬらす袖の露かな
 同 むしの音も月にすみゆくふるさとに風のけしきもふくる夜はかな

よみ人 くらす
 敏 行
 爲 頼
 良 經
 家 隆
 鎌倉 右
 小 宰 相
 魯 道
 正 陸

月かげもこぼるゝ野への秋風にむしの音きえぬ浅ぢふの露
 ふけゆけばむしの音たかく成にけり水のしらべや月にすむらん
 あれはてし縣の宿をとひくれば月もるかべにむしの音ぞする
 秋萩の下葉さやかに月更てむしの音たかし浅ぢふのには
 むしの音も月にさやけき山里をむかひなしとおもひける哉
 むさし野のをぐきを出る月かげに虫のこゑさへさそはれにけり
 わればかりうき夕かと思ひしをくれてぞむしもなき初ける
 うつされし庭のむかしの秋の虫おのが野らとや今はしむらん
 中へにさせるふしなき虫のねもあればあはれのありげなりけり
 人とはぬ草のいほりのよるの雨にとはすがたりの虫のねぞする

○松虫 まつむし

多くは人を待によせ松の木にかけなどしてよめり

- 千日せし野への松虫 ○まつてふむし
- われまつむし ○たれをまつ虫
- こゑをしまぬ ○こゑらなく
- 千代をならせる聲 ○萬代の秋を
- まつの名におふ ○こふ人も
- われかこゑへば ○われかこゑ行て
- 人まつむし ○人をまつむし
- 月をまつ虫 ○こゑをかぎり
- なきつたふる ○はるけき野への松原 ○千とせとぞ
- 名にはたがひて ○いはほに根さす ○ちぎりけんほごや
- 人目たえゆく庭 ○こんさいひし程や過ぬる ○わけこし跡に
- いざさふらはむ ○さほるべき ○たづねて

宣長 道平 八穂 夏見 景樹 安守 政直 定信

- 心にまかせて ○心ながくも
- 草わきて ○君しのお草
- ひざりある身ぞ ○こひまさり
- 夕されば ○夜もすがら
- 秋の野に ○月すむやぎ
- あはれにも ○わびしらに
- かなしき ○一夜に千夜をこめて
- かりそめのやざり

名所

嵐山(山城) 住吉(攝津) 昆陽野(同)

古 秋の野に人まつむしの聲すなりわれかともきていざとふらはん
 同 君しのお草にやつるゝふるさとは松虫の音ぞかなしかりける
 後 同 ことといひしほどや過ぬる秋の野にたれまつ虫を聲のかなしき
 拾 同 千年こそ草むらことにきこもなるこやまつ虫の聲にはあるらん
 後 同 いろくの花のひもとく夕ぐれに千代まつ虫のこゑぞきこゆる
 新 同 あともなき庭の浅ぢにむすばれ露の底なる松むしのこゑ
 勅 同 よひくの山の端おそき月かげを浅ぢが露に松むしのこゑ
 續 同 千々の秋にあふべき宿の花園をすみかにしたる松むしのこゑ
 さ夜ふけてたれすみよしのきしもせむ遠里小野の松むしのこゑ
 もとひの霜のね覺もあるものを露なうらみそ庭の松むし
 露わけてわれかともへば音をたえて分こしあとにまつむしのなく
 夕ぐれの風にきはへる松むしはたがつまごとのねにかよふらむ
 岩しろの岡のかやねにこゑたてゝ松むしさわぐ秋のふ風
 秋の夜を千年とたのむ松虫のこゑ霜にこそうらがれにけれ

よみ人 しらず
 兼盛 同
 元輔 式子内親王
 公衝 紀後
 契沖 契沖
 枝直 枝直
 藤庵 藤庵
 千隆 千隆
 東喜子 東喜子
 景樹 景樹

○鈴虫 すいむし

鈴の縁によせてよみつけたり驛路の鈴鷹の鈴にもかけてよむ事常なり

- うまやちの鈴虫○みかりの鷹の鈴虫○草の枕 ○夕ぐれのこゑ ○昔ながらの聲 ○さやかなる聲
- こゑのまさる ○こゑんぐ ○こぞのふる聲○聲はふりせず ○なくれふりゆく○ふりせぬ聲
- ふり出たるほご○ふり出てなく ○ふりはへて鳴○ふりすてがたき○ふりたつる ○ふりゆくまゝに
- ふりにし庭 ○ふりにしいほ ○ふるさこ ○ふるささはかはらざりけり ○わがふる里
- ふるきまがき ○月になる空 ○月になる夜 ○さやかなる月 ○高くなり増る ○なみだふりそふ
- ばなやかに ○きよならせども ○あはれになり増る○たまさかに○いかならん ○秋ふかくなりゆく
- いづこにも

名所 神楽岡(山城) 小倉山(同) 鈴鹿山(伊勢) 鳴海野(尾張)

拾 後拾

いづこにも草のまくらをすゞ虫のこゑを旅ともおもはざらなむ
 秋風に聲よわりゆく鈴虫のつひにはいかゞならんとすらむ
 とやがへりわが手ならしは鷹のくるときこゑる鈴虫の聲
 古門にかはらざりけり鈴虫のなるみの野べのふぐれのこゑ
 としをへてきよならせどもすゞむしの聲はふりせずめづらしき哉
 たまさかにけふあひぬればすゞむしはむつまじながら聲を聞ゆる
 すいむしをみかりの鷹の聲かとして野べのきよすや草がくるらん
 鈴虫の聲ふりたつる秋の夜はあはれに物のなりまさるかな

伊勢 匡衛 公資 爲仲 三河 忠見 長方 和泉式部

○蝥 蟋蟀

きりぐす ころろぎ

しら露のわれをおきてはふるさとのあるしやたれと鈴虫のなく
 秋寒くなりゆくまゝにひる間のみ聲ふりたつる野べのすゞ虫
 ふり出てなくむしの音やおのが名のすゞるに秋のあはれそふらん
 ひるもなきしぐれの雨にすゞ虫のふりならされてよわる聲哉

契沖 声庵 千藤 景樹

きりぐすころろぎ同物なり蜻蛉の字をもころろぎとよめりおもふにころろぎの名
 はふるくしてきりぐすとは中昔に出来る名なるべしさせはきりぐすの一名とい
 へれど誤にて蝥の聲のしかきよなるもゑなりこれによりて古今につゞりさせて
 ふきりぐすとよまれたるか

- 聲なつかしく ○聲たえず ○ものうげに鳴 ○寒くこそなげ ○野べになく ○かべになく
- かべにうつる ○かべにすがりて○かべのなかなる○さこの下にも ○床ちかく ○枕の下になく
- 枕の露にかよふ○明る枕に遠ざかる○わが手枕の下○老のれざめ ○れざめとふ ○あはればたれも
- つゞりもさよぬ○おのがすみか ○みだれゆく ○草の根をこに ○草むらごこに ○草のやどり
- かげ草 ○かり残す草葉 ○浅ち原 ○浅ちがもこ ○秋萩も色づく ○庭草に
- 庭にうつる ○よもぎが宿 ○あれたる宿 ○汝がためにあらせる宿 ○しら露のおく庭
- ゆふかげに ○長き夜すがら ○夜寒に ○夜ながき ○秋の夜のあはれば○秋はてがたき
- 秋更ぬ ○秋風のやゝ吹 ○秋風の寒く吹なべ○秋風の吹くる宵○野分の後 ○野べにならひて

名所 嵯峨野(山城) 淀野(同) 竹田の里(同) 立田山(大和) 小野の篠原(近江)

その鳴聲くつわの音に似たるをもて名とせり多く馬につきたる事によりてよめり
 ○草わけて鳴 ○草になく ○さやかなる聲 ○近くなる聲 ○遠くなる聲 ○わがせこぎ打のる駒
 ○たがのる駒 ○駒にまかせて ○駒なべて行人なしに ○くる人もあらじ思へど
 ○遠かた人 ○秋深くなりゆく ○ゆらく ○おどろかれぬる ○月になる夜
 わがせこは駒にまかせてきにけりとときまにきかするくつわむし哉 和泉式部
 駒なへてもく人なしにくつわむし遠かた野への草になくなり 同
 こばた山夕ぎり立ぬしかはあれど馬こそあるらしくつわ虫なく 契沖
 かよひこし手なれの駒の道たえてかたみになるくつわ虫哉 竹直
 もきかひも安き御代とてうまやちによるもきこゆるくつわ虫哉 正臣
 くつわむし鳴や淀野の月清み心の駒もひかれ來にけり 清香
 くつわむし入みだれたる聲す也野分の後のひくま野のはら

○茅蝸

ひぐらし

萬葉には蟬ひぐらしを通はしてよめりされど蟬とあるかたはいとすくなくてひぐらし
 しとよめるが多かり後世蟬は夏蝸は秋にもものする事六帖に起れり

○ひぐらしに ○此日ぐらしに ○こゑのいさなく ○こゑきく山 ○なく山里 ○鳴くらす
 ○なく夕ぐれ ○なきつるなべに ○夕かげになく ○ほのかにしつる ○明ぐれ ○入日さす
 ○夕されば ○夕まぐれ ○秋の夕ぐれ ○秋夕ぐれになる ○秋風に ○物おもふさき
 ○稻葉そよぎて ○草葉そよぎて ○萩さく野べ ○山かげ ○山のさかげ

こもりのみをればいぶせみなぐさむと立出きけば來鳴日ぐらし 家持
 萩の花咲たる野べにひぐらしのなくなるなべに秋風ぞふく よみ人
 ひぐらしの鳴山ざとの夕ぐれは風より外にとふ人もなし しらす
 ひぐらしの鳴つるなべに日はくれぬとおもふは山のかげにぞ有ける 同
 ひぐらしのこゑきく山の近ければ鳴つるなべに入日さすらむ 貫之
 ひぐらしの聲もいとなくきこゆるは秋夕ぐれになればなりけり 同
 山ざとはさびしかりけり木がらしの吹夕ぐれのひぐらしの聲 仲實
 日ぐらしのなく夕ぐれぞうかりけるいつもつきせぬ思ひなれども 長能
 夕付日さすや岡べの柴の戸にさびしくもあるかひぐらしの聲 忠良
 夕まぐれ野山の虫のこゑぐはひぐらしにこそもよほされけれ 長流
 庭草におけるあさ露消ぬ間にはや秋の日はひぐらしの聲 同
 日ぐらしの鳴音も遠くなりけり夕風よわる山崎のさと 克彦
 もふべくまづ日ぐらしの聲よりやなべての虫も鳴はじむらむ 景樹
 朝ち原末葉の露は日ぐらしの鳴音よりこそむすび初つれ 繁里

○電

いなづま

稻妻は雷を帯たるもあれど常に雷のそはぬをよめり稭稻の實の頃の宵闇などに光
 を放つ故にやがてそれを名にして稻妻とはいふなり

○たもさすゞしく○衣手さむく ○夏衣かされきるまで○身にしむ ○おごろかす ○心うごく
○いれがてにきく○人は音させ ○むかしながらの

萬

秋風の寒き朝けをさぬ岡もこゑなむ君にきぬかさましを

赤人

古

秋風のふきとふきぬるむさし野はなべて草葉の色かはりゆく

よみ人

詞

秋ふくはいかなる風の色なれば身にしむばかりあはれなるらん

和泉式部

千

夕されば小野の浅ぢふ玉しきて心くだくる風のおとかな

攝政

新

高圓の野への篠原末さわざそいや秋風けふふきぬなり

基俊

同

手もたぬくならず扇のおき所するばかりに秋風ぞふく

相模

同

野原より露のもかりをたづねきてわが衣手に秋風ぞふく

太上天皇

代

おもひこし生田の杜の秋風に川音すみぬ夜やふけぬらむ

通具

松のひやし萩のさやぎのさまづくにきこえてたえぬ夜はの秋風

眞淵

大伴のみつの浦なみ吹よせて松ばらこもる秋のゆふかせ

同

さわぎにし野への眞葛は吹過て岡べにかへるまつかせのこゑ

契沖

穂なみよる秋の田づらにかりほして風のすがたはみるべかりけり

蒼生予

松の音はなれしいほりの軒ばにも萩の葉かなし秋の秋風

宣長

身にぞしむ鶉なくまで住すてしたがふるさとの野への秋風

景樹

なにとなくものゝかなしきくもり日に音づれてゆく秋の風哉

同

正木ちる外山の奥に鳴鹿の聲より奥もあき風ぞよく
たつ波のひいきもそひて大伴のみつの濱松あき風ぞけく
のがれこしよし野の奥も秋風のふけばかなしき所なりけり
國ばらにかをるさざりもはれぬべく神のいぶきの秋風ぞ吹
夕すいみまちしきのふの秋の風袖に袂にあらはれにけり

尊朝
知紀
久秋
譽重
有功

○野分 のわき

和名抄に暴風を乃和木乃加世とよめり野分とはもと風の名にあらねど仲秋の頃より
おもひがけず俄かに風のあらく吹くものなれば然いひならへるやうになりたるな
り

- 野分たつ ○野分せし ○野分する ○野分する夜 ○野分の風 ○野分の後
- 野分のあき ○野分のゆくへ ○野分になびく ○野分にはるゝ ○野分にたゆる ○野分にあるゝ
- あらし野分 ○よその野分 ○はやち ○吹あるゝ ○吹みだる ○吹いづる
- いはほも吹けつべき ○はしたなく吹 ○あれわたる ○はげしく ○あはたしくも
- いさゞしく ○おごろくしく ○やすき空なき ○空のけしきも ○けしきもかわる ○浮雲まよふ
- 雨のうちそふ ○風さわぎ ○夕ざりの ○露くだく ○露もさまらぬ ○露もたまらぬ
- しなるゝ ○桐の葉おつる ○木草しなるゝ ○草木がうへも ○草のをれふす ○心なき草までしなる
- 千草しなるゝ ○浅ぢが原 ○錦おしなみ ○庭にちりつもる ○垣ほにあるゝ ○八重むぐら
- むぐらふの宿 ○浅ぢふの宿 ○庵までなびく ○野への夕ぐれ ○ゆふべく ○夕まぐれ
- 夕は秋さ ○秋をへだてゝ ○秋のこゝろ ○うけきにも ○鷹のなみだ ○鷹がれなびく

○うづらなく ○むしのれたゆる ○竹のは山 ○此さこのみ ○いづこもおなト ○さしかくもたごらで
 ○ながめわび ○ながめすてよも ○ながめやる空 ○見わたせば ○うちわたす ○心くだくる
 ○いさひても ○はれぬ思ひ ○おもひやる ○あはれにも ○ものわびしちに ○うきならはし
 ○そよろかなしく ○ものぞかなしき

千 野分する野へのけしきをみる時は心なき人もあらじとぞ思ふ 季 通

新後拾 かりにさす庵までこそなびきけれ野分にたえぬ小野の篠原 家 隆

同 きのふまでよもぎにとぢし柴の戸も野分にはるゝ岡のべのさと 女 房

六 秋風は野分山わけふくなれと戀の耳にはわくよしもなし 女 房

六 おもひやる我心までしをれきぬ野分する夜の花のいろくく 女 房

同 吹みだる野分の風のあらければやすき空なき花のいろくく 女 房

同 萩の葉にはかりし風の秋の聲やがて野分の露くだくなり 女 房

同 野分せしあがたの宿はあれにけり月みにこよとたれに告まし 女 房

同 秋風の野分吹なるあしたには音たてよこそ露もちりけれ 女 房

同 あらましき野分にちらふ花すゝきおのがふいきに袖さむげ也 女 房

同 秋の風この比耳になれぬるを今しもたつは野分なりけり 女 房

同 山の端に匂ふ朝日もかげろひて野分だつなりちぶの露はら 女 房

同 野分せしあしたの原をみわたせば鹿のふしどもあらはれにけり 女 房

同 軒ちかき松の青葉もちるばかり野分はげしき秋篠のさと 女 房

正 永 廣 景 千 雄 眞 定 家 寂 女 季
 主 章 足 樹 蔭 風 淵 家 房 蓮 房 隆 通

あれはてしわが宿のみや野分せしけさもながめのかはらざるらん 春 鹿

○秋夕 あきの夕ぐれ あきのゆふべ

秋はもとより悲秋とて物がなしき習なるにまして夕ぐれは殊更に悲愴きはまれる時
 なればよろづにつけてもその悲感ふかき心を詮とよむなり

- 心づくしの秋 ○秋のあはれ ○秋のおもひ ○秋のならひ ○秋の夕風 ○ゆふさゞろき
- ゆふべの空 ○夕月夜 ○三日月 ○のこる日かげ ○雲のはたで ○雲の夕ぬる
- 花の夕露 ○たそがれ時 ○かはたれ時 ○むなしき空 ○おぼえずたまる露 ○心みだるゝ
- 心より外 ○心にあまる ○心にぞさふ ○心に物ばわかれども ○何さわく心なられど
- 涙あらそふ ○もろき涙 ○おつる涙 ○すゝるにおつる涙 ○物わびし ○ちゞのおもひ
- 物おもふ ○あはれこそ思ふ ○あはれさは ○をしこても ○うきならはし ○うき身ひとつ
- 身のうさ ○世やはうき ○人やはつらき ○まつにもつらき ○こそわりの外 ○ならひの外
- たゞならぬ ○その事さなく ○さしてそれさば ○いつもかく ○袖に露ちる ○袖ぬらす
- 袖やすからぬ ○かたしきの衣 ○宿を立出て ○鳴たつ聲 ○松風に ○きり立のぼる
- むら雨

後拾 おもひやる心さへこそさびしけれ大原山のあきのゆふぐれ 國 房
 千 何となく物ぞかなしきすがはらやふしみのさとの秋の夕ぐれ 後 頼
 新 くれかゝるむなしき空の秋をみておぼえずたまる袖の露哉 攝 政
 同 いとひても猶いとほしき世なりけりよし野の奥の秋の夕暮 家 衛
 同 むら雨の露もまだひぬ楨の葉にきり立のぼるの秋の夕暮 寂 蓮

秋といへば物をぞ思ふ山のはにいざよふ雲のもふぐれのそら
 ながむればすいろにおつる涙哉いかなる空ぞ秋のもふぐれ
 さらにまたまつにもつらき夕哉いなばの山の秋かせのこゑ
 雨になる空とはみえぬ雲の色も秋の夕は袖ぬらしけり
 秋といへばあしたの空もかなしきを夕ぐれのみと思ひけるかな
 もふ風にきよるなぎさのさゝら波水にも秋の聲はありけり
 おく露も萩吹風もわがためにあらぬをかなし秋の夕ぐれ
 つとめてもことをなかばに秋の日は峯のみちにかくろひにけり
 秋風のふけばなびけるねぶの木ももふべに物はおもはざりけり
 とり出てなにおもふとはなけれども袖打しめる秋の夕ぐれ
 袖の上によどるとはなき夕づゝのかげも身にしむ秋の空哉
 大かたにあらばあはれもたへぬべしながむるからの秋の夕ぐれ
 そむきても猶そむかれぬ心哉あればある世の秋のもふぐれ
 さもこそは物のかなしき秋ならめ夕日にさへもぬるゝ袖かな
 なにとなく袖ぞ露けきいつのまにことしも秋の夕なるらむ

式子内親王 前相國 俊成女 蒿 春 千 春 道 日 勝 譽 尊 常 景 景 樹
 夫 隆 平 善 繼 重 孫 久 子

○秋夜

あきの夜

ながきよしを詮とよむうちにやゝ夜寒のまさる趣をもかぎりなくあはれの深きよし

をよめり

- 秋くる宵 ○秋の夜風 ○夜寒になる ○寒き夜なく ○なしと思ふ夜 ○昔の根の長さ
- ひざりね ○いれがて ○れざめぢち ○れざめせらるゝ ○おきぬなぢち ○おきあかす
- あかしがれては ○あかしがぬる ○いたく更ぬる ○明やらぬ ○明こそやらぬ ○いごもながき
- ながきをひざり ○ひざりある人の ○人をしづめて ○かたしきの袖 ○床の露けさ ○月清み
- 月なき夜 ○月みぬ人の ○さもし火 ○まごうつ雨 ○いぐれさへふる ○露置そへて
- 露さおきぬて ○いさゝ露けき ○いつのまに ○夜わたるかり ○鷹の羽風に霜ふる ○きりくすなく
- 枕にちかき鹿 ○さもなふ鹿 ○鹿のねちかく ○つくぐさ ○つれなく ○物おもふ
- 物思ふ事の限り ○ものがなし ○たゞものさびし ○身にしむばかり ○いたづらに

ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くる宵は露けかりけり
 秋萩の下葉色づく今よりやひとりある人のいねがてにする
 かくばかりしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらん人さへぞうき
 すがのねのながくしてふ秋の夜は月みぬ人のいふにぞありける
 はるかなるもろこしまでもゆく物は秋のね覺の心なりけり
 きりくす鳴や霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねん
 秋の夜ははや長月となりにけりことほりなりやねざめせらるゝ
 夕ぐれに秋の心はつくしにきねざめはなにのものおもふらむ
 月清く秋風寒し今よりはいかでか老のいをやすくねむ

ふみ人 しらず 同 躬 恒 長 能 大貳三位 攝 政 花 山 院 契 沖 芦 庵

こほろぎのまちよろこべる長月の清き月夜は更すもあらなん
 時もりがおもひたもみてぬるばかり秋は夜長くやも成にけり
 ながき夜のやみをのこして入月のあとすさまじき萩の上風
 高根には朝日かげろふいや彦のふもとのきりに明すも有哉
 よもぎふの垣ねあたりには虫なきて秋の夜寒くやも成にけり

眞淵 千景 景之 廣譽 海祐

○秋興

あきのあそび

もろくの秋のあそび又ながめともに時にとりて興ある事を讀べし

- 心ぞさまる ○あかなくに ○うかれゆく ○いかにおかしき ○わすれめや ○たれかみざらん
- めうつしに ○日路遠く ○目もあやに ○にほやかに ○いりみだれ ○おもほえず
- あはれさや ○あかずもけふは ○このころは ○衣にすらむ ○しぐれにかさす袖 ○野べのあそび
- 野べのまごめ ○色ざる野べ ○わけゆく野べ ○おもしろき野 ○匂ふ花野 ○花の匂ひ
- 花のいろく ○花にたはれむ ○花も打ふむ ○わけみむ花 ○山路のきく ○くずはひかるゝ
- 女郎花 ○を花が袖 ○を花はまねく ○萩のあそび ○匂ふ萩原
- 小萩原 ○もゝ草は ○八千草 ○いろの千草に ○野べの千草 ○草のたもこ
- 月にむかへば ○月のかけみむ ○夕月のかけ ○さり立わたる ○露の玉まく ○露のしら玉
- もみぢ見がてら ○もみぢする ○むしの聲々 ○鹿の音きこゆ

萬 秋の野は今こそゆかめものよふのをとこをみなの花匂ひ見に
 同 さら露をとらばけぬべしいざ子ども露にきそひて萩の遊びせん
 古 吹風の色のうちさにもえつるは秋の木葉のちればなりけり

家持 よみ人 同 さら

同 拾 後 千 月

千早ぶる神代もきかず立田川から紅にみづくゝるとは
 むしならぬ人も音せぬわが宿に野べの秋とて君はきませり
 宿毎にをなじ野べをやうつすらんおもがはりせぬ女郎花哉
 秋の田にもみぢ散ける山ざとをこともおろかにおもひけるかな
 色々の秋の野べをば花すゝきまねかずともたいや過べき
 川上の岩がきもみぢちらぬ間に又もきてみむ岩垣もみぢ
 み山べはもみぢすらしもはしりでの門田のわさ田色付にけり
 きぬにすりつとにをりつゝ秋の野は人のこゝろもちくさなりけり
 とにかくに露けき秋のさがならば野をわけくゝてぬるゝまされり
 打わたる千町のほ波もたかにて風のちからもみゆる秋かな
 もみぢ葉を手ごとをりてかへりなばのこる夕日やさびしからまし
 かへるさにおくらん月のなくばこそ山路の梢わけものこさめ
 うつしゑをおもふさか野の花の上にかきつらねつゝ鴈も來にけり

業平 好忠 御製 俊賴 頼朝 契沖 土満 千景 景樹 久胤 太訓 光輔 有功 卿

○秋望 秋眺望 秋のみわたし

いづれもおなじく海川山野のいづこにても秋の氣色のをかしきを遠く見るなり

- ながめよき ○打わたす ○さほしらく ○見わたせば ○秋のみわたし ○秋のいろ
- 秋の海原 ○秋の山べ ○雲の ○月にはれゆく ○雲はるゝ ○さりふかみ

- きりのそなた ○川ざり ○川ぐま ○山もこの里 ○里わのけぶり ○川ぞひの里
- 野も山も ○野づら ○野づかさ ○そさの小田 ○ふもさ田 ○遠かた
- 遠かたの一村 ○松のむら山 ○松のかけより ○ちるもみぢ ○にしきおる ○千草の花
- 朝ぼらけ ○おつる鷹 ○雲ののかり ○露深き ○露しげき

拾 河ぎりの麓をこめて立ぬれば空にぞ秋の山はみえける
同 水海に秋の山べをうつしてははたはり廣き錦とぞ見る

千 朝ほらけうち川ざりたえんぐにあらはれわたる瀬々のあじろ木
新 ふもとをばうちの河ざり立こめて雲ぬにみゆる朝日山哉
同 ふしみ山松のかけよりみわたせば明る田面に秋かせぞふく

代 いなみのや山もと遠くみわたせば尾花にまじる松のむらだち
同 夕付日尾花が末にはのめきてうすざりかすむ秋の山もと
同 高圓の野べのうすざりとだえしてを花につやく松のむら立

遠方や千町のわさ田色づきてきりまにうすき鷹の一つら
こともなき野べを出てもみつる哉もすの鳴音のあはたしさに
西ふく風波の八重ざり末晴て夕日の空にかよふ舟みゆ
もすのなく岡へのぬるでかつちりて夕日のかげもまばらなりけり
むぐらふのもすの草ぐき末みえてきりに匂へる夕日かげ哉
都人みぬ海山のおもかげも月にうかべる廣さはのいけ

深 養 父
同 定 頼
公 實
俊 成
同 契 沖
春 隆 海
千 樹 庭
景 樹 庭
久 鳳 樹
幸 季 風
廣 海 季
眞 淵 海

○秋雨 秋時雨 あきのあめ あきのしぐれ

秋雨はあきの景物をたしかにむすびてよむべし秋のしぐれは秋のことわりなくてはかなはず冬にまぎれぬやうにもすべきこと云も更也

- 雨の音きく ○小雨にくるゝ ○秋の小雨 ○秋のむらさめ ○秋の夜の雨 ○秋の夜すがら
- 空かきくらし ○かきくらし ○くもれみはれみ ○ふり過る ○窓打すさぶ ○雲まよふ
- まよふ浮雲 ○立ぬる雲 ○風きはふ ○風はやみ ○風そひて ○風さわぐ
- 風さそふ ○風の心さ ○風のゆくてに ○風に先だつ ○山風ながら ○山かきくらし
- 山めぐる ○露をのこして ○露もまだひぬ ○露も敷そふ ○染つくす ○まだ染はてぬ
- もみぢを染る ○正木色づく ○山邊いろつく ○色かはる草 ○草葉色づく ○萩のしをるゝ
- 秋萩ちらす ○鹿の音寒く ○虫の音わぶる ○たゞならぬ袖 ○ながめ ○ながめわび
- きよあかず ○あはれなる

萬 秋の雨にぬれつゝをればいやしけど吾妹が家しおもほゆるかも
同 庭草にむら雨ふりてこほろぎの鳴聲さけば秋つきにけり
同 秋はぎをちらすながめのふるころはひとりおきわて戀るよぞ多き
後 かいみ山山かきくもりしぐるれどもみぢあかくぞ秋はみえける
拾 名をきけばむかしながらの山なれどしぐるゝ秋は色まさりけり
勅 みなと河秋ゆく水の色ぞこきのこる山なくしぐれふるらし
玉 秋の雨のもの寒くなる夕ぐれの雲にしをれてわたる雁がね

村 上
よみ人
しらす
同
素 性
順
内 大臣
永福門院

雨によりいし田のわせもかりほさでくたしはてたる比の袖かな
 あし引の山のは高くのこる日をもみぢにもづるむら時雨哉
 しぐれつゝふかくなりゆく山里の秋のけしきぞあはれなりける
 桐の葉のつもるが上に打そゝぐあしたの雨ぞ秋の聲なる
 ちりの世の人はしらじなばせを葉に雨の音きく秋のあはれを
 ふじのねの夕日をこむるむさし野の花が末に時雨ふるなり
 もろごゑにせみのしぐれし梢より露とともにふる小雨かな
 萩の葉のあらしは雨になりぬれどさびしき音はかはらざりけり
 なが月の有明の月のくまもなくする夜はおもへば時雨ふるなり
 むら雨の軒のつまとふ音なひは鹿の音よりもさびしかりけり
 こほろぎの鳴音しめりてふくる夜の軒ばさびしき雨ぞよき哉
 鷺の居るさし根の柳かつちりて村雨そゝぐ秋の川水

相模 政儀 藤原 千景 春海 譽正 東喜子 景樹 同 久胤 濱臣 勝繼

○秋野 あきの野

秋の野のさまを廣く何にてもよむなりけしきをむねとすべし

- 萩 ○ま萩 ○小萩 ○女郎花 ○くず花
- なでしこ ○尾花さかぶき ○尾花が袖 ○すゝき原 ○かるかや ○菊の花
- 芝生 ○浅ぢふ ○咲たる花 ○咲初る花 ○もゝ草の花 ○千草の花
- 八千草の花 ○花の千草 ○花の下紐打さくる ○花のいろく ○秋はいろくの

古 同 後 同 六 同

○さまく ○猶ほのめがす ○秋風のわたる ○おく霜に ○露しげき ○夕ざりに
 ○朝ざりに ○むしのれ ○虫の音もかれなく ○虫の音しげき ○鹿のむなわく
 ○ふすの床 ○小笹が原 ○おもしろき ○心ゆく ○めのみさまりて○ながめはてなき
 ○わけつくす ○おもひやる ○かたみにする

秋の夜の露をば露とおきながら鴈のなみだや野べを染らん
 秋の野にみだれさける花の色千草に物をおもふころ哉
 秋の野のにしきのごともみゆる哉色なき露は染じとおもふに
 いづれをかわきてしのばむ秋の野にうつろはんとして色かはる草
 秋の野は道もかかれずともすれば花のあたりに目のみとまりて
 秋の野にいかなる露のおけばかも千々に草葉のいろかはるらん
 八千草の花の盛にきてみれば野守の花のあるじなりけり
 秋の野の花はさかりに匂はふ間もはや下葉よりうつろひにけり
 かのみゆる尾花がもとにゆく程もまたはるかなるむさし野の原
 むさし野の尾花が末にしら雲のかゝるやふじの高ねなるらむ
 匂ひなきあら野の小がやおのれさへ秋はほに出て人まねくなり
 目にみえて身にしむ風ぞのこりける尾花が末もくるゝ野原に

忠岑 賈之 同 同 同 同 依平 土満 忠之 千枝子 尊孫 景樹

○駒迎 駒引 こまむかへ こまひき

八月になりて諸國の牧より貢の駒を引くるを左近衛少將を勅使にて逢坂まで出てこ

秋の夜の月のためとやすむがなるふじのけぶりもたすなりけん
 あめつちをひとつにこめて立きりもひまこそみゆれ秋の夜の月
 ひむがしの山さしのぼる時にこそ月は神代の手ぶりなりけれ
 あは路の海うしほにきはふ空の月いまにめぐりて夜はふけにけり
 君が代にすむかひありて山松の葉ごしの月もものにみる哉
 秋の夜のとりあつめたるあはれさをとふにも似たる月の影哉
 ふく風の末になり行浮雲を思ひ捨て月をみるかな
 秋の夜の月かげしろき山みれば松さへ霜にのこらざりけり
 秋風の清きありそにかけみちて月の外もく白浪もなし
 山松の梢さやけき月かげに夜深く風のすめるこゑかな
 月清みね覺てみればはりまがた室のとまりに船はてにけり
 てる月のよそにも雲はなりにけりいたづらに吹夜はの秋かせ
 かきくらしおもふ心のくまをのみ月にのこして秋かせぞふく
 しかまがた夜ざり吹しく風みえて雲より上にすめる月かな
 眞神なくみ山の奥のさし枕うき世戀しくみつる月かな
 鹿の聲きぬたの音もさやかにて月はあがたの物にぞ有ける

○待月 つきをまつ

伴鹿 尊孫 廣海 敬則 千野 廣足 久胤 日善 知紀 景樹 御杖 秀雄 高枝 有功 痴

○またるゝ月 ○月まつほどの ○月の出こぬ ○出ても月ぞ ○出くる月のおそき ○おそく出る月
 ○月おそき ○まつ人のため ○まつこゝにても ○まつにひさしき ○まつ夜はいとゞ ○まつにふけゆく
 ○まつに更ぬる ○まちわぶる ○まちつゝなるに ○またるゝ空 ○またれておそき ○浪の下に待
 ○心のうちにつ ○出ぬる間 ○いでがてにする ○また出やらぬ ○ばやかげみせよ ○横ぎる雲
 ○山のみ空 ○山のあなた ○そなたの峯 ○峯にむかふ ○くるゝうれしき ○ふけにけり
 ○心あてに ○心をつくす ○心づくしの ○なぐさまぬ心 ○おもひやる心
 萬 待がてにわがする月は妹がさるみかさの山にこもりたりけり 八 東
 同 雨ごもり三笠の山をたかみかも月の出こぬ夜はくだらつゝ 虫 麻呂
 同 かり高の高圓やまを高みかも出くる月のおそくてるらむ 坂上 耶女
 同 やどごとにかはらぬ物は山のはの月まつ程のこゝろなりけり 加 賀
 後拾 あり明の月待ほどのうたゝねは山の端のみぞ夢にみえける 土御門 左
 金 秋の夜の月待かねて思ひやる心いくたび山をこゆらむ 嘉 言
 詞 秋の月高根の雲のあなたにて晴行空のくるゝまちけり 法 性 寺
 千 山の端に雲の横ぎる宵のまは出ても月ぞ猶またれける 道 因
 新 山端にいでがてにする月まつとねぬ夜のいたく更にける哉 爲 時
 同 今ぞしる秋の日かげのほどなきは月待人のためにぞ有ける 野 宮 左
 代 夕まぐれ沙はさしく大淀をまつにつれなき月のかげかな 宜 長
 天の原八重たな雲を吹わくるいぶきもがもな月のかげみむ 眞 淵

いつしかと月まつほどの池水にまづすむものは心なりけり
大かたの定めなき世にきのふより今宵はおそく出る月哉
山のはにかゝれる雲をなびかせて風も月まつけしき成けり
夕日てる川戸をみつゝあしのやにかねても月の圓居する哉
すむ月も今かみゆらん大空にまづ雲間こそあらはれにけれ

春 御 杖 海
久 政 儀
景 樹

○夕月 初月 新月 ぬふづき

夕月とは常にいふ宵月夜にて月のはじめて見えそむるより十日頃までの月をひろく
いへりまた是を初月とも新月ともいふ三日月弓張月ともによむべし

- 夕月のかけ ○ゆふ月よ ○三日月 ○三日月のわけて ○秋立てまだ三日月 ○月立てまだ三日月
- にゆつかの月 ○かたわれ月 ○弓はり月 ○わけて出る ○かげほのかなる ○光ほのめく
- 雲にかけすむ ○西にみそむる ○西にまつ ○ほのめきわたる ○いるさ ○いるかた
- 入がたちかき ○あかていでる ○ゆふべの空 ○夕ぐれの間 ○くれぬ間の ○宵の間
- くるゝまつ ○まゆ ○まゆれかき ○山のは ○かつくみかの ○はりてかけたり
- しらま弓 ○おぼつかなき

萬 月たちてたゞ三日月のまゆねがきこひし君にあへるかも 坂上郡女
 同 ぶりさけて三日月みれば一目みし人のまよびきおもほゆるかも 家持
 同 玉だれのをすのまどほりひとりとりあてみるしるしなき夕月夜かも しみん
 古 宵の しみいりぬる三日月のわけて物思ふころにも有かな 同

新 千 金

風ふけばえた安からぬ木の間にほのめく秋の夕月夜哉
 秋の夜の心をつくすはじめとてほのかにみゆる夕月夜哉
 敷島や高圓山の雲間より光さしそふ弓張のつき
 西遠くはれたる庵にすめばこそ二日月の影もみてみれ
 萩原や庭の夕露うつろひてくれあへぬ影は月にぞ有ける
 木の間にほのめく月みればまづ心こそ時めきにけれ
 おぼつかなちりばかりなる浮雲にかくれはてたる三日月の影
 山のはゝ尾花が末にはのみえて三日月高しむさしのゝ原
 一葉ちる柳のいと夕露にうつるもほそき三日月の影
 山端にはほのめく影はさしながらをぐらくてらす峯の松哉

忠 隆 實 家 院 庵 庭 瀬 海 樹 景 樹 春 景 久 鳳 廣 臣 春 夫

○停午月 なかぞらの月

中天にあたるをいふ月の真晝といふ心にて光多く影すくなき心をよむなり
 ○月さかり ○月はうまにも ○影かたぶかぬ ○たゆたふかけ ○中空高き ○四方の中ぞら
 ○のぼる空なき ○のぼりはてたる ○いづかたへ行さもみえぬ ○入ほごもまだばるかなる
 ○出入山の中宿り ○なかばに過ぬ ○すみきはまりて ○心のまゝに澄る ○のころくまなき ○晝にかはらぬ
 ○夜は更ぬらし ○さ夜中

萬 さ夜中と夜は更ぬらし鴈がねの聞ゆる空に月わたるみゆ
 金 なごりなく夜はのあらしに雲晴て心のまゝにすめる月かな

よみ人 行 意

同 續古 續拾 代

ながむれば更行まゝに雲晴て空ものどかにすめる月哉
水の面にかぞへし秋の月みれば空にも今ぞなかなばなりける
入ほどもまだはるかなる中ぞらに出てやすらふ夜はの月影
いづくにか思ふことをも忍ぶべきくまなくみゆる秋の夜の月
時守の打なすつゝみ音ふけて月かげ高くなりまさるかな
大空のなかばのほどゝなりにけむくかげみえぬ秋の月哉
立杉のかげさへもなし中空によどめるほどの月のさかりは
てる月は高くはなれて嵐のみをりく松にさはる夜は哉

忠 隆
應 可 法 印
爲 業
相 模
教 圓
政 像
千 隆
景 樹

○十五夜

もちの夜 もち月

もち月とはみちきはまる由なり

- 月こよひ ○たれる面わ ○名におふ月 ○名にしおふ影 ○もなかの月 ○もなかの空
- もなかの秋 ○秋のしなか ○秋のなかな ○秋のこよひ ○わきてこよひの ○こよひみちたる
- こよひの名をや ○こよひながき ○こよひに似たる ○二夜さなき ○世にたてる名 ○てりみつ光り
- まごかなる ○さやけさは ○くもりなき空行 ○よく所なき ○めづらしく

後 給 同 勅

かげはおなじ光の秋の夜をわきてみゆるはこゝろなりけり
水のおもにてる月なみをかぞふればこよひぞ秋の中なりける
終夜みてをあかさむ秋の月こよひの空に雲なからなむ
あけば又秋のなかなばも過ぬへしかたやく月のをしきのみかは

よみ人
しらす
順
かれもち
定 家

同 代

天つそらこよひの名をやをしむらん月にたなびく浮雲もなし
まことゝはたれかおもはむひとりみて後にこよひの月を語らば
山のはたたいよのつねのふべにて今宵の月ぞとしに待ける
ひるみれどあかぬ玉川きよき瀬の浪にも中の月すみわたる
をすまけば月の桂のおひ風もまをにかをるとおもふ夜はかな
おのが世に秋もも中の月ならで何のみちたる影はみるべき
たぐひなくすめる月かなうべしこそ今宵と人もまちわたりつれ
こよひとはかけてもしらぬうなる子もいをねぬまでに月ぞすみける
治れる御代もさかりの秋なれば心のかざり月はてるらむ
うきねするあかしのとまり夜比へて月のさかりにあいにける哉

寂 蓮
西 行
契 沖
美 樹
千 隆
夏 蔭
景 樹
春 足
知 紀
同

○十六夜月

いざよひ

萬葉にいざよふ月とよめれと十六夜ともさだめがたした源氏の末摘花にいざよひ
の月とよめる哥あり其頃より十六夜の月の事にいひ初たるにや

- いざよふ聞 ○いざよふかほぞ ○いざよふかけ ○いざよふ雲 ○いざよふ涙 ○心いざよふ
- しばしいざよふ ○しばしまたる ○さきのふの光 ○さきのふの名こり

万 千

見えすともたれわびざらん山の端にいざよふ月をよそにみてしか
はかなくもわが夜のふけをしらすしていざよふ月をまちわたるかな

満 誓
仲 正

ふくるまで人をまつにぞかゝりける雲のあなた ざよひの月
くればてまつまたのしきいざよひのこよひを月のさかりとはせん
うつろふは人の心かもちの夜をうしろになしてむかふ月かけ
しばしとていざよふ月や有明のつれなくみゆるはじめなるらん
空たかくいでよもくもる月影を猶いざよふとおもひけるかな
こよひより有明ぬべき月なればいづるもしばしつれなかりけり

景 光 游 彦 長 久
樹 輔 清 慶 廣 龍

○立待月 たちまち

十七夜の月はまつこと久しからねばたゞすむほどにいづるよしをもてたちまちとは
いへるなるべし

- 月まつこ ○待たてる ○たちまちに ○立たたるゝ ○立やすらふ ○たゞすむ
- 出田に向ひて立る○庭にいであゝ ○ほごもなく ○さばかりは ○くるより

丹 人しれすまちたてる哉あし引の山より出るかつらをとこそ
同 東路のさやの中山しげくともはやぬけ出よたらまちの月
同 ひとりのみたゞすむほどを久かたの月出てこそかげもつらけれ
くれぬよりまづ立出て心あての山のはみやる月のかげかな
あかすみし花はくれぬる秋の野になを立待の月は出けり
今はとて出くる月を岡のべの松とたてりてむかふ夜はかな

景 宜 變 頼 仲 爲
樹 長 滿 政 正 忠

○居待月 ぬまち

十八夜なり萬葉には坐待月とかけり立待よりは少しおくるゝこゝろをもていふなる
べし

- ぬながらむかふ ○ひこりぬまち ○ふたりぬまつ ○ならびぬまち ○こもにぬまち
- よりぬてまつ ○はしぬして ○旅の芝ぬ ○心のあての峰 ○いらぬさきにも

丹 山がつの外面の庭にすゝみぬていらぬさきにもいづる月かな
同 たはれぬが並びぬまちの月をみてさながことをぞかたりいひよる
同 花すりの衣ぞ露にぬれにける月まつ宵の旅のしはるに
ひとりのみぬまちの月のかげみれば心ほそくもなりにける哉
待ぬつゝとるさかづきも數そへば山の端をみて月ぞみえける
いとわがならひぬまちのいにしへを思ひ出れば月も出けり

頼 爲 爲 爲 三 變 戸
政 衆 忠 冬 滿 變

○臥待月 ふしまち ねまち

十九日の月をいへり夜ふかくいづればふしてまつ心なり

勅 六 同 勅 同
○ふしまつ月 ○ふしまつそら ○ふしながら ○おきふしてまつ ○よりふしてまつ ○れながら
○れてまつ ○いたれながらや○出るおそしこ ○心みかく ○枕さためず
まつ人はたれとねまちの月かけをかたぶくまでにわれながむらん
君をのみおきふしまちの月なればうき人しもぞ戀しかりける
君まつとおきたる我もあるものをねまちの月はかたぶきにけり

大 同 同
よみ人 輔 輔 輔

ねてまつとこよひの月をいふなれば物思ふ人は見でやよみなむ
月やすむくもりやするとふえ竹のふしまつほどもねがたかりけり
心して影やつれなき妹とわれふたりねまちの山のはの月
露深き一むら竹のふしまちにおきゐるほどぞ久したりける
ぬば玉のやみふしまちの月なればみるかげもなき心ちこそすれ
もろともにふしてまたんとちぎりつる月はさ夜更てかたぶきにけり

公任 芦菴 春夫 伴鹿 景樹 同

○廿日月 はつかの月

はつかの夜の月なるが影のやよほそりてはつかなるよしをよむ

○はつかなるかげ ○はつかなる光 ○はつかにみゆる ○はつかばかりに ○こよひはつかに
○山のはつかに ○奥竹のはつかに ○草のはつかに

丹

よひのまにおもひしことを思ふ哉はつかの月のすみのぼるまで

顯 敏

同

椎柴やしげきみ山の月かげは今宵ならでもはつかにぞ見る

顯 敏

同

このくれとたのめし人はまでとこすはつかの月のさしのぼるまで
杉たてる山のはつかに月かげのさしのぼるほどぞしづけかりけり

かげもやよはつかになりぬ大かたの月のなごりやこよひなるらむ

こよひまでねもせで待し月かげをあすより老のね覺にやせむ

さしもまだ光ほそくもあらなくにたれかはつかの月といふらむ

大宜重千 平風船 後鳥羽院 顯 敏

○曉月 有明月 殘月 あり明

曉月は明かたにいづる月をものこる月をもよむべし在明月は十五夜より後朔日ごろ
までのこれる月をかよはしていひ殘月はのこれるにかざれるなり

○月の入がた ○尾上の月 ○のこれる月 ○あかつきの月 ○あかつきの月夜 ○あり明月夜
○あり明の月 ○かくあり明の ○なごり有明の ○此曉に ○曉かけて ○かげしらむ
○影のこる ○鳥より後に ○くだかけの聲 ○まだ夜をのこす ○しらみ行空 ○ほがらくさ
○ほのくしらむ ○ほのく明る ○明がたに出る ○明るもしらす ○明るそなたに ○のこりて明る
○中空に明る ○かたぶくまゝに ○あかでいづる ○尾上にのこる ○餘までかゝる ○山端にかたぶく
○山端ちかく ○まちいづる ○まちなしむ ○あかずもあるかな ○ほごもなく

金 千 同 新 同 同 代

山ざとの門田の稻のほのくくと明るもしらす月をみるかな
あし引の山端ちかく住とてもまたでやはみるあり明のつき
あかでいらんなごりをいとやおもへばやかたぶくまゝにすめる月哉
さらにまたくれをたのめと明にけり月はつれなき秋の夜の空
天の戸をおし明かたの雲間より神代の月の影ぞのこれる
夜もすがらひとりみ山の旗の葉にくもるもすめる有明の月
ながむればわが世もいたく更にけり西へかたぶく山端のつき
かりゆかむおもひもたえてあはれなり鶉鳴野の有明の月
有明のかげをのこしてしらむ夜をつれなしとこそ月はみるらめ

顯 靜 長 通 長 赤 尊 春 庭 方 光 政 明 染 朝 庭

かたぶか有明の月の月かげを山のつかさにかくみてしがな
曉のはねかく鵬のたちどさへほのかにみゆる月のあはれさ
有明の月さすかたに窓をあけてね覺うからぬ宿となしつる
ね覺してたれかみるらんみよし野のすいしのしのやの有明の月
さしのぼる月の光とおもひしはやがても空のあくるなりけり
家路までおくらん月の影ながらつかれてかへる心ちこそすれ

たみ子
千薩
芦庵
知紀
景樹
同

○深夜月 深更月 ふかき夜

- ふかき夜の影 ○かたぶく月 ○月ふくる ○影ふくる ○西なる影 ○てりまさる
- てりそふ ○光さえゆく ○秋の夜ふかく ○長き夜あかね ○夜くだつ ○夜こもり
- 夜のふけゆけば ○ふかき夜のかけ ○ふけぬ此夜は ○更れざいさゞ ○ふけてぞいさゞ ○ふけゆくそら

万 ぬば玉の夜は更ぬらし玉くしけ二上山に月かたぶきぬ
同 くらはしの山を高めか夜こもりに出くる月のかたまちがたき
拾 秋の月西にあるかと見えつるは更行ほどの影にぞ有ける
後拾 月かげは山のは出る宵よりも更行空ぞてり増りける
新 更るまでながむればこそかなしけれ思ひもいれじ秋の夜の月
勅 待えても心やすむるほどぞなき山のはふけて出る月かげ
ましらなくおなじ尾上の月かげもや木つたひて影ふけにけり

道真
沙彌女王
景明
長房
式子内親王
師季
契冲

には鳥のかつしかわせの新しぼりくみつゝをれば月かたぶきぬ
ふけゆけばてりこそまされ秋の月など宵のまに友またれけむ
ふくる夜のしげきむくらのひまとめてさし入窓の月を露けき
ものおもふとねられぬねやの窓明てこよひもみつる在明の月
ふけぬるか河音たかしみなせ川山本遠く月もながれて
露おもる袂はなれて天雲のよそにも月はかたぶきにけり

真直
枝直
千直
景直
元直
尙忠

○惜月 月をしむ

- 月もはかなく ○おしおおもふ ○かたぶくおしき ○あかすもをしき ○人をしむ ○さめまほしく
- さめなむ ○入なんとする ○いるさにちかき ○西なるかけ ○西の山の端 ○さ夜更おた
- 有明のそら ○かぎりなく ○かぎりあれば

万 天原雲なき宵にぬば玉の夜わたる月のいらまくをしも
後 おしなべて峯もたひらになりなん山のはなくば月もかくれし
千 天のはらすめるけしきはのどかにて早くも月の西へゆくかな
同 うき雲のかゝる程だにあるものをかくれなはてぞ有明の月
勅 月も急にながき夜すがらながむれどあかすもをしき秋の空哉
とひなれし袖の中には入もせで山のはいそぐ月のかげかな
あはれとてをしみもあへず山松のしづえにのこる有明の月
昔よりなれぬる月のかげながら老てぞいとやしたしかりける

よみ人
しらす
雄
保
院
長
景
千
樹

○十三夜 のちの夜

寛平の御時九月十二夜今宵雲浄く月明なりこれ明月無双のよし仰られしより此夜の月を遊ぶことよなれり菊などによせてこよひといへば十三夜にまがふことなしといへり

○御代なが月 ○長月のかけ ○長月の空 ○長月のこよひ ○後のこよひ ○十夜にあまりて見よ
○十日あまりみよ ○ふたよびすめる

千 秋の月千々に心をくだきよて今宵一夜はたへずもあるかな
同 くれの秋ことにさやけき月影は十夜にあまりてみよと也けり
月 ことわりやはれぬる秋の十日あまりみよと思へる月の影かな
代 名に高きなが月の夜の月よし桂のもみちてり増るかも

名に高きもみちはくもる影はあれどすめるは御代の長月の影
くれはてぬ空にまちえて夜はさへも長月の月の影ぞのとけき
まらもあへず夕暮かけて長月の月の奥ある影のよどけさ
秋の夜のほがらくと天の原てる月かけに鴈なきわたる
あらざらん後と思ひし長月の今宵の月を此世にてみし
大はしま國の底ひにてりとをるかけや千秋の長月のかけ
かきつ田のいろづく露にてりしきて今宵の月のあかくも有哉

よみ人
匡 衛
資 隆
入道攝政
芦 庵
千 隆
枝 直
眞 淵
景 樹
幸 年
豊 秋

○鴈 秋のかり

うゑたてし庭の小松もかけさびて長月しるき月の色かな
から人はかくともしらでながむらんこよに名におふなが月のかけ

久 龍
有 功

春のなかばに遠くかへりたるが秋のなかばにくるなり

- かりさなく音 ○かりのつばさ ○鴈のなみだ ○かりのゆきよ ○かりのつら ○かりの使
- かりの玉章 ○はつかり ○はつかりがね ○くるかり ○こぶかり ○さわたるかり
- なびくかり ○雲のかり ○天さぶかり ○天つかりがね ○天傳ふかり ○おつる鴈がね
- 秋のかりがね ○やごなかりがね ○衣かりがね ○わさ田かりがね ○なる鴈がね ○此世はかりさ
- 友よぶ ○むれぬる ○峯飛こゆる ○はれ打かはす ○羽風 ○おのが羽風
- おほひ羽 ○いくつら ○つらも亂れず ○數かくもす ○からる數そふ ○聲をほにあげて
- きゆる面かけ ○田面におつる ○稻葉におつる ○雲間をわたる ○あしべになるよ ○おのがこ世
- こしろ ○都にむかふ ○都を旅さ ○いまだ旅なる ○いづくをやど ○れぐら定めず
- 宿もさだめず ○雲にまざるよ ○雲路にむさぶ ○雲路にまよふ ○雲のいづく ○雲のはたて
- きりの上ゆく ○きりにしなるよ ○朝ざりがくれ ○そるさもわかぬ ○浜にしなるよ ○秋風寒み
- 嵐をわくる ○月の下ゆく ○月にかげしる ○月にくまなす ○月にうかれて ○月に横ざる
- 月にあらはる ○あらはるよ ○さ夜深き ○さ夜ふけて ○やみの夜深く ○夜寒の衣
- 夢おどろかす ○れ覺にさく ○枕にちかく ○窓にほのめく ○門田の面 ○山のは
- 眞砂の上に

名所 伏見の田井(山城) 鳥羽田(同) 廣澤(同) 大井川(同) 佐保川(大和) 田

簀の島(攝津) 住の江(同) 難波瀉(同) 明石瀉(攝津) 堅田の浦(近江)

久かたのあままもおかず雲がくり今ぞゆくなるわさ田かりがね
大くらの入江なるなりいめ人のふしみの田井に鷹わたるらし
秋風の山吹の瀬のなるなべに天雲かける鷹にあへるかも
まつ人にあらぬものから初鷹の今朝なく聲のめづらしき哉
秋風にさそはれわたるかりがねは物思ふ人の宿をよかなむ
玉章はかけてきつれどかりがねのうはの空にもきこもなるかな
吹まよふ雲をわたる鷹がねの翅にならす四方の秋風
わたの原八重の汐路にとぶ鷹の翅の波に秋風ぞふく
ことづけてとふべき物をはつかりのきこもる空ははるかなりけり
打むれてわたる鷹の羽風には天のかは波さわぐらんかも
見わたせば穂のへきりあふ櫻田へ鷹なきわたる秋の夕暮
ふるさとを秋しも鷹のわかれけむくるを聞だにかなしき物を
有明の月まつほどをなぐさめて雲の鷹も鳴て過らむ
秋風にふかれてわたるはつかりのこゑめづらしき雲の上かな
さり深みくれぬとみればかりがねの聞ゆる空に入日さすなり
雲路とぶ鷹の羽風の音づれて軒の萩原雨そよぐなり

家持 元方 同 俊成女 鎌倉右 好忠 宜長 千隆 久風 同

○鳴

月清きつたの細江の秋風にひとりしぐれて鷹は來にけり
かり鳴て秋風さびし菅原やふしみの里の夕ぐれの空
眞萩ちる野ぢの玉川月すみて空ゆく鷹のかげぞうつろふ
物おもふ程にや秋のたけぬらん雲の鷹も音づれにけり
秋のさる霧の衣のうすければかりがね寒く猶きこもらし
夕付日さすや岡べのきり晴て松ばら遠くかりわたるみも
山端の豊はた雲に打なびき夕日の上をわたるかりがね
明ばの山べはるかにとぶかりの聲さへきりにかくれけるかな

秀雄 有信 正隆 知紀 美樹 永章 景樹 同

野澤田などの水邊にすめるものなりはねがきとは立ありくに羽をつかふを云り物さ
びしき物こひしきなどを鳴にそへてよめり
○鳴の羽がき ○鳴の羽音 ○鳴のふしぎ ○鳴の床 ○鳴たつた 〇しぎたつ 澤
○たつ鳴 ○ふす鳴 ○敷かく鳴 ○はれをさ ○羽音も寒き ○のぼり羽
○いくも羽 ○も羽がき ○月に羽かく ○さびわたる ○草根にふす ○打しきり
○れ覺して ○あかつき ○曉しるき ○曉ごさに ○あり明の月 ○月すみて
○さ夜ふけて ○夜もすがら ○まだ深き夜 ○床の夜寒 ○夕まぐれ ○あさばらに
○きりまにむせぶ ○露はらふ ○秋風 ○山田 ○小山田 ○外面の小田
○門田のけしき ○田井 ○田づらの澤 ○澤田 ○澤田のあしま ○澤べのまこも
○澤べの床 ○澤べのみづ ○もる人の袖 ○物こひしき ○ものかなしき ○物さびしき

○わびしかりけり

名所

伏見の澤(山城) 長岡(同) 芹川(同) 伏見の里(大和) 猪名野(攝津)

旅にして物こふしぎのなく事も聞えざりせば戀てしなまし
はるまけて物かなしきにさ夜更て羽ふりなく鴨たが田にかすむ
しながどり猪名のふし原とびわたる鴨の羽をとをもしろき哉
心なき身にもあはれはしられけり鴨たつ澤の秋の夕ぐれ
あかつきの鴨の羽がきもよはがきかきあつめてぞわびしかりける
明がたに夜はなりぬらし菅原やふしみの田井に鴨ぞ立ぬる
澤水に羽打ならしなく鴨のあさるあしべに日はくれにけり
廣澤のあしまの月は夜はなれど明ぬと鴨のたつ羽音哉
夜もすがら秋の野風にちる露の敷かきあへぬ鴨の羽がき
露ふかき猪名のふし原たつ鴨の羽風に月の影ぞこぼるよ
さびしさはいづこもおなじ夕ともしらでや鴨のよそに立らむ
明ぬとて鴨は立てども大澤のあしまの月はかげもさわかず

○鶉

うづら

うづらとはうつるの義にてよく其居を移す心なるべし草がくれはいめぐるものなればなり

○うづらなく ○うづらふす ○うづらおきなふ ○うづらなす ○うづらかり ○うづらなく

大島 西行 季経 廣海 同 宣長 千隆 夔滯 景樹

- うづらはふ ○うづらの床 ○うづらさり ○うづら衣 ○秋をうづら
- はさうづら ○なくうづら ○野べのうづら ○夜ほのこゑ ○おのぶしぎ
- 床しめつらん ○露の枕に ○草のれや ○草がくれ ○浅茅生 ○秋はぎな
- 小萩原 ○をながくれ ○をがやが下 ○道の芝生 ○浅ち原 ○よもぎの袖
- 下葉や寒き ○草の庭 ○野さなる庭 ○庭のかやはら ○あれたるやど ○田中の里
- ふりにし里 ○外面の野ぢ ○菊田の原 ○寒き野風 ○身にしむ風 ○秋の夕ぐれ
- 夕まぐれ ○夕ぎりながく ○さりのまがき ○あはれも露も

名所

深草(山城) 伏見(同) 大原(同) 春日野(大和) 眞野の江(近江) 野島が崎

(淡路)

萬 うづらなくふりにし里もおもへども何かも妹にあふよしもなき
同 うづらなくふりにし里の秋萩を思ふ人どちあひみつるかも
古 野とならばうづらと鳴て年はへんかりにだにやは君はこざらん
後拾 秋風の下葉や寒くなりぬらん小萩が原にうづらなくなり
同 君なくてあきたる宿の浅ぢふる鶉なくなり秋の夕暮
千 夕されば野べの秋風身にしみて鶉なくなり深草の里
新 秋をへてあはれも露も深草の里とふ物はうづら也けり
あれまさる里はうづらのとことにはさびしき物を夕暮の聲

家持 しみ人 通宗 時綱 俊成 慈圓 契直 枝直

かりくらし秋の野守の宿かれば庭の小萩にうづらなくなり
 川きりに巨勢のしの原見えねども夜は明たれや鶉鳴たつ
 ふか草やなれても秋の夕ざりに猶ふる里と鶉なくなり
 尾花ちる麓の野への秋風をたれにかこちて鶉鳴らむ
 住すてし程もへなくにふる里は鶉鳴野となりにけるかな
 秋をへてあれのみまさるふる里にちかごろ住はうづらなりけり
 野分せしあしたの原は風あれてあらぬ方にも鶉鳴なり
 衣打里をはなれてきけば又尾花がもとに鶉なくなり

梁景安大尊久廣有
 樹守秀孫胤海
 卿

○小鷹狩

こたか こたかやいり

六帖に大鷹狩を冬とし小鷹狩を秋とす詞は冬の部にくはしく出せりたゞ秋のよせだ
 にあれば小鷹狩になるなり

- 秋のわが鷹 ○秋のはつ鷹 ○あはする鷹 ○もくちふの鷹 ○のへのあらたか○たてふの鷹
- うつらふの鷹 ○秋山のみざりの鷹○小鷹手にすゑ○はしたか ○このり ○葉このり
- 秋わたるのこり○はやぶさ ○駒なべて ○かりくらす ○かりつくしてん○かりにのみこそ
- かりにきて ○秋のかり人 ○野へのかり人 ○まがり ○小鳥 ○むら鳥
- 秋をうづら ○野べにぞやざる○野べにまごふ ○野にも山にも ○秋の花野 ○小萩原
- 百草の花 ○花ふみしたき ○浅ぢふみ分 ○庭草を ○しら露に きりふかみ

名所

嵯峨野(山城) 深草野(同) 交野(河内) 粟津が原(近江)

後 同 後拾 同 六

家づとにあまたの花もをるべきにねたくも鷹をすゑてける哉
 かりにのみ人のみもればをみなべし花の袂ぞ露けかりける
 かりにこむ人にをらるな菊の花うつろひはてん末までもみむ
 秋のゝにかりぞくれぬるをみなべしこよひばかりは宿もかさなん
 おもひ出て戀しくも有か粟津野の小萩が原にわがもきしかり
 かり衣萩にするまで日ぐらしに鶉ふす野とあさるみや人
 くるす野やあしたの風もはやぶさの手ばなれてちる秋萩の花
 深草や行ての小萩花みえて鳥狩しつべく野はなりにけり
 かりくらしかへるかた野に月ふけてをぶさもさやに秋風ぞふく
 たかの名のつみもわすれて村雀さわぐかり田にかりくらすかな

兼貫能元家千敏信濱
 盛之宣輔持冲隆則友臣

○霧

きり

きりはもと用語の体言となれるなり此題いにしへは秋にのみかぎれるにはあらざり
 しこと霞のはるにのみかざらざるが如ししかれども今は後のさだめにしたがふべく
 なむ

- きりこめて ○きりこむる ○きりふたがれる○きりくらしき ○きり深み ○きりたつ山
- きりより奥 ○きりまよふ空 ○きりふきかくる○きり吹おろす ○きりにぬるゝ ○きりにくもれる
- きりにとさせる○きりに分入 ○きりの遠方 ○きりのそなた ○きりのあなた ○きりのひま
- きりの絶回 ○きりのまよひ ○きりのまがひ ○きりのとばり ○きりのまがき ○きりの海

○きりの中 ○きりの上ゆく ○きりの下こく ○きりの下道 ○初ざり ○うすきり
 ○天つきり ○むら霧 ○八重たつ霧 ○うきたつきり ○朝きり ○朝ざりかくれ
 ○夕ざり ○秋ざり ○初秋ざり ○袖の秋ざり ○ふる秋ざり ○秋のかざり
 ○おきそのきり ○山ざり ○川ざり ○水ざりあふ ○天ざりあひ ○ふる
 ○音もせでふる ○ぬるゝ ○しなるゝ ○朝ちめり ○朝ぐもり ○天ざらひ
 ○打ざらし ○立まふ ○立のぼる ○立こむる ○立へだつ ○へだつる
 ○こむる ○麓をこむる ○かくす ○さづる ○さづる行先 ○わたる
 ○たなびく ○たえなくに ○ほのめく ○はるゝ ○月にはれゆく ○いぶせき
 ○分てふ ○ゆくさきたざる ○風のたえ間 ○山風にはるゝ ○おきその風 ○夜をのこす
 ○明ぬ夜深き ○山下くらく ○山風にはるゝ ○おきその風 ○夜をのこす

大野山きり立わたるわがなげくおきその風に霧立わたる 憶 良
 しなが鳥猪名野をみれば有馬山夕霧立ぬ宿はなくして よみ人 しらず
 かきたをりたのむ山霧深きかも細谷川に波のさわげる 同 同
 うら近く立朝ざりはもしをやく烟とのみぞみえわたりける 同 同
 むつまじきいもせの山としらねばやはつ秋ざりの立へだつらむ 伊 家
 秋山の麓をこむるうすざりは裾野の萩のまがきなりけり 太 上天皇
 さびしさはみ山の秋の朝ぐもりきりにしをるゝ楨の下つゆ 清 輔
 うすざりのまがきの花の朝じめり秋はもふべとたれかいひけん 慈 圓
 夜はにたゝかびやがけぶり立そひて朝ざり深し小山田の原

時雨にも雨にもあらぬ秋ざりのたつにも空はかきくもりけり よみ人 しらず
 朝日さす高根のみ雪空はれてたちも及ばぬふじ川の霧 家 隆
 朝あらしのはげしき山のふもと川となせは霧ものぼりかねつゝ 長 流
 へだてゝも明る光は花すゝきはのくゝみゆる野べのあさざり 宣 長
 常よりもひきくなるまで霧こめて繪によく似たる夕暮の山 廣 海
 川そひの堤をこめて立きりに限りもみえぬ秋の夕なみ 声 庵
 その色と花はみえねど朝ざりのかをりみてるや野原成らん 顯 忠
 旅人のともし捨たる松の火のきりにしめられる朝ぼらけかな 久 胤
 わふ坂の關の杉むらきりこめてしらみきねたる有明の月 景 樹
 楸ふくあらしの末に波みえてたえなくはるゝ佐保の川霧 千 廣
 かの山のはなわにかゝる薄ざりをかたぶく月の影にみるかな 尊 孫

○鹿 しか

ふるくはたゝかとのみもいへり妻をこふるよしをもはらよむ但妻かふ鹿とはいふべ
 からす妻こふる鹿とつゞくべきよし鈴屋の大人玉霰にくはしく辨へられたり

○か 鳴く ○をが ○をしか ○おしかなす ○さをしか
 ○さをしかの爪だにひぢぬ ○おほトか ○めが ○めトか ○か
 ○かトもの ○かのこ ○くトか ○しか ○鹿なく山 ○立まふしか
 ○たゝむ鹿 ○朝だつ鹿 ○妻こふる ○妻さふ鹿 ○ふす鹿 ○實による鹿

- 峰ゆくしか ○ 霜おく夢 ○ つまごひ ○ つまこふる ○ つまごぼせる ○ まつ待山
- 鳴音かなし ○ ひさりなく ○ うらぶれてなく ○ こひてなく ○ かひよさなく ○ 何をかひよさ
- 夜たゞなく ○ 露分てなく ○ 秋萩のぎなく ○ 月になく ○ 外山になく ○ 山下こよみ
- 山よびこよみ ○ よひさらず ○ 音にたつる ○ 聲しきる ○ 聲もしぐれて ○ 聲のまぢかき
- 嵐にたぐふ聲 ○ さごゑ ○ 立ならず ○ 峯立ならし ○ 尾上にたつ ○ めれて朝だつ
- ふみしだゝ ○ むなわく ○ 稻葉をわけて ○ ふしご ○ ふしご定めぬ ○ 夜ほの草ぶし
- 小野の草ぶし ○ 草にふす ○ おのがすむ野 ○ 朝ふしかれて ○ 朝ふす小野 ○ 朝ふす野べ
- 野べをわくる ○ 野べより山にいる ○ み山にいる ○ み山にかへる ○ 山のかひ
- 山かげくらく ○ 山のかげ ○ すむ山ちかく ○ くるゝ外山に ○ 高砂に ○ 高砂の尾上
- 朝ゆく谷 ○ す所のゝ原 ○ 秋萩に ○ 萩をしがらむ ○ 萩が花妻 ○ 入がたの月に
- さりにまごへる ○ きりにかくるゝ ○ 吹風の身にしむ ○ 夜ほのあらし ○ かすかなる ○ ほのかなる
- 夕ぐれて ○ 庵ちかく ○ 枕になるゝ ○ 枕にちかき ○ 袖ぬるゝ ○ れ覺にきく
- 曉がた ○ いく夜の友 ○ ぬる夜なき ○ あはぬ夜多く ○ 秋の夜たゞ ○ 世をあきはつる
- すびひく

名所 小倉山(山城) 嵐山(同) 嵯峨野(同) 伏見山(同) 朝日山(同) 春日野

萬 夕されば小倉の山に鳴鹿の今宵はなかついねにけらしも
 同 秋萩のちりのまがひによび立て鳴なる鹿の聲のはるけさ
 同 此頃の朝けにきけばあし引の山をとよもしさを鹿なくも
 古 妻こふる鹿ぞなくなるおみなべしおのが住野の花としらすや

舒明天皇 湯原王 家持 躬恒

千 さもこそは都こひしき旅ならめ鹿の音にさへぬるゝ袖かな
 同 さびしさを何にたとへむをしかなくみ山の里の明がたのそら
 同 きくまゝにかたしく袖のぬるゝ哉鹿の聲には露やそふらん
 新 野分せし夜はの草ぶし荒はてゝみ山に深きさをしかの聲
 同 たぐへくる松のあらしやたもむらん尾上にかへるさるしかの聲
 同 をぎの葉にふけば嵐の秋なるをまちける夜はのさを鹿の聲
 同 さをしかの妻どふ宵の岡のべに眞萩かたしき獨かもねむ
 眞 袖ぬらすつまとおもへど鹿の聲きかぬ夕はさびしかりけり
 枝 深からぬ外山のいほのね覺さへさびしき夜はのさをしかの聲
 契 秋ふかみ山田のかけ樋水たえてかよひかはるはさをしかの聲
 千 きり深きもふべの山の鹿の聲馴ても袖のたゞならぬかな
 景 なく聲ぞあかつきがたにきこもなる外山の鹿もね覺しつらん
 久 浅ちはら野分をかへす山風に夜がれし鹿の聲をきく哉
 同 ふけぬるか月は軒ばの山ながら野べよりかへるさをしかの聲
 知 鹿の聲きこゑぬ里の夕ぐれはたゞ大かたにかなしがるらむ
 同 きかずしてあらましかばとおもふまでもふべかなしき鹿の聲かな
 梁 をしかなく片山里の秋の聲こやさびしてふかぎり成らむ

雅光 廣言 秀繼 篠蓮 攝政 眞淵 順通 枝直 契冲 千蔭 景樹 久胤 同 知紀 同 梁

をしかなく片山里の秋の聲こやさびしてふかぎり成らむ

雅光 廣言 秀繼 篠蓮 攝政 眞淵 順通 枝直 契冲 千蔭 景樹 久胤 同 知紀 同 梁

すみよしの松の嵐となりにけり遠里小野のさをしかの聲
鹿のねは遠きまされり中空の月のあはれや打そはるらん

尊孫
有功卿

○擣衣 砧 衣うつ きぬた

きぬたとは衣板といふ事にてきぬを板に巻て打をいふ名所はいつくにもあるべし

- きぬたのつち ○きぬたの音 ○きぬたの聲 ○ひやくきぬた ○いそぐきぬた ○夜はのきぬた
- 秋のきぬた ○賤かきぬた ○里のきぬた ○里わのきぬた ○さきあらひ衣 ○ふる衣
- かり衣 ○鹿のさ衣 ○袖つか衣 ○秋さり衣 ○しづはた衣 ○山がつの衣
- 波かけ衣 ○鹽やき衣 ○から衣 ○露分衣 ○しのぶの衣 ○花ずり衣
- こき衣 ○しづのめ ○なごめ子 ○巻かへす ○千たび八千度 ○うつこゑ
- うつ音たかく ○うちつける ○うちしきる ○うちすさぶ ○うちもれぬ ○うちあかす
- うちもたゆまぬ ○うちわびて ○うちおどろかす ○してうつ ○千たびうつ ○手もすまにうつ
- 手たまもゆらにうつ ○たれこひて打 ○妹がうつ ○おきぬてうつ ○れざめうつ ○霜にうつ
- 月にうつ ○うたぬ夜もなし ○つちの音 ○聲うらむ ○まぢかき聲 ○遠方のこゑ
- 雲ぬにひやく ○空になりゆく ○遠くなる ○こなたかなた ○きよわびる ○きよなるよ
- よそにきく ○れ覺にきく ○夢さめてきく ○夢さまたぐる ○夢おどろかす ○うたよれに
- れぬ夜あまた ○れぬ夜の友こ ○れられぬ夜は ○ながき夜 ○秋は夜寒に ○曉かけて
- 月にうらみて ○月にさやけき ○月にすむ ○風の身にしむ ○秋風寒く ○浅ちが露
- 浅ちふの宿 ○あましろや ○すまのしや ○賤がさゝや ○野べのいほり ○ふる郷寒く

後拾

さ夜ふけて衣して打聲きけばいそがぬ人もねられざりけり

大輔

同 千 同 新 同 同 六 同 同 代

うたよねに夜や更ぬらんから衣打聲高くなり増るなり
さ夜ふけてきぬたの音ぞたもむなる月をみつゝや衣打らん
松風の音だに秋は寂しきに衣うつなり玉がはのさと
みよし野の山の秋風さ夜更て古郷さむく衣うつなり
里はあれて月やあらぬと怪てもたれ浅ちふに衣うつらむ
まどろまでながめよとてのすさび哉あさのさ衣月に打こゑ
たがために打とかはさく大空に衣かりがねなきわたるなり
風寒みわがゝら衣うつ時ぞ萩の下葉もうつろひにける
から衣うつこゑさけば月清みまだねぬ人を空にこそきけ
あし垣に木葉吹しく追風の音もまぢかく打衣かな
夜もすがら萩吹風にねぬ人をいかにさめよと衣うつらん
浅ちふやたが秋風を身にしめて獨夜寒の衣うつらむ
たれきけと夜寒の衣打たへにあはれそふらんさらしなの里
秋風の寒く吹ぬる夕よりひと夜もおちす衣うつなり
あはれたれつゝりさせてふ虫のねにおどろかされて衣打らん
有明の月よりこゑぞひやくなるね覺てたれか衣打らん
山里の松のあらしの遠近にたもめばしきるさ夜ぎぬた哉

兼房 覺性法親王 俊頼 雅經 攝政 宮内卿 同 貫之 契沖 典侍 宣長 枝直 芦庵 依平 景樹 廣足

秋風の打ふくたびに音づるゝきぬたは萩の友にやあるらん
 なるこにはなるゝ山田のさをしかも驚くばかりうつ衣かな
 わがせこが衣をのみと思ひしに人の夢をもしづはうちけり
 から衣あからさかにも打出て秋風さそふたま川のさと
 音たかく衣打なべにさ夜中と思ひし月はかたぶきにけり
 衣うつかた山里上月にねて夜寒は身にもかづくなる哉
 世に遠き木曾のみ山の麻衣月にうてとはたがをしへけむ

知 紀
 尊 孫
 久 胤
 廣 海
 同
 有 功 卿
 同

○九月九日 重陽宴 こゝぬかの日

此題は大かた菊また菊の盃などをむすびてよめり重陽宴は宮中にてものせさせ給ふ
 公事なれば今よむには心得なくてはいとかしこきわざ也

- 月日もおなト ○こゝぬかの日に ○長月のこゝぬか ○けふこゝぬか
- けふのまさぬ ○けふのわざし ○かざしのきく ○わかゆてふきく ○たをる菊
- 菊の盃 ○花のさかづき ○君がよはひ ○よはひのばへん ○つきせぬ世
- 千代のかけ ○雲ぬにめぐる ○つきせすめぐる ○ちぎりありてや

拾 同 六 同

なが月の九日ことにつむ菊の花のかひなくおいにける哉
 わがやどのきくのしら露けふごとにく世つもりてふちと成らん
 なが月の九日ごとに百しきの八十氏びとのわかめてふきく
 かぎりなく君がよはひをのばへつゝ名だたる宿の露とならん

躬 恒
 元 輔
 伊 勢
 伊 勢
 伊 勢

代

しぐれにも霜にもかれぬ菊の花けふのかざしにさしてこそしれ
 諸人のたかきにのぼるけふにあひて垣根の菊もかざれにけり
 くす玉の其緒ぬきかへ菊の花かづらにつくるけふも來にけり
 長月のけふのためとやきのふよりつくろひたてし菊のさせ綿
 いざけふは山にのぼりてうき事を酒にやくまん菊の下みづ
 あら玉の年もたかきにのぼらまし八重さく菊のけふにあひつゝ

重 光
 契 冲
 長 流
 青 庭
 景 樹
 有 功 卿

○菊

きくを古來字音の如く心得來つれど然らず字音と皇國の言とたましく相似たる也橘
 をかくの木質と云ふごとく香氣によりてもとより呼ならへる名なりときこ也

- きくの本 ○きくの色々 ○きくの葉 ○菊の花すり ○菊の花かづら ○菊の葉
- 菊のここの葉 ○菊のえだ ○菊のさせわた ○菊の酒 ○菊の盃 ○菊の露
- 菊の葉 ○菊の谷水 ○菊の下水 ○菊の淵 ○菊うる市 ○初菊
- しらざく ○八重さく ○秋菊 ○若ゆてふ菊 ○うれしき菊の ○をしむさきく ○きくにだに
- むら菊 ○つむ菊 ○圓の菊 ○花なき時 ○盛久しき ○匂ふかぎりは
- まがきの菊 ○岡への菊 ○八重さく ○花なき時 ○こがれの色 ○たぐひなき色
- おのれひざりぞ ○八重かさなる ○白たへに ○うすくこく ○いくたびをりて ○折まごふ
- 千くさに匂ふ ○折袖匂ふ ○山路のたれ ○うつつしうるゝ ○老もかくれず ○よはひのぶさぞ
- 色わきがたく ○色のうづるふ ○老てふこころしらぬ ○老もかくれず ○よはひのぶさぞ
- ぬれなば袖の ○宮人のかさし ○老てふこころしらぬ ○老もかくれず ○よはひのぶさぞ

- 千年まで ○万代の秋 ○ながき世の例 ○ゆく末遠く ○長々しくも ○久しかるべく
- かはらざりけり ○仙人の家 ○もよしきに ○九重の庭 ○九重に匂ふ ○雲の上
- あまつ星 ○月影に色みえまがふ ○月にうつるひ ○袖の月かげ ○有明の月
- 下葉に月も ○なが月 ○猶なが月 ○初しも ○いたゞく霜 ○霜にまがふ
- 白髪にまがふ ○朝ざりにしめる ○きりのまがき ○おく露 ○しら露 ○露のひかり
- 露も心おく ○露もあらたに ○露ながをらる ○朝なく ○百草の花のさぢめ
- 池の底にも ○木のしらなみ ○さゞ波よする ○見つゝくらさむ ○めもかれず ○うしろ安くも
- 心あてに

名所 大澤の池(山城) 紫野(同) とな瀬(同) 佐保川(大和) 田養の島(攝津) 吹
飯濱(和泉) 吹上の濱(紀伊)

古 一もとゝ思ひし菊を大澤の池の底にもたれかうゑけむ 友 則
同 うゑしうゑば秋なき時やさかざらん花こそかれめ根さへかれめや 衆 平
後 萬代の霜にもかれぬ白菊をうしろ安くもかざしつる哉 伊 衛
千 千はやぶる神代のこと人も人ならばとはましものをしら菊の花 八條前相國
同 君が代を長月にしも白菊のさくや千年のしるしなるらん 法 性 寺
新 山川の菊の下水いかなればながれて人の老をせくらむ 興 風
同 いのりつゝなほなが月のきくの花いづれの秋かうゑてみざらん 眞 之
同 霜をまつまがきの菊の露のまに置まよふ色は山の端の月 宮 内 卿
勅 ぬれてをる袖の月影更にけりまがきの菊の花のうへの露 鎌 倉 右

六代 菊のはなうゑたる宿のあやしきは老てふ事をしらぬ也けり 眞 之
たぐひなき色にもある哉きくの花いかなる露のおけば成らん 謙 徳 公
山人の松のはすぐす谷水によはひくはふる菊の下つゆ 長 流
新代の平のみやにめで初し菊はちくさになりけるかも 眞 淵
けふにあふ露のこの身もいつまでのちぎりかゝけししら菊の花 芦 庵
見れどあかぬ匂ひなりけり長月の光をへたる白菊の花 春 海
しらぎくのぬれてさえたる朝月夜此曉やしくれ初けむ 久 胤
今も猶かはらざりけりにしへの人のめでけむしら菊の花 節 子
しら菊の花のさかりに成にけりおくらん露の千世のがすみん 景 樹
花といへばなべてあだなる世中にちることしらぬ菊も有けり 有 功 卿

○紅葉 もみぢ

もみぢはもみいづといふことにて衣を紅葉にするに紅花をもみ出して染ればあかく
色づくに見たてゝいへるなりされば木の名にあらすして色づける木葉におへる名な
り

- もみづる色 ○もみぢば ○もみぢあかくぞ ○もみぢしぬらん ○もみぢのむらこ ○もみぢがね
- もみぢをわくる ○もみぢのかげ ○もみぢかきれ ○もみぢの衣 ○もみぢの錦 ○もみぢのぬさ
- 初もみぢ ○うすもみぢ ○むらもみぢ ○こきもみぢ ○深きもみぢ ○匂ふもみぢ葉
- 下もみぢ ○下てるもみぢ ○は入のもみぢ ○千入のもみぢ ○櫓のもみぢ ○一もこもみぢ

あらしはぬもみちの色やまさるらん横たつ山の秋のしぐれに
 よの常の色ならめやはさがの山もみづる秋のいでましとこ
 浅茅野の小野のふせやにたく芝の烟も匂ふ柿もみちかな
 ことさらに下ゆく水も秋すみてうつるもみちのかげをまらけり
 ぬば玉の黒木のませに月おちてよそめかなしきむらもみち哉
 岩根ふみのばれば松の木間より谷のもみちもあらはれにけり
 はつしぐれふりしばかりの跡みえて梢のみこそ色づきにけれ
 秋深き山のしづくや染つらん岩根のこけもすすもみちせり
 てりかはす月と紅葉の中山を折々めぐるむらしくれ哉
 日かげさすあしたのきりのたえ間よりぬれても匂ふ初もみち哉
 きりまかふもみちのは山奥みえて木深くのこる夕日影かな
 くれわたるそなたの松のすき間よりけぶりを分ててるもみち哉
 もすのなにかた山林かたえよりつぎく染てのこる葉もなし
 匂ひ出るもみちは秋の花なれどかさす心はしづけかりけり
 水清く山かすかなるあたりより折こしもみち色のことなる

○楓 かへで

和名抄には鶏冠木とかゝれたれど俗に随ひて楓の字とかきつ名義は蝦蟇の手に似た

契 眞 日 千 重 知 景 尊 永 久 勝 智 有 同
 冲 淵 善 蔭 老 紀 樹 孫 朝 章 鳳 繼 信 功 痴

るもゑとぞ

○かへるで

○錦きて家にかへるで ○秋もかへるで

○わかまへるで

○いろをまかへで

○いろかへで

○おもかげかへで

万 わがやどにもみづかへるでみる毎に妹をかけつゝこひぬ日はなし
 六 みよし野のきしのもみちし心あらばまれのみもきを色かへでまで
 はつしほと秋のあはれのはじめにて千入もあかぬかへるでの色
 見るのみはあかぬ心にかへるでのかへる手ごととに折もてぞゆく

田村大嬢
 忠 房
 千 蔭
 た せ 子

○柞 はゝそ

はゝそは檜の類なり俗にほうぞといへる木にて色のかからぬものなり

○はゝそ原 ○はゝそ葉 ○はゝそ葉のはゝ ○はゝその色 ○はゝそちりくる
 ○はゝその杜 ○うすきはゝそ ○色の濃からぬ ○うすきならひを ○染れども

万 山しろの岩田の小野の柞原みつゝや君が山ぢこもらむ
 古 佐保山のはゝそのいろは薄けれど秋は深くも成にける哉
 同 秋ざりはいたくな立を佐保山のはゝそのもみちよそにてもみん
 同 さほ山の柞のもみちちりぬへみよるさへみよとてらす月かげ
 後 かなれば同じ時雨にもみちする柞の杜のうすくこからむ
 千 秋といへばいはたの小野の柞はらしぐれもまたずもみじしにけり
 勅 さほ山のはゝそのもみちいたづらにうつろう秋に物ぞかなしき

宇 是 友 是 基
 合 則 則 則 盛 網
 右 盛 網

○櫨

はじ
しぐれてもうすき柞をしら露のひとしほ染と思ひける哉
はゝそばらかつちり初て露霜の心あさゝや色にみすらん
秋深み色こき稻の中にしも立るはゝその薄くも有かな
かげうすき秋の夕日に佐保山の峰のはゝそは色付にけり
岩田野の小野のはゝその薄もみちかひなき色にふる時雨哉
夕ぎりの絶間のはゝそ薄からぬ色は日かげや染てくれけん

春 千 廣 依 蒼
遊 隆 名 平 樹
鹿 實 隆 算 隆 院 流 庵 冲

今の芙蓉木といふものなり弓につくるこれなり

- はしもみぢ ○は下の立枝 ○は下の弓の ○は下の木 ○はしめてぞ

金 新 續 勅 代

もすのなくはしの立枝のうすもみぢたれかは宿の物とみるらん
うつらなくかた野にたてるはじめもみぢちりぬばかりに秋風ぞ吹
長月の末野の原のはじめもみぢしぐれもあへず色づきにけり
ふる郷のみがきが原のはじめもみぢ心とちらせ秋のこがらし
初しぐれまだふらなくに片岡のはじの立枝は色づきにけり
もすのゐるしらべはあれどふる里のはしの立枝はとふ人もなし
はじめもみぢむすき柞にまじればやわきて立枝の色こかるらん
夕付日さやかにみゆる山もとのあるじもかしきはじめもみぢ哉

仲 親 長 洞 家 長 親 仲
實 隆 算 隆 院 流 庵 冲

○檀

まゆみ
はつ霜を置にし日より朝なゝはじの立枝に出てこそみれ

知 紀

いにしへより多く弓につくれり故に弓のよせある詞をとりてよむ也

- まゆみ色づく ○そつ彦まゆみ ○深きまゆみ ○岩がまゆみ ○細川まゆみ ○くれなゐに塗る

六 同

引ふせてみれどもあかぬくれなゐにぬれる眞弓のもみぢ也けり
うつろふもうれしかりけりわがために深きま弓の色をみすれば
いつしかとなかば過行年の君のは山のま弓色付にけり
この頃はま弓のもみぢ本末もわかぬばかりの色にいでけり
きのふけふあすかの里もしぐるらん眞弓の岡は色づきにけり

眞 之
よみ人
枝 直
春 夫
景 樹

○蔦

つた

松あるひは岩などにはひまつひたるがふかくもみぢするさまをよむべし

- つたのもみぢ ○つたの色 ○つたのかれ葉 ○蔦はふ軒 ○つたがづら ○つたの下露
- つたの細道 ○つたの細江 ○はふつた ○色づくつた ○岩根のつた ○色ふかき
- はふ木あまた ○櫓にかゝる ○松にかゝれる ○松にもみづる ○松のほづえに ○時しらの松に
- 軒ばにもろき ○むぐらがき ○おのがむきく

勅 續古

秋こそあれ人は尋ねぬ松の戸をいくへもとちよつたのもみぢば
しぐるれどよそにのみさく秋の色を松にかけたる蔦のもみぢ葉

式子内親王
俊成女

新編古

うつ山越しむかしのあとふりて蔦のかれ葉に秋風ぞふく
うき秋にかわかぬ露をかなしともいはねの蔦のいろに出ぬる
みるくもはては朽葉となる色を露にあらはすつたかづら哉
つたかづらはひ別れたる辻やしろ秋の色こそ神さびにけり
松が枝にまつはれながらつたかづら心へだてゝ色に出にけり
つれなさの松にならば秋の色のはれをみする蔦かづらかな

後 京 極
春 勝 滿
春 門 繼
年 平
千 隆

○秋霜

あきのしも

なべては冬の物なれば秋のものにむすびて秋のなかばよりやゝおきそむる趣をよむ
べし

- 霜がれ ○霜のはだれ ○秋のしも ○秋のはつしも ○はつ霜 ○初霜日し
- 野へのしも ○朝しも ○夕ぐれ ○夕ぐり ○色のさびしさ ○むしの音かるゝ
- を花 ○草葉 ○浅ぢはら ○葛原 ○わさ田 ○さゝ枕
- 秋の末 ○長月の空

六 新 詞

初霜もおきにけらしなけさみれば野への浅ぢも色付にけり
ね覺する長月の夜の床寒み今朝ふく風に霜や置らん
花すゝき穂にはおけども初霜の色はみえずぞ消ぬべらなる
秋もやゝうつろふ花に色みえて草のはつかに霜ぞ置ける
よひくくの空に消ゆく長月の有明の影や霜とおくらむ

能 公 宣
公 貫 繼
土 之 綱
景 満 之 樹

○惜秋 送秋

秋をよしむ 秋をおくる

惜春に同じく秋のくれゆくを惜む也送秋は秋のかへりゆくをおくる心なり

- したへごも ○をしめごも ○をしむ心に ○をしむ袂に ○いはんかたなくをしき
- すぐらくをしも ○秋のさまり ○秋の日も ○秋のわかれに ○めぐりこん秋 ○過ゆく秋
- むなしく送る秋 ○くれ行秋を ○さまらぬ秋をしりながら ○くれぬさばかり ○かぎりなく
- かへらぬものを ○行かたゝごる ○さぞさまるらん ○いさかくしも ○有明の月 ○年つもる人こそ

元 源 子 實
廣 海
景 樹
景 樹
枝 直
眞 潤
守 覺 法 親 王
頼 綱
資 通
後 人 綱
廣 成
後 人 綱
夕 日 綱
身 綱
と 綱
お の 綱
う き 綱
い か 綱

あまたよびつらさにこりしゆふべさへさてはあらぬ秋のくれ哉
 もみぢ葉も今はちりにし山ざとに月の影さへとはすなりにき
 すがはらやふしみのくれの山風も夜寒になりてふくる秋かな
 露深き一本ぎくをのこし置てくれゆく秋の心をぞおもふ
 延 廣 尊 有 功 卿 海 朝 卿

○暮秋 殘秋 くれの秋 のこる秋

九月はすべて暮秋といふべし秋の日數のやうくくれゆくをもくれはつるをもよび
 なり

- 秋のくれがた ○秋は暮らん ○秋はつる ○秋はてがたき ○秋のこまり ○秋をおくる
- 秋ぞすくなき ○秋のふかさ ○秋の末にぞ ○秋の末葉 ○秋のつたみに
- 秋のいろの ○秋ずりの ○ゆく秋 ○ゆく秋をしく ○くれゆく秋 ○しかすがの秋
- かきりま秋や ○長月の名のみ ○長月もむなく ○まだ長月の空 ○くれてゆく ○かきりまて
- 今はのころの ○残りすくなく ○同じ日數に ○うつろひゆく ○かへる道には ○もみぢ葉の別れ
- もみぢ散ころ ○もみぢを幣さ ○色かはる草 ○まれく花薄 ○末野の千草 ○木葉にうづむ
- 色かはる露 ○しら露のおくても ○木がらしの風 ○吹くる風に ○有明の空に ○有明の月
- 峯にわかるゝ雲 ○四方の山べの ○虫のれもよわる ○鳴よわる虫も ○をしむ心の内 ○なしくやはあらぬ
- 物おもこの限り ○あはれのはて ○後ぞあはれの ○いかで過ぬる ○こそぞさもなく ○さりさもぞ
- おもかげのみ ○心ほそくぞ ○かなしかりけり

後 古 とし毎にもみぢ葉ながす立田川みなとや秋のとまりなるらん
 風之音のかざりと秋やさめつらん吹くるごとに聲のわびしき
 實 之 しみ人 さらす

拾 後 千 新 勅 月 代

くれて行秋のかたみにおく物はわがもとゆひの露にぞ有ける
 もみぢよるころなりけりな山里のことぞともなく袖のぬるゝは
 鳴よわるまがきのむしのとめがたき秋の別やかなしかるらん
 かくしつゝくれぬる秋と老ぬればしかすかに猶物ぞかなしき
 山里は秋の末にぞおもひしるかなしかりけり木がらしのかせ
 うき世をばわが身もこそは秋はつれことわりなくもおしきけふ哉
 長月の有明がたの空の月心ほそくぞかたぶきにける
 わかるゝをあひもおしまぬことわりの名をさへ立て秋の行らむ
 山風のさそひ盡して秋の色は木の本にだにのこらざりけり
 むさしのや千草の花の霜の色におもへば秋のはては有けり
 山端はしぐれふるらし長月の有明の空に雲のかゝれる
 さをしかの立野の原に秋くれて今いく夜とか妻をこふらん
 月清き小松が原も下草のうつろふ色にかけさびにけり
 うつりゆくまがきの菊の露霜に日かげうれしくなれる秋かな
 綱手はすとまやの軒のゆづく月うらさびしくもくるゝ秋哉
 くれて行秋にならひてわれもとや枝にもみぢのとまらざるらん
 何ならぬ限りもものはかなしきにあはれなりける秋のくれ哉

兼 元 紫 能 西 静 俊 長 千 尊 枝 眞 久 敏 千 基 景
 盛 輪 部 因 行 賢 女 流 座 孫 直 淵 胤 則 廣 弘 樹

ことわりに過ても寒し長月の有明の月に霜やおくらん

○九月盡 秋のはて

長月のつごもりの日をいふ暮秋の題と同じく心得べからず

- 秋ぞつきぬる ○秋のゆくて ○秋くれて ○秋もいぬめり ○秋のわかれぢ ○秋も別のけふ
- 秋のなごり ○秋のみなき ○かへらぬ秋 ○さまらぬ秋 ○くれはつる秋 ○いまはの秋
- わかるゝ秋を ○今宵ばかりの秋 ○けふのみの秋 ○けふゆく秋 ○けふにさぢむ ○けふをかざりま
- くるゝけふ ○曉のかれを限り ○あすよりは ○くれむさすらん ○たちのいそぎ ○行方しらず
- うきざきりをも ○わかるてふこさへ ○のこりなく

同

古 夕月夜小倉の山に鳴鹿の聲の内にや秋はくるらん

同 山より落くる水の色みてぞ秋はかざりと思ひしりぬる

同 道しらはたつねもゆかむもみち葉をぬざと手向て秋はいにけり

拾 かなればもみちにもまだあかなくに秋はてぬとはけふをいふらん

後拾 夜もすがらながめてだにもなぐさまむ明てみるべき秋の空かは

千 こよひまで秋はかきれと定めける神代もさらにうらめしき哉

勅 あすよりのなごりを何にかこたましあひもおもはぬ秋の別れ路

續 をしめども野への草葉もかれはてゝ露だに秋はとまらざりけり

代 しぬばかりをしまるゝ哉此秋や秋にわかるゝかざりなるらん

なが月と名にたつ秋もつきぬるををしむ心のなどのこるらん

貫 之 興 風 躬 恒 順 長 兼 小 入 道 前 大 政 小 大 進 淳 國 小 辨 声 庵

ねられねば夜をながしとてかこちてし秋も別のけふぞわびしき
 もふ日いるなごりの空ぞあはれなる別は秋もをしき習に
 長月の有明の月の残りなくなりぬる空にしぐれふる也
 夕付日かげうすれゆく梢より秋も今はとらるもみぢかな
 しら菊のうつろひのこる色はあれど秋はけふこそ限りなりけれ
 あかでもわかるゝ秋のゆくかたは此曉のかねやしるらむ
 ゆく秋を聲の内にもさをしかのしらで鳴らんしのゝめの空

枝 直 日 善 景 樹 光 秋 尊 孫 謙 宣 長

冬之部

○冬

- 冬されば ○冬のきて ○冬がれ ○冬のさびしき ○冬はげしき ○冬の明ぼの
- 冬ごもり ○冬はあらしも ○冬のあした ○冬のゆふべ ○冬の夜さむ ○み冬
- かみな月 ○霜月 ○しはす ○さしのくれ ○さしのはて ○さしのをはり
- さゆる ○さへゆく ○空さゆる ○寒けき空 ○木がらし ○あらしふく
- 風さゆる ○霜寒き ○こほり ○雪こほり ○雲こる峰 ○夕ごりの雲
- ながき夜 ○人めかるゝ

○初冬 はつふゆ

初秋早秋の意におなじ十月朔日より四五日のほどを云ふ時雨ふり嵐の音かはりなど
何となく物すごくなる趣をむねとすまた更衣をもよむなりされど夏に紛ざるやうに
よむべし

- 冬のきて ○冬のくる ○冬は来にけり ○冬来ぬこ ○冬の立くる ○冬たつ雲
- 冬のたつけふ ○冬されば ○冬になる空 ○冬を浅み ○冬のおくまで ○冬がれそむる
- 山さびしがる冬 ○まだきに冬の ○まだ冬なれぬ ○神無月 ○千はやふる神無月
- 衣がへ ○冬の衣 ○あつき衣 ○秋くれて ○秋はてゝ ○秋のなごり
- 秋のかたみ ○秋のあはればさむ ○きのふの秋 ○槍に秋の過ぐ ○なきあかす秋の別

- 木がらし ○北山おろし ○小山風 ○松ふく風も ○朝風寒し ○はげしきけさの風
- 朝けの風 ○きのふにまさる風 ○あらしの北に ○風の音かはる ○風もたまらぬ ○外山ふく風
- 風の音はげしきそふる ○もみぢ吹おろす ○風にもみぢのちる ○もみぢちる ○もみぢちる
- けさは木葉に嵐ふく ○のころもみぢ葉 ○木葉みだるゝ ○木葉ちる ○正木色づく
- もみぢはのふりかくす ○しぐれゆく雲 ○つれにしぐるゝ ○露霜となる ○はつ霜 ○朝けの霜
- 時雨ふる ○霜こそむすべ ○氷そむる ○かけひの水の水 ○朝けの水
- 霜むすぶ ○うすごほり ○うすらひ ○あられふる ○みぞれふる ○はや雪白し
- 岩間の氷 ○外山は雪に ○下草かるゝ ○さまぐの草葉も今は ○しげかりし葎
- 山のはつ雪 ○梢さびしき ○人めかれゆく ○埋火にけふより馴る ○山さこ
- 椎柴の露 ○み山べの里 ○朝戸出寒し ○庭のけしき ○道も感はず ○へだてにもさばらぬ
- わがためさてや ○けふもかなしき夕

後 神無月ふりみふらすみ定なきしぐれぞ冬のはじめなりける

拾 柚山に立けぶりこそかみな月しぐれをくだす雲と成けれ

千 秋のうちはあはれしらせし風の音のはげしきそふる冬はきにけり

同 外山ふく嵐のかせの音きけばまがきに冬のおくぞしらるゝ

同 いつのまに寛の水のこほるらむさこそ嵐の音のかはらめ

新 いつのまに空のけしきのかはるらんはげしきけさのこがらしの風

月 をしむとて秋やあはれはとむらんけふもかなしき夕ま暮哉

よみ人
しらす
能 宣
教 長
和泉式部
教 善
因 基
經 因

さびしさのつま木こるべき宿なればわがためとてや冬のきぬらん
 木の葉ちる空はしぐれて都だにもよさびしき冬は來にけり
 落葉せぬときは山の朝あらしさもるや冬のはじめなるらん
 神な月かた山おろしのどかにもみぢみるへき日にもあるかも
 朝ごとにならす硯のすみやかに手のうら寒き冬は來にけり
 薪つみすしろほりて山ざとはかきこもるべき冬はきにけり
 有明の月もみはて、神な月は山の紅葉初しぐれせり
 冬きぬとことわりがほに音づれて槇の戸過るはつしぐれ哉
 霜いたくおくての稻もかりいれて豊田の里に冬は來にけり
 神な月けふもしぐれむと思ひしをかすむばかりにみゆる空哉

前攝政 契沖 黄中 眞淵 芦庵 李鷹 日善 利和 譽正 有功 有

○時雨 しぐれ

大かたけしきのおもしろきさまをたてよめり又木の葉のちるをも風の音をも時雨
 にまがふおもむきによみつけたり

- しぐれゆく ○しぐれする ○しぐれてわたる ○しぐれこもち ○しぐれしらす ○しぐれのつれ
- しぐれをくだす ○しぐれになりぬ ○しぐれふりおける ○しぐれぬかたも曇る ○しぐれふきまく
- しぐれがちなる空 ○しぐれふる ○しぐれを早み ○しぐれにきほふ ○しぐれをそきく ○しぐれの雨
- しぐるゝ雨 ○しぐれすさべる ○打しぐるゝ ○なみだしぐるゝ ○風やしぐれの ○ほつしぐれ
- しぐれ ○くもるしぐれ ○むらしぐれ ○村山しぐれ ○朝しぐれ ○夕しぐれ

- さ夜しぐれ ○やよしぐれ ○よこしぐれ ○くれなぬのしぐれ ○はれやすき ○やがてはれゆく
- はれまの日かげ ○やすくも過る ○ふるほごもなく ○ふりも定めず ○俄にもふる ○一さほりふる
- わが身のよそにふる ○秋だにもまなくふりにし ○袖にふる ○袖ぬるゝ
- 袖にくもる ○くもりのみこそ ○くもりみはれみ ○かきくもりつゝ ○山かきくらし ○山めぐりする
- いくめぐり ○たえなくめぐる ○雲のかへし ○雲のはたで ○雲もりわく ○雲立まよふ
- まよふ浮雲 ○立ぬる雲 ○たゞならぬ雲 ○夕ごりの雲 ○あかつきの雲 ○高れの雲
- 峯の横雲 ○かゝるむら雲 ○村雲はまだ過はてぬ ○うき雲さわぐ ○木がらし ○木がらし
- 山風さほふ ○山おろしのふきて ○風さわぐ ○風のゆくて ○風早み ○もみぢ散る山
- もみぢ葉のかわけるうへに ○下てるばかりもみぢする ○もみぢ葉をちらす ○木の葉にかはる
- 木葉さゝもに ○落葉がうへ ○楡を染る ○正木のかづら ○柞ばら ○色かはる柞の楡
- ならの唐葉 ○ならの葉寒き ○ならの葉がしほ ○杉むら ○楡ばら ○篠ばら
- 空定めなき ○空さえて ○たびのそら ○おもふそら ○有明の空 ○涙や空に
- 雲間の空 ○雲まながむる空 ○日かげながらに ○朝日の色ながら ○もるゝ夕日の影 ○入日のかけ
- 影さだまらぬ ○あり明の月 ○よをこめて ○れ覺して ○れ覺にきく ○さよのれざめ
- 曉のれ覺 ○手枕寒く ○同どまくらに ○さむる枕 ○枕そばだて ○板まもる
- あしのまろや ○槇のや ○浅ちふの宿 ○山のはに ○槇たつ山 ○みね
- さびしき峯 ○ふもこの峯 ○音にだに ○音にもぬるゝ ○なごりまで ○あられまどり
- み山は雪の ○露もまだひぬ ○木々の葉 ○何を染らん ○やがてよそにぞ ○いかでかは
- ながめにかゝる ○いさゞしく ○さびしくも ○ちたてしなるゝ ○をりしもあれ ○さもすれば
- ほごもなく ○あはれにも ○冬くれば ○冬くれば

もみぢ葉をちらすしぐれのふるなべによるさへ寒き獨しぬれば

よみ人 すらず

- 木がらしの風
- 山のあらし
- 風にみだるゝ
- はかなき色の
- 見てもしのばん
- 板びさし
- 水草
- 嵐のさきに
- 峯のあらし
- 色なき風
- いづれかもろき
- 物ぞかなしき
- 庭のこけ路に
- 夕ぐれに
- 嵐のさそふ
- いかに吹夜の嵐
- 吹みだる
- なごりなく
- れ覺てきけば
- 山もあらばに
- 嵐にもろく
- いかなる山の嵐
- 吹なちらしそ
- あだなるもの
- 櫛の板屋に
- 山河に
- おろすあらしの
- 風すさまじき
- 朝清めすな
- あかさりし
- 櫛の板戸に
- 谷のかけはし

萬 妹がりと馬に鞍おきて生駒山打越くればもみちちりつゝ
 古 此川にもみち葉ながる奥山の雪けの水ぞ今まさるらし
 同 立田川錦おりかく神無月しぐれの雨をたてぬきにして
 後 神無月しぐれとともに神なびのもりの木のはふりにこそふれ
 拾 色々の木葉ながるゝ大の川下はかつらのもみちとやみむ
 後 落つもるもみちをみれば大の川井せきに秋もとまるなりけり
 金 吹みだるはゝそが原をみわたせば色なき風ももみちしにけり
 千 まばらなる櫛のいたやに音はしてもらぬしぐれやこのはなるらん
 新 入日さすさはの山邊の柞ばちくもらぬ雨と木のみふりつゝ
 同 ほのくゝと有明の月の月かげにもみち吹おろす山おろしの風
 風ふかぬよるの軒ばに音するは霜にもたへぬ木のはなりけり

よみ人
しらす
 岑 任 保 成 忠 同 同 同
 枝 信 好 俊 成 公 忠 同 同 同

曉におち葉かさなるこゑきゝて冬のことろとなりける哉
 山風のふく夜の月に音はしてくもるともなくちる木葉哉
 高ねにははつ雪みゆるあしたまでまだかた岡にちるもみち哉
 かげおほふ軒ばのはゝそちりかひてをりくくもる有明の月
 もろくちる葉廣がしはの一本にせばきかき根はうづもれにけり
 むらすいぬねぐらたづぬる小林の夕かげてらしちるもみち哉
 はらへどもなほちりうかぶ山の井のもみちながらにくみてける哉
 木がらしのさそふもみちの色くれて夜はのしくれとなりはてにけり

○殘菊 のこりのさく 冬のさく

- 残るしらぎく
- たへでや菊の移る
- 霜もひさつに咲る
- こむらさきにも
- 秋の色のこす
- 霜のまがき
- 霜夜の敷の重る
- 花なき時のさく
- ひさもささく
- 冬野のさく
- かれのよきく
- 菊にめがれぬ
- かれゆく野への菊
- 翁さびゆく
- 咲のこる
- かれふに咲る
- うつろひかばる
- うつろふ冬
- 染かふる
- 朝なく染かへす
- 色のまされば
- あらぬ色なる
- 日にそひて色増りゆく
- 霜の下にぞ色はある
- 霜がれのこる
- 霜がれるまがき
- 霜をいたゞく
- 霜にもたへで
- 霜をへて
- 霜むすぶ
- 草がれの冬まで
- 冬もかれせぬ
- 秋より後

廣 海
 眞 淵
 太 訓
 千 隆
 景 樹
 鶴 夫
 有 功
 同 卿

○秋をおきて ○むら消の雪かき○冬の野風に ○園なつかしき ○けふまでとてや○をしげくに ○あたりしき

秋をおきて時こそ有けれきくの花うつろうからに色のまされば
朝な〜おきつゝみれば白菊の霜にぞいたくうつろひにける
ことしまた咲べき花のあらばこそうつろふ菊にめがれをもせめ
草がれの冬まで見よと露霜のおきてのこせるしらぎくの花
けさみればさながら霜をいたゞきて翁さびゆくしらぎくの花
かげさへに今はときくのうつろふは波の底にも霜やおくらむ
神な月のこりの菊のおしげくにしぐれの雨はふらすともよし
ふきくなりかれたる菊のあたりより聞なつかしきこがらしの風
おく霜に色はみえねどきくの花こむらさきにもなりにける哉
初霜にかねてまがひししら菊の猶うたがひをのこす色かな
霜がれぬきくのまがきは冬もなを秋とひとしき露やおくらん
霜をへて千年までとや匂ふらん神さびにけりしらぎくの花
しらぎくの花のかけなる池水は匂ひながらにこほりとづらん
霜をへてしらぎくにはふ谷かげやをのゝえ朽し所ならまし
むらさきの色も世に似ぬきくの花霞にくはるゝ匂ひ也けり

貞文 公信 道命 好忠 基俊 是則 康頼 町尻 長流 山比古 景樹 知紀 廣海 奇行

しぐれせしなごり露けき庭の面に日かげをためて匂ふきく哉
心ありてのこるまがきのきくも忍にしぐるゝ窓もさゝれざりけり

久胤 有功 霜

○霜

霜は季秋より三冬にわたる物なりこの故に秋にもよむ事なれども打まかせては冬の
ものなるも忍にそのこゝろえあるべきなり

- 霜がれ ○霜けぶる ○霜こぼる ○霜ぐもる ○霜どけ ○霜をれ
- 霜ふかし ○霜あさし ○霜こづる ○霜さやぐ ○霜ばしち ○霜けたつ
- 霜まよふ ○霜置まよふ ○霜ふる ○霜ふりかゝる ○霜のふりばも ○霜のいる
- 霜のむら消 ○霜の下 ○霜夜 ○霜の夜 ○霜にうづむ ○霜八度おく
- はつ霜 ○おく霜 ○おきあかす霜 ○しらつく霜 ○はだれ霜 ○あれたる霜
- 葉の霜 ○下葉の霜 ○行あひの霜 ○もさゆひる霜 ○いたゞきの霜 ○枕の霜
- 夜床の霜 ○よるの霜 ○夕しも ○夕ごりの霜 ○朝霜 ○朝かかけの霜
- 今朝の霜 ○朝霜けたぬ ○茅生の霜原 ○かたまれる ○いやかたまれる ○さやぐ
- おく ○そばかりにおく ○よそげにおける ○むすぶ ○むすびかふる ○ふる
- きゆる ○消かへる ○こづる ○ふかし ○雲さみるまで ○置露白く ○所せきまで
- つもれば風の ○すゆる ○風さゆる ○風さえわたる ○さえくるゝ ○袖さえて
- 身に寒く ○朝清めせし庭 ○庭もはだれに ○庭のまさころ ○人めかるゝ ○松の葉におく
- 松の葉さづる ○竹のほにむすぶ ○さゝ竹 ○玉さゝの柴分 ○小ざゝ原 ○浅ぢふ
- かれ葉が末 ○冬がれの草 ○草の原 ○道の茅草 ○岡の草根 ○つたかづら
- もみぢ ○落葉がうへ ○木の葉のうへ ○かれ野 ○概生る小野 ○丸木橋

○かけはし

○板はし

○かけぢ

○夜のほごに

○曉寒し

○かれの音さゆる

よみ人
しらす

天雲のよそにかりがねきししよりはたれじもふり寒き此夜は
 天とぶやかりの翹のおほひ羽のいづくもりてか霜のふりけむ
 旅人のやどりせん野に霜ふらばわが子はぐもめ天のつるむら
 水ぐきの岡のやかたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも
 としをへて星をいたく黒かみのひとより霜になりける哉
 楸生ふる小野の浅ぢにおく霜の白きをみれば夜や更ぬらん
 もみち葉はおのが染たる色ぞかしよそげにおけるけさの霜哉
 草の上にくら玉ぬししら露を下葉の霜とむすぶ冬
 あしがらの山路の月に峯こえて明れば袖に霜ぞ残れる
 神な月さくのきせ綿とりかへて春めく草におほふ霜哉
 あり明の月の光をさながらに芝生にのこすしものいろ哉
 有明の月のわかれのわかぬまで小野のしの原霜ふけにける
 夜もすがらおきもたぬ霜ふけて里わのかけぞ聲しらみゆく
 けさの朝け初しも白しうべしこそ夜のまのかねの音はさえけれ
 山ざとの垣根に結ぶ朝じもはとけぬものともなりにけるかな
 あり明の月にとはれし跡みれば昔のかよひち霜白くして

○枯野 冬野 かれ野 ふゆ野

有景 濱 野 日 千 契 成 好 慈 基 能 同 同 同
 有功 卿 樹 臣 彪 善 隆 冲 茂 忠 圓 俊 宜

二題ともにかはる事なしたま野の冬がれのささのさびしきよしをよむなり次なる寒
 草の條を見合すべし

- かれ野の原 ○かれ野にあさる朽鳥 ○冬野の霜 ○野への霜
- 野への朝風 ○野べみれば ○霜の野べ ○色なき野べ
- うつろふ野べ ○野守のかれ ○野守が庵も顯ぼる ○野川けぶりて ○千種の野べも
- 冬がれわたる ○秋の色うつろふ ○秋の色あらぬ ○色もなき ○かれわたる
- 草かれ ○草のかればに ○かれをばな ○尾花が袖も霜がれ ○そこそこみえぬ
- 花のころ女郎花 ○一花さけるなでし ○花はみなあらぬまなる ○すまきのみ別る
- にげ水氷る ○霜の花さく ○ひさつ色なる霜 ○あさなき露 ○こゑよわり行朝風
- かれんくのころ虫 ○松ひさりかれぬ ○みさなもつきて ○きりんくで聲かる

霜がれの野べとわが身をおもひせばかかれても春をまたましもものを
 さわらびや下にもやらん霜がれの野原の烟春めきにけり
 霜がれはひとつ色にぞなりにける千種とみえし野べにはあらずや
 霜がれはそこともみえぬ草の原たれにとはまし秋のなごりを
 野べみれば尾花がもとの思ひ草かれゆく冬になりけるかな
 色々の花もゑ野べに立いでゝ心までこそ霜がれにけれ
 つくばねのみどりばかりを武藏野の草のはつかにのこす冬枯
 霜さやく野べの萩原ふく風にあらしもぬるゝ朝づく日かな
 いろもなきかれ野のはらと思ひしを花よりけなるけさの霜哉

よみ人
しらす
少 通 俊 和 有 眞 年 直
 輔 頼 成 泉 家 淵 平 好
 女 部 家 淵 平 好

朝風にかれふのすゝき折ふしてふすゐの床に月ぞのこれる
 霜ながら匂ひし菊のいろもなほのこらぬ野べとなりけるかな
 浅茅はらちぶの初霜朝さえてなかねをしかの跡をみるかな
 有明の光りは霜とうすらぎて野べの枯生に朝かせぞふく

濱 臣
 東 喜 子
 久 胤
 依 平

○寒草 ふゆのくさ

いづれの草にても冬がれのさまをよむなりされば寒草の題に寒草はよむべし寒草の
 題に寒草はよむべからずといへり

- 冬草 ○冬草 ○草がれ ○草のがれふ ○草の冬がれ ○草のたもと
- 草のほら ○霜の下草 ○さしのかげ草 ○岡のかげ草 ○眞萩はら ○かれ萩
- 濃萩 ○あしのかれ葉 ○あしの村立 ○しのゝをすゝき ○しのすゝき ○ます本のすゝき
- 花すゝき ○すゝき ○な花 ○女郎花 ○かれのゝま葛 ○ふちばかま
- なでしこ ○高がや ○かるかや ○みちしば ○野べの道芝 ○浅ぢはら
- 澤べのちほら ○浅ぢふ ○よもぎふ ○むぐらふ ○八重むぐら ○小ざゝはら
- 小ざゝがうへ ○のこるなざゝ ○しのほら ○小野のしのほら ○しのゝは草 ○かほ花
- かれふ ○かれたつ ○かれわたる ○かれはつる ○かれ葉 ○うらがれ
- 下がれ ○日にそへてかれゆく ○霜がれ ○霜にをれふす ○霜に色なき
- 霜にあさある ○ありし色なき ○をりのこさるゝ ○人目もかるゝ ○けしきかほる野へ
- おもがほる野へ ○風もたまらぬ ○あらしにたゆる ○あられうつ ○あられこぼるゝ ○雪にふす
- なるひしてけり ○虫のねよわる ○虫のれたゆる

山ざとは冬ぞ寂しさまざりける人めも草もかれぬと思へば
 高根には雪ふりぬらし眞柴かるきしのかげ草たるひすがれり
 楸生ふる澤べのちはら冬くればひばりの床ぞあらはれにける
 もろともに秋をやしのふ霜がれの萩の上葉をてらす月影
 霜さゆる山田のくろのむらすゝきかる人なしにのこるころかな
 虫のねのよわりはてたる庭のおも萩のかれ葉の音ぞのこれる
 しぐれのみまなくしふれば春日野の浅ぢの色もうつろひにけり
 かれのこる冬野の尾花霜をさへ重げになびく色も寒けし
 世の中は夕霜さやぐ翁草かれても安き時なかりけり
 かれにける草はなか／＼やすげなりのこる小笹の霜さやぐころ
 秋はてゝ冬野の霜にしをれゆく小草のさまぞあはれ也ける
 つれもなき冬野にたくるをみなべしたれにとはるゝ折を待らむ
 かつしかの昔のまゝのをみなべしそのかげさへもかなし野邊哉

宗 千
 公 長
 好 忠
 康 宗
 慈 圓
 大 輔
 春 滿
 眞 淵
 同
 た 子
 譽 正
 景 樹

○寒蘆 かれあし 冬のあし

海川江澤池沼などはいづれにも冬がれてたてるがうらさむく物がなしきやうによめ
 り雪霰霜嵐などむすびておもぶきをもとむべし

- あしの花 ○あしの花ちる ○あしの村立 ○あしづゝ ○あしの穂 ○あしの葉むすぶ

○あしのふる葉 ○あしの下根 ○あしの霜がれ ○あしわけ小舟 ○あしまの澤 ○あしまに氷る
 ○あし間の水鳥 ○枯たつあし ○かれふのあし ○しなれあし ○みだれあし ○ふしあし
 ○のこるあし ○むらあし ○霜のむらあし ○波のむらあし ○みなさあし ○汀のあし
 ○寒きあしま ○青葉まどらぬ ○しなれ葉 ○をれふす ○下をれ ○下みだれ
 ○うらがれわたる ○さばかりのこま ○そよぐまもなき ○霜にかれゆく ○霜にしかれて ○霜さやぐ
 ○風さやぐ ○風わたる ○みなさ風 ○浦風寒し ○浦風にをれふす ○かるゝ川戸
 ○氷さづる ○こよひも波に ○みつしほ ○うらさびし ○入江に寒き ○なだの捨舟
 ○小舟さばらぬ ○鳴鳥のかづく入江 ○鳴のかよひぢ ○をしのすむ池 ○あし田嶋 ○雪にふす
 ○霞みだるゝ ○うらやましくも ○冬ふかみ

名所 (同) 大井川(山城) 淀の渡(同) 美豆野(同) 難波江(攝津) 三島江(同) なごの江

新 津の國のなに波のはるは夢なれやあしのかれ葉に風わたる也 四 行
 同 冬深くなりにつらしな難波江の青葉まじらぬあしの村立 成 通
 玉 あしのはも霜がれはてゝなにはがた入江さびしき波の上かな 基 氏
 風 みなと江の氷にたてるあしの葉に夕霜さやぎ浦かせぞふく 基 氏
 續古 朝あらし山のかげなる川の瀬に波よるあしのおとの寒けさ 太上天皇
 代 なごの江のあしの葉そよぐ湊風こよひも波に寒く吹らし 眞 淵
 同 なのはがた汀のあしは冬がれて灘の捨舟あらはれにけり 眞 淵
 つのくにのなにはあしのかれぬればこと浦よりもさびしかりけり

川尻の鹽さゝるさわぐ夕ぐれはかれあしわたるかせぞ寒けき 廣 海
 玉津しま入江のあしも冬がれて田鶴がね寒きこの夕かな 壺 満
 みさごゐるすさの入江の夕風にかれたつあしの霜さやぐなり 春 門
 あしのはのかるゝ川戸に水鳥のうきねのともあらはれにけり 春 臣
 ほり江川霜にかれふすあし原に一むらのこる夕あらしかな 鶴 夫

○寒樹 寒松 ふゆのき ふゆのまつ

寒樹とは松をはじめ常盤木のたぐひをいふまれくには葉のちりたる木をもよむなり
 り寒松の題もろともにさびしき由にのみよめり

○繪さびしく ○色なき楢 ○木のはふり ○み山木の ○のこりはてたる ○をかべにたてる
 ○外山にたてる ○山もあらはに ○峯にさびしき ○松ひさり ○松にさひくる風 ○峯の松げら
 ○峯のまつ風 ○をかべの松 ○ひさつ松 ○色かへぬみさを ○葉がへせぬ ○もこの色かへぬ
 ○霜がれはてぬ ○霜にもかれぬ ○霜置わたす ○夕ごりの霜 ○あらしにもれて ○風さゆる
 ○雪にもなれぬ ○冬來ても ○あはればかれぬ ○みしにもあらぬ

山川の岩行水も氷してひとりくだくるみねのまつかせ ぶみ人
 み山木の残りはてたる梢より猶しぐるゝはあらしなりけり しらす
 ふきすさぶ氷に瀧はとぢられて松にぞ風の聲をしまぬ 式子内親王
 いかなれば冬にしられぬ色ながら松しも風のはげしかるらん 隆 信
 葉がへせぬ色しもさびし冬深き霜の朝けの岡のへの松 爲 子

日をさへし大川のへの櫛ばら冬は風だにたまらさりけり
 まつをのみ吹かともえて冬がれのえだにたまらずゆくあらし哉
 浪かゝるうら風寒みから崎のまつのしづえは垂氷してけり
 ならぶ木はみるかげもなし霜雪にたへてや盛見すらむ
 かくながらはるをまつべき松がえの心もしらずふくあらしかな
 しもと原すさぶあらしのひまをなみなびかぬえだも寒けかりけり
 あしがらや箱根にたてるみ山杉冬はあらしのやどり也けり
 立田山ちりし木葉のあとへばいろなきえだにあらしふくなり
 木がらしはたえし高根の月影に琴の音のこる松の一むら
 木がらしに下もみぢさへ散はてゝいとつねなるまつのいろ哉

眞淵 弘訓 成章 魯道 年平 伴雄 久胤 道平 定信 景樹

○椎柴 しひしば

椎柴はかならず柴にきりおろす物なるゆゑにいまだ柴にせざるをも椎柴といふ

- しひまく ○しひがもこ ○しひのかれ葉 ○しひのうら葉 ○椎の小枝 ○椎の眞柴
- 椎柴のえだ ○椎柴かる ○おちトひ ○峯の椎柴 ○谷の椎柴 ○をりたかん椎柴
- かれ葉 ○葉がへぬ色 ○さきはのいろ ○もみぢせぬ ○時雨にも色のかはらぬ
- 冬がれしらぬ ○山人 ○かよふ山人 ○をのゝえ ○木こり ○なげきこりつむ
- つま木の道 ○つま木になして ○たえぬ重荷 ○しぐれにぬらす ○岡べにぬらす ○嵐になびく
- 霜おく ○あられ落くる ○雪にをれふす ○雪ながら ○かゝ鳥 ○おく山

○岩かけ道

○そばつたひ

○冬寒き

○冬深き

●名所

小野山(山城)

大原山(同)

八瀬の里(同)

常磐山(同)

万

おそはやもなほこそまためむかつをの椎のこやてのあひはたがはじ

堀次

ふる雪もをやめくと小野山に椎柴かるはしばばかりぞ

同

いつとなく葉がへぬ山の椎柴に人の心はなすよしもがな

同

しぐれつゝ吹山風に椎柴の枝はなびけど色はかはらす

同

位山みねのしひ柴しのぶともうつろふ色はあらじとぞおもふ

同

冬寒み霜はおけども椎柴のときはの色はあせずも有哉

同

山ふかみひろふ人なき落椎の下柴かぐれとづるふゆかな

同

冬はまた朽葉がくれのおち椎をもみちの後の山づとにせむ

同

吹まゝになびけどちらぬ椎柴をしひてもしをる山おろし哉

同

夏かげとたのみし後もしひ柴にあらしをふせぐ冬の山里

同

山かけや折のこしたる椎柴にすこしこゑあるみねの木がらし

同

山人もおよばぬ峯の椎柴は雲のこるにぞまかせたりける

○冬風 木枯

ふゆの風 こがらしの風

あらしは木の葉をあらす風にて殊に秋より冬かけてはげしき也こがらしは木をからす風のこゝろなるがた々に風の名とする事は中古よりの事にてあらしも木がらしも

よみ人 顯仲 兼昌 大進 常陸 正徹 春澤 依平 守雄 定信 景樹

○澤田 ○田の面 ○山の井 ○かけひ ○竹のかけひ ○嵐を寒み
○落葉ながら

萬 佐保川にこほりわたれるうすらびの薄き心をわがおもはななくに
古 大空の月の光し清ければかげみし水ぞまづこほりける
後 おもひつゝねなくに明る冬の夜の袖は氷のとけずも有かな
拾 ふしつけし淀のわたりをけさみればとけんともなく氷しにけり
後 夜ふくるまゝに汀やこほるらむ遠ざかりゆくしがの浦波
同 さむしろはうべさえけらしかくれぬの芦間のこほりひとへしにけり
同 しながどりぬなのふしわら風越てこやの池水こほりしにけり
千 山ざとの寛の水のこほれるは音きくよりもさびしかりける
同 いづくにか月は光をとゞむらんやどりし水もこほりぬにけり
同 きのふこそ秋はくれしかいつの間に岩まの水の薄氷るらむ
新 立ぬるゝ山のしづくも音さえて楨の下葉にたるひしにけり
勅 おちたぎつ岩ぎりこえし谷水も冬はよなく行なやむ也
み山木の雪の雫をかけとめてたるひは風のかくるなりけり
とぢはてぬこほりの下にきこ也猶岩くゆる谷水のおと
谷川やいさゝ小川の一すぢはこほりて後ぞありとみえける
ゆくこまのひづめの跡のたまり水それさへ氷る朝あらしかな

櫻井真人
よみ人
しらず
兼盛
快覺
頼慶
仲實
輔仁親王
親宗
公實
守覺法親王
式子内親王
尊孫
春庭
蕭蹊
春門

あしのうみの水のしらなみ吹よせて氷をたゝむ夕あらしかな
氷ゐて落葉にとづるいさら水けさは聲さへうづもれにけり
さもる夜のをしのつがひの夢絶てむすぶは油のこほりなりけり
ことさらにけさより寒し神な月氷ぞ冬の始めなりける
玉矛の道ゆく人のふみしむるくつの音さへ氷る夜はかな

○冬月 ふゆの月

かぎりなくみにしみて物すごく寒さのまさるよしなどをよむべし

- 月ほ冬こそ ○月の氷れる ○氷る夜の月 ○霜夜の月 ○浅ちふの月 ○おちたる月
- 山の端の月 ○たえても月の澄る ○かげはづかしき ○かけすましく ○かけのさやけさ
- かげさゆる ○光さえゆく ○さえても出る ○さえさほす ○川音さえて ○のこるくもなき
- くもらぬ空 ○空さすわたり ○木がらしの風 ○雲吹はらふ風 ○しぐれてくもる ○雲にたまらぬ
- むら雲 ○しぐれにのこる ○しぐれていづる ○雪さみるまで ○雪の上に ○雪にくまなき
- しら雪に ○白雪の色もひさへに ○白雪の深き山路 ○初霜かけて ○霜ぐもり
- 霜さえて ○霜寒き ○霜にさやけさ ○霜のうへに ○霜深き夜 ○霜夜の枕
- かれ野の霜に ○氷ていづる ○氷さみゆる ○氷にやざる ○氷にさざる ○氷にうつる
- 氷へだて ○氷をながす ○さえ氷る ○まさごに氷る ○空に氷れる ○やどれば氷る
- 袖は氷ぬ ○袖の氷 ○枕の氷 ○衣手寒く ○さゆる夜 ○夜をかされ
- 有明がた ○檜にはるゝ ○木のまさばらで ○木のまより ○木の下かげに ○木の葉にくもる
- 木の葉くもらで ○木のはがくれもなき ○落葉が後 ○杜の朽葉 ○しのゝは草
- 菖田の面に ○あられ打まご ○軒のたるひ ○まやの軒ば ○宿にもる ○冬寒み

樹夫海嵐

○冬がれ ○冬のならひに ○身にしむ

あらし山雪ふりつもる高根よりさえても出る夜はの月哉
眞しばふく宿のあられに夢覺て在明がたの月をみるかな
今よりは木葉がくれもなければもしぐれにのこるむら雲の月
冬がれつ杜のこのはの霜の上におちたる月の影のさやけさ
しがの浦や遠ざかりゆく浪間より氷ていづる冬の夜の月
霜氷る袖にもかげはのこりけり露より馴し有明のつき
置まよふしの葉草の霜の上に夜をへて月のさえわたる哉
かたしけば涙も氷る袖の上に月を宿して旅ねをぞする
里人もかよはぬ夜はやふけぬらん川音さえて氷る月かけ
山風にしぐれや遠く成ぬらん雲にたまらぬあり明のつき
霜がれのいとこの濱をぎかれはてよくまなき月に鴈ぞ鳴なる
もとあらの小萩が露やもとむらん宿りかねたる冬のよの月
すはの海や雪げの空の雲まより氷をてらす月のさやけさ
さ夜中と夜は更ぬらしわが宿の庭に霜置てさゆる月かけ
つくぐとことしもながめはてにけりあはれとおもへ冬の夜の月
あひにあひてさえわたる哉さゝのはのはやく霜夜の有明の月

雅光 公景 具親 清輔 家隆 通具 前關白 教經 後久我 建保御製 契沖 黄中 眞淵 景樹 知紀

○千鳥 ちどり

さえくし水音たえて明ぬれば氷りしまゝに月はのこれり
木々のはふ拂ひはてたる山風へ行へにさゆる冬の月かな
夜もすがらおくらむ霜のわざならし梢あらはにさゆる月哉
かすみてはそれを句のかけながら霜ぐもりせり冬の夜の月
かれ野ゆく道のひとすぢはるぐと見えても寒き冬の夜の月

廣海 春夫 龜賢 勝繼 有功 痴

- 千鳥なみよる ○なく千鳥 ○しばなく千鳥 ○妻ごふ千鳥 ○あそぶ千鳥 ○すむ千鳥
- ぬる千鳥 ○ゆく千鳥 ○かよふ千鳥 ○さわたる千鳥 ○むら千鳥 ○むれぬる千鳥
- むれたる千鳥 ○むれたつ千鳥 ○友千鳥 ○友なし千鳥 ○れ覺の千鳥 ○夢路の友千鳥
- 小夜千鳥 ○夕千鳥 ○夕波千鳥 ○川千鳥 ○汀の千鳥 ○汐千の千鳥
- 濱千鳥 ○島千鳥 ○浦千鳥 ○磯千鳥 ○磯山千鳥 ○磯やの千鳥
- あら磯千鳥 ○千世さなく ○八千世さなく ○うちかへり鳴 ○ゆきかへりなく ○打わびてなく
- こゑ定まらぬ ○こゑうらぶれて ○こゑのさやけき ○遠ざかるこゑ ○もろこゑ ○こぼらぬこゑ
- 波にこゑ打そふ ○よびかばす ○つまよぶ夜は ○はれ打しなれ ○おのが羽風 ○すむ
- さわぐ ○心ささわぐ ○遠よる ○かよふ ○わたる ○行かへり
- なちかへり ○又来てあさる ○ぬる ○たつ ○たちぬ ○立ぬる空

○立居ひまなき ○立居定めず ○かたも定めず ○よるべもみえぬ○みだれながらも○夕たたまけて
 ○ゆふさらす ○朝さらす ○跡ふみつけて ○跡をこめめず ○おのがごち ○友まごふ
 ○友まごはして ○浦より外の友誘ふ○浦づたふ ○あしまつたひ ○風はやみ ○月かげに
 ○月影の清き河内○月の出沙に ○月や悲しき ○月にむらがる ○有明の月 ○かたぶく月に
 ○空さへ氷る月に○夕ざりに ○ゆふかけて ○霜深き夜 ○さ夜かふけぬる○曉に
 ○曉深く ○明がたかけて ○れ覺てきけば ○川ざりに ○川風に
 ○川の瀬ごさに ○川島がくれ ○大川のべ ○清き河原 ○楸生る川原 ○浦風寒き
 ○沖の白洲 ○おきつ風 ○汐風や寒けかるらん ○沙干がた ○朝みつしほ
 ○浪をちらして ○浪におはれて ○浪間よりみゆる小島 ○岩がれさわぐ ○岩岡がくれ
 ○關もり ○なれもかなしや

名所 賀茂川(山城) 淀川(同) 大井川(同) 佐保川(大和) 飛鳥川(同) 須磨關(播

津) 難波潟(同) 住吉(同) 明石潟(播磨) 富島(淡路)

萬 近江の海夕なみ千鳥ながなけば心もしぬにいにしへおもほ也 人麻呂
 同 ぬば玉の夜のふけゆけばひさぎ生ふる清き河原に千鳥しばなく 赤人
 古 しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御世をばやちよとぞなく よみ人
 拾 おもひかねいもがりゆけば冬の夜の川風寒みちどりなくなり しがら
 後 なのはがた潮みつ汐になく千鳥浦づたひする聲ぞきこゆる 千
 千 岩こゆるあら磯なみにたつ千鳥心ならずやうらつたふらん 道
 新 風さゆる富島が磯のむら千鳥立居は波のこゝろなりけり 季

同 勅 代 同 伊勢大輔 具紀 行意 眞淵 千蔭 尊朝 廣海 建正 謙平 大平 久胤 景樹 竹翁 春夫 氏綏 有功 卿

ゆくさきはさ夜更ぬれど千鳥なくさ保の川原は過うかりけり
 さ夜ちどり湊吹こす汐風に浦より外の友さそふなり
 高砂の尾上の月やふけぬらん川音すみてちどりなく也
 打わたる大川のべの瀬を廣み及ばぬこゑに千鳥なくなり
 夕されば海上がたの沖つ風雲ゐにふきてちどりなくなり
 あら磯の波にくたくる月影を翹にかけてなく千鳥かな
 しほみてる洲崎はなれて有明の月よりうへを行千鳥かな
 紀の海やしぐれは浪にたゞまれて月になりゆく磯ちどり哉
 風あらしきありその浪にこゑそへて岩もともすり立ちどり哉
 かりくらしかへるかた野に舟まてば河上遠く千鳥なくなり
 しがのうらさゝ波遠くこほりゐてしばなく千鳥聲さわぐ也
 久かたの天城のあらし海ふけば木葉にまがふむら千鳥かな
 常にせぬ千鳥のこゑぞきこなる遠山おろしこよひ吹らん
 あらし山松をみゆきにふかかして月にもくもるむら千鳥哉
 風わたる曾我の河すぎ打なびき夕波寒く千鳥鳴也
 夢さそふ翅の嵐とく過て苦やのよそに千鳥なくなり
 から人のねざめをさへにとふ物は松浦の沖の千鳥也けり

伊勢大輔 具紀 行意 眞淵 千蔭 尊朝 廣海 建正 謙平 大平 久胤 景樹 竹翁 春夫 氏綏 有功 卿

○水鳥 みづとり

冬と水とのよせだにたしかなればたい鳥とのみよみて難なかるべし但水鳥とある題には鶯かも鴉ちどり味村かり鶯かもめすが鳥などをあらはしてよむも常也

- 水鳥の青羽 ○水のむら鳥 ○水のうき鳥 ○世をうき鳥 ○うき鳥 ○かもめ
- にほざり ○みやこ鳥 ○すが鳥 ○みささぎ ○あぢむら ○かも鳥
- すだぢも ○あしがも ○眞がも ○なしがも ○なし ○をしきたかべき
- 手がひのをし ○くゞぬ ○かづく上毛 ○つばさやすめず ○羽がひの霜 ○羽風も氷る
- おのが羽風 ○おもひ羽 ○おほひ羽 ○青葉敷そふ ○白妙のはれ ○なくなる
- もろごゑ ○よばふ ○くちばし ○あさりする ○すだく ○むれぬる
- むれたつ ○たちのいそぎ ○ひさつれ ○ひさむれ ○ひさつがび ○つがはぬ
- 妻なき ○つまあらそひ ○うかぶ ○あそぶ ○うかびて遊ぶ ○しづむ
- かづく ○うき寐 ○うきれのこゝ ○涙のうきれ ○小夜のうきれ ○ひさりね
- さもれする ○夜床れわぶる ○下やすからぬ ○下のかよひぢ ○籠にいるゝ ○ふせごにいるゝ
- 手がひ ○氷のれや ○つらゝの枕 ○つらゝのさこ ○玉もの床 ○池の夜ごゝ
- こほれる池 ○さわぐ入江 ○汀にさわぐ ○みなるゝ ○かつく岩ま ○みなぎは
- 岩根ゆき ○寒きあしま ○もみちにまじる ○早瀬になるゝ ○島めぐりゆき ○浦づたふ

名所 大井川(山城) 廣澤池(同) 吉野川(大和) 夏箕川(同) 三島江(攝津) 住の江

拾 千 水鳥の下やすからぬ思ひにはのたりの水もこほらざりけり 水鳥を水の上とやよそにみむわれもうきたる世を過しつゝ

よみ人 しらす 紫式部

同 玉 六 堀 同 代

○鴛

みづ鳥の玉もの床のうき枕ふかきおもひとたれかまされる 朝あけのこほる波間に立ゐする羽音も寒きいけのむら鳥 水鳥のおのがうかべるこゝろもて淵をも瀬とやおもひなすらん 夜もすがら霜やおくらむ水鳥のはらふ羽音の絶すきこゆる 池水にむれておりぬる水鳥の羽風に波や立さわぐらむ 風わたる浦のみなどの沙さきになみのりこえてかもめ鳴なり 夜を寒くこほりはつれば池ながらくがのまがひに水鳥ぞなく あぢむらの羽ぎる沖に霜ちりて夕日さびしき埴安の池 くだけちる氷とみえて水鳥の羽音にさわぐ池の月かげ そことなくうきねならぶる水鳥のかすあらはれてこほる冬哉 風さゆる磯間の浦の夕なみにあられみだれてかもめたつなり こやの池をむれて朝たつ水鳥にしばしはくもる猪名の松ばら

匡 房 廣儀門院 よみ人 しらす 肥 後 基 氏 契 沖 源 子 蘆 庵 春 夫 黄 中 景 樹

拾遺愚草ノ上

- なし鳥 ○なしがも ○をしのつがひ ○をしのひさつれ ○をしの一むれ ○をしの翅
- なしの青羽 ○なしのかも鳥 ○なしのつるさば ○なしのもる聲 ○なしの毛衣 ○なしのふすま
- つがはぬをし ○つまなきをし ○手がひのをし ○さもれのをし ○うきれのをし ○梢のをし

後 萬 妹にこひいねぬ朝けにをし鳥のこもなきわたる妹がつかひか 夜を寒みねざめてきけばをしぞなくはらひもあへず霜や置らむ

よみ人 しらす 同

なかくに霜のうはぎをかさねてやをしの毛衣すえ増るらむ
浪まくらいかにうきねを定むらんこをるますだの池のおし鳥
をし鳥のうきねの床やあれぬらんつらゝぬにけりこやの池の水
おく霜をはらひかねてやし折ふすかつみが下にをしの鳴らん
山風につばさふかれて寒き夜もともねのおしのむつまじき哉
冬の池にねぶれるをしのひとつがひいかにとけたる心なるらむ
たづのゐる野澤の水にすむをしはおなじ千年をなきかはすらん
むつまじくならびの池にすむをしは戀てふこともしらぬなるらん
霜はらふ翅もみえて冬がれのあしまの月にをしぞなくなる

六内侍 經房 重保 邦直 景樹 謙子 秋孫 擊

○鴨

あしがも あぢむら

- かもどり ○かもつもの ○かもがね ○かものむら鳥 ○かもの羽色 ○かものほがひ
- かものほ衣 ○かもの青羽 ○かもの水がき ○かもづく鳥 ○かも
- すゞがも ○ゐるかも ○なくかも ○うきれのかも ○むれゐるかも ○浦づたふかも
- 沖にすむかも ○おきつざり ○沖のうきがも

よし野なる夏みの川のかはよどこにかもぞ鳴なる山かげにして
わざも子にこふれにかあらん奥に住かものうきねの安けくもなし
冬の池の水にながるゝあしがものうきねながらにいく夜へぬらむ
まこもかるほり江にうきてぬるかもの今宵の霜にいかにわぶらん

湯原王 よみ人 しまら

霜おかぬ袖だにさゆる冬の夜はかもの上毛をおもひこそやれ
難波がた入江をめぐるあしがもの玉もの床にうきねすらしも
とし寒き池のみぎはの松がねにかもの青羽もあらはれにけり
をちこちにかもぞ鳴なる近江の海八十のみなとやなべて氷れる
うきねせしきしをはなれてゆくかもにあとなき水の道をしる哉
夜を寒みをりくかものはねざりてさらに霜置ひまなかるらん
あらしふくさ山が池になくかもの夢もこほりや結びはてけむ

公任 顯輔 枝直 潔夫 勝繼 廣海 景樹

○鴉

には にはどり

- 鳩鳥のおき長 ○にはのうきす ○にはの通路 ○かつくにほ ○しづめるには ○いきづくには
- 底くゝる鳩 ○うきもの鳩 ○入江のには ○しながざり ○かつきいきづき

おもふにしあまりにしかば鴉どりのあなやみこしを人みけんかも
鴉どりの氷の關にとぢられて玉ものやどをかれやしぬらん
朝氷とけにけらしな水の面にやどる鴉どももきまなくなり
勝間田に冬もなほゐるには鳥やつれなし草のねにかよふらん
鴉どりの足のいとなくくだかすば玉藻の床やこほりはてまし
みちひなき浪のうきすのすみよきやあしまになるゝ鴉の海づら
水のうへにあとはとまらぬ物なれどしばしはみゆる鴉のかよひち

よみ人 しまら 好忠 順沖 契庭 春庭 幸年 景樹

○殘鴈 冬のかり

秋におくれて冬來るかりを云ふまた寒鴈といふ題もあり

- おくれこし
- 秋におくれて
- 霜をはぶく
- しぐるゝ空に
- 雪にまよふ
- 雪はらふ
- 冬田におつる
- 冬田にのこる
- 冬田の草
- かり田

千

玉章になみだのかゝる心ちして時雨空にかりのなくなる

置霜は里まで氷る明がたのまくらにちかき鴈のひと聲

山もとの小田のいな草ふみしだきむれる鴈も雪はらふなり

打むれて冬田のひつちちはむ鴈に春行べくもみえぬさまかな

何事のありのすさびにのこりけむかり田の面もこほりゐるまで

朝戸出にかりぞなくなるせき捨したな井の水や氷はつらん

おはれじと思ひのどめてかりはてし冬田に鴈のわたりきぬらん

神無月霜のおくてをきのふけふかりと鳴てもわたるなるかな

心とはかけぬあられの玉章をつばさにわびてかりのなくらむ

よみ人
しらず
爲基
正徹
竹翁
嘉言
素當
春門
景樹
尊孫

○網代 あじろ

氷魚をとり貢とせるにて網代木は早川の中に水上を廣く下をせばく網を引たるごとく
 くに左右に透間なく杭を打たてゝ其下に床を水につくほどに作る也さて其網形なる
 杭木の内へせかれて流れ入る浪の床の簀子に打よすれば氷魚のみ残るを守るものゝ

居ながらとるとなり其は九月より十一月に至といへり

- あつる木
- あつる人
- あつるもる
- あつるもる袖
- あつるの床
- あつるのうつ
- あつるのかゞり
- あつるにかゝる
- あつるもたわに
- あつるに宿る
- あつる木の布
- せまのあつる木
- 浪よるひを
- せ分の氷魚
- 氷の魚
- 氷魚まつ
- 氷魚のぼる
- 氷魚よる
- 氷魚さる
- 氷魚のつかひ
- 氷魚のみつき
- 御契つかふる
- 御へのまけ
- 神に手向る
- かゞり火
- かゞり火しるき
- ひをくらす
- ひをへて
- もりあかす
- 床寒み
- つみ深きわざ
- かしこきわざ
- 世をわたる習ひ
- もみぢよる
- しづむみくづ
- 玉もにさゆる
- ばやし瀬
- 川せに見ゆる
- 川音さゑて
- 川音ふけて
- 川かせ
- さゆる川戸
- いざよふなみ
- ふけゆく浪
- こほる白波
- うすきこほり
- 月きよみ
- 月さやげき
- 川風
- さゆる夜
- うちもれぬ夜
- 深き夜
- 霜夜

名所 宇治川(山城) 檣の島(同) 吉野川(大和) 近江の海(近江) 田上川(同)

萬 ものゝふの八十うち川のあじろ木にいざよふ波のゆくへしらすも 人 麻呂
 拾 月かげの田上川にあかければあじろにひをのよるもみえけり 元 輔
 後拾 うち川のはやくあじろはなかりけり何によりてか日をばくらさむ 中宮内侍
 金 月清み瀬々のあじろによるひをは玉もにさゆる氷なりけり 經 信
 詞 み山にはあらしやいたくさえぬらんあじろもたわにもみぢつもれり 兼 盛
 六 さとの名もうち山おろし寒き夜の川音ふけてあじろうつころ 貫 之
 ふくる夜の山風寒みあじろ木によせては氷るうちの川なみ 利 和

○美

わたみのねふしが崎の夕なみにちるはくしろの玉あられかも
小ざゝはら夕日のかけはさしながらたまりかねてもちるあられかな
夜もすがら小ざゝが上に音たてゝあしたあとなき玉あられ哉
さゝ竹の世はさてのみもあるべきにことぐしくもふるあられ哉
冬深くさゆるあらしにさそはれてこほるしぐれやあられ成らむ
おもふらん心ありげになら坂のこのてがしはをうつあられかな

嘉言 春夫 安平 直好 春庭 有功 有卿

雨に雪のまじりて降るを云ふいたく寒き趣によむべし

○みぞれふる

○みぞれする

○みぞれ横ざる

○みぞれになる

○みぞれの空

○みぞるゝ空

○けふもみぞれて

○雪まぜにふる

○庭にたまらぬ雪

○雨まどりふる雪

○こほりもはてぬ雨

○ふりまどる雨

○ふる

○ふりもたまらぬ

○よなくふる

○しづく

○寒にぞしる

○ぬれとほる

○さゆる

○袖さゆる

○風寒き

○たるひつたひ

○風まどり

○夕されば

後 堀次 同 同 同

神無月しぐればかりはふらずして雪がてにさへなどかふるらん
夕されば雪ふる里の柴の庵雪にてこそみぞれとをしれ
ひまをあらみ竹のすがきの下さえてよなくふるはみぞれ也けり
あらし山雪げの空になりぬればうきつの里にみぞれふりつゝ
夕さればみぞれにしみやとけぬらむたるひづたひに雪おちけり

ふみ人 顯 忠 仲 兼 昌 房 實 昌

○雪

しぐれにも雪にもよらぬうき雲の中空にてやみぞれふるらん
風寒みみぞれもこゝらふりにけりけさよりたれか冬こもるらん
しぐるゝはみぞれなるらしこのもふべ松の葉しらく成にける哉
埋火にわれのみよるのまうけせんみぞれは友のとふべくもなし

長流 古道 景樹 有功 有卿

み雪のみは發語なるを後世深き雪と心得たるはあらずあわ雪は沫雪にて雪は沫の凝
れる如きゆゑに云るをこれも後に春ふる雪はあはしく消やすければ春の雪をの
みいふと云るもあやまりなりかなも沫はあわ淡はあはなり

- 雪かく ○雪しるき ○雪トまき ○雪そゞぐ ○雪ちりばふ ○雪まろばし
- 雪ふみわくる ○雪しづかなる ○雪ふく風 ○雪をれ ○雪消する ○雪け
- 雪げの雪 ○雪に木高き ○雪にこもれる ○雪にあさわく ○雪に晴たる空 ○雪をいたゞく
- 雪のこゝろ ○雪の光 ○雪のはだれ ○雪のなだれ ○雪のすがた ○雪のふゞき
- 雪のしづく ○雪の淵 ○雪の花 ○雪の日ばふる ○雪の下いほ ○大ゆき
- うす雪 ○天ざる雪 ○ふる雪 ○日なふる雪 ○ふりつもる雪 ○つもる雪
- はらばぬ雪 ○友まつ雪 ○あつむる雪 ○豊さしの雪 ○此もさほりの雪 ○宿の雪
- 庭の雪 ○白たへの雪 ○梢の雪 ○野路の雪 ○野はらの雪 ○かしらの雪
- はだれ ○ばたら ○空打ざらし ○ふりそむる ○ふりおもる ○ふりかゝる
- ふりつかし ○ふるがちに ○打ざらしふる ○風まぜにふる ○日かずふる ○いやしきふれる
- 千里ふりしき ○千里はれたる ○かのこまだらに ○ひさへなる ○消る ○けぬが上に

新 同 千 詞 後拾 同 古 同 同 万

- こほれる上に ○くづれおつる ○埋みはてたる ○うづもれわたる ○つもりぬる
- つもり定めぬ ○夜のまにつもる ○いちどろく ○まよはぬ駒 ○ふみわたる
- 跡をしむ ○跡つけていづる ○跡つけまうき ○木草もわかぬ ○木毎の花
- 竹の下をれ ○松の下をれ ○下をれのこゑ ○そりにのる ○かゞきはく
- 夕ごり ○さゆる ○風のふゞき ○風の音なき ○嵐もたえて
- 花にまがへて ○花ごみるまで ○月ごみるまで ○月にまがふ ○月にさゆる
- 人めかるゝ ○こぼれぬ庭 ○跡なき庭 ○拂はぬ庭 ○野さなる庭
- 庭もせ ○みざり ○玉のみざり ○垣れ ○軒ば ○野さなる庭
- 道のながて ○道のゆくて ○都の大路 ○うまやぢ ○ほごろ
- つもるまゝなる
- 跡いさばるゝ
- 菅の葉しのぎ
- しるしの棹
- まごに吹入
- 日かげにみおぐ
- 庭のまごごち
- 山より高く

わがさとに大雪ふれり大はらのふりにし里にふらまくはのち
 大宮の内にも外にも珍らしくふれる大雪なふみそねをし
 あし引の山路もしらす白がしの枝もとをゝに雪のふれゝば
 ふるさとはよし野の山し近ければ一日もみ雪ふらぬ日はなし
 みよし野の山のしら雪つもるらしふる里さむく成まさる也
 奥山の岩がきもみぢ散果て朽葉が上に雪ぞつもれる
 まつ人の今もきたらばいかいせむふまゝくをしき庭の雪哉
 ま柴かる小野のほそ道跡たえて深くも雪のなりにける哉
 跡もたえしをりも雪にうづもれてかへる山路にまよひぬるかな
 あとらなく雪ふるさとはあれにけりいづれ昔のかきねなるらむ

天武天皇
 よみ人
 赤 實 爲 和 匡 是 同 同
 染 房 季 泉 式 房 則 則

同 同 六 代

さびしさをいかにせよとて岡べなる摸のはしだり雪のふるらん
 雪ふれば峰のま柳うづもれて月にみがけるあまのかぐやま
 ものごとにふりのみかくす雪なれど水には色ものこらざりけり
 吉野川岩こす風のさえしよりかねのみだけは雪ぞつもれる
 はしだてのくらはし山に雲きらひ高市國原雪ふりにけり
 雲もなくなぎゝるけさの庭の雪跡こそいたくいとはれにけり
 ふる雪の友まつほどは巻向の檜ばらもいまだうもれざりけり
 冬がれの草の戸ざしもしら雪にまもりゆるさぬ門とみゆらん
 わが袖に吹くる風は寒けれど雪にはまどしさゝれざりけり
 ふり初て庭のまがきのほどなきに山とも高くつもるゆきかな
 みな月のもちにしも猶けぬが上に大雪ふれり鳥海のやま
 さをしかの鳴て枯にしあしたより雪のみつもるしがらきの里
 ふりはれし雪の朝けはのどかにてはる日おぼゆるそらの色かな
 宮の内にひかぬ車もなかりけり雪のあしたのめざましきまで

國 房 俊 成 貫 之 眞 淵 茂 念 枝 直 直 満 直 春 庭 魯 道 景 樹 定 信 有 功 卿

○初雪

- はつ雪の空 ○はつ雪白し ○はつみゆき ○見初る雪 ○庭のはつ雪 ○木々のはつ雪
- けさのはつ雪 ○けふのはつ雪 ○けふのはだれ ○ひさへなる ○まだひさへなる ○かつくたまる
- つみそむる ○つもりもやらぬ ○つもりもあへぬ ○はづめてふれる ○ふるそむる ○ふりもたまらぬ

○ふりもつもらぬ○つぎてふらなむ○霜かさまがふ ○けさめづらしき○松にめづらし ○楢にかろく
○浅かりけりな ○けさまだ薄き ○うすぐもり ○見そむる ○ゆきまよはぬ○たえまもみふて
○竹のはもなびかぬ○里はしぐれて○都にしらぬ ○落葉が上に ○庭に驚く ○待しまに
○朝戸出

はなはだもふらぬ雪也ゑこゝたくも天つみ空は雲あびつゝ
今よりはつぎてふらなんわが宿のすゝきおしなみふれるしらぬもき
神無月しぐるゝ時ぞみよし野の山のみ雪もふりはじめける
都にてめづらしと見る初雪はよしのゝ山にふりやしぬらん
初雪は横の葉白くふりにけりこや小野山の冬のさびしさ
さむしろの夜はの衣てさえくゝて初雪白し岡のべのまつ
氷だにまだ山水に結ばねどひらの高根は雪ふりにけり
雪はまだおもかげばかりふり初てなびきぞはてぬまのゝかや原
おもふ人こてふに似たる夕かな初雪なびくしのゝ小すゝき
うき雲のきのふの空のあらましに明ればつもるはつみ雪哉
きのふまで山のはにこそあがめつれ軒ばの竹のけさのはつ雪
生駒山はつ雪ふりぬ高安の里の朝けにたれかみるらむ
よみ人
しらす
同
同
景 明
經 信
式子内親王
惠 慶
契 冲
眞 淵
千 隆
千 廣
有 功
有 卿

○深雪

おほゆき

○雪の底

○雪より出る朝日

○雪にかくる夕日

○雪にとづる

○おほゆき

万 同 同 拾 同

○ふりしく雪 ○はれやらぬ ○浅からぬ ○つもり深き ○つもりそふ
○つもる日敷 ○日かずふる ○いくかもふる ○けふいくか ○幾重かさなる
○けねが上に ○いつきゆべくも ○下折の聲もうもれて○下折の聲やむ ○くれ竹の末ふす
○横の葉しだり ○楢みどくくなれる ○道たえて ○さばれぬ庭 ○庭白たへに
○たえて人こぬ ○垣根もうづむ ○軒より高き ○あさもなく ○八重山ふかく
○山のは高く ○山はいづく ○山しづかなる ○峰つゞき

おく山の横の葉しのぎふる雪はふりはますともおちめやも
大雪の内にも外にもめづらしくふれる大雪なふみそねをし
あし引の山かも高き巻向のきしの小松にみゆきふるなり
みわたせば松の葉しろきよしの山いくよつもれる雪にかあるらん
ふじのねはとはでも空にしられけり雲よりうへにみゆるしら雪
草も木も雪の心にまかすれどうづみかねたる月のかげ哉
峰しろくみしよりはれぬ日かずさへつもれる雪はいくへなるらん
あともなき山ちはたれかふみわけむ思ひ絶よとつもる雪哉
雪ふかき松にはたえしことのねをわれしらべつゝあそぶけふ哉
奈良麻呂
よみ人
しらす
よみ人
しらす
兼 盛
守覚法親王
契 冲
黄 中
景 樹
有 功
有 卿

○朝雪

あさのゆき

○雪のあした ○けさふる雪 ○朝けの雪 ○あしたの雪 ○あさくさふれる○朝まだきふる
○朝ぼらけ ○朝あけ ○朝まだき ○朝ぐめり ○朝なき ○朝寒み
○朝づく日 ○朝月夜 ○朝い ○朝ごゝ ○朝戸出 ○朝けのけぶり

○けさだに人の ○明ぬさいそぐ ○山がらす

夜を寒み朝戸をひらき出てみれば庭もはだらにみゆきつもれり
朝ぼらけ有明の月とみるまでによし野のさとにふれるしら雪
朝戸明てみるぞさびしきかた岡の檜の廣葉にふれる白雪
音羽山さやかに見するしら雪を明ぬとつぐるとりのこゑかな
さびしさはいつもながめのものなれど雲間の雪の冬のあけぼの
明ぬれど朝日もしばしうづもれてかけまつ峯の雪の寒けさ
有明 光を目路の限にてそらさへしろくつもる雪かな
朝ぼらけ風しづまれるかた山の楨のはしのぎつもるしらゆき
ふりはへてとはるゝ雪のあしたにはとけそふあともうれしかりけり
とぶ鳥の聲もや空にうづむらんけさものふかくつもる雪かな
雪はるゝ朝けにみればふじのねのふもととなりけりむさし野の原

○夕雪 もふへの雪

夕されば衣手寒し高圓の山の本毎に雪ぞふりたる
ふりをむるけさだに人のまたれつるみ山のさとの雪の夕ぐれ

- 夕されば ○夕かけて ○夕けたく烟を埋む ○夕ぐれて ○夕ぐれのまがき
- 夕さるるき ○夕月夜 ○夕やみもなし ○夕日のかけ ○夕づゝの光
- たそがれ ○くれやすき ○雲かへる ○れぐらさふ鳥

よみ人 是 經 高 後 宣 春 廣 永 景 眞
しらず 則 信 倉 京 長 隆 足 章 樹 淵

くれやすき日かげも雪も久にふるみ室の山の松の下折
くれ初るふもとの里のともし火にあらそふ峯の雪の色哉
さえわびてほしみえ初るたそかれに夕をしらぬ雪の色かな
雪あるゝかた山ざとの夕おろし風の道さへうもれぬるかな

前 千 高 久
淵 隆 尙 胤

○夜雪 よるのゆき

○夜ころの雪 ○夜こめに ○夜ぶかき ○夜くだち ○夜よし ○夜もすがら
○夜をさほす ○夜床さゆる ○よなく ○よひく ○夜のふけ行ば ○夜はのけしき
○ぬば玉の夜 ○明ぬこの夜は ○れぬる夜 ○さ夜中 ○残る夜寒し ○月のかけ

ぬば玉のこよひの雪にいざぬれなわけむ朝けにけなばをしけん
ぬば玉のよるのみふれるしら雪はてる月かげのつもるなりけり
たとへてもいはんかたなし月影に薄雲かけてふれるしら雪
松がねに尾花かりしき夜もすがら片しく袖に雪はふりつゝ
てる月のかげのちりくる心ちして夜ゆく袖にたまる雪かな
かげはるゝ月にはたまもあるものを夜をましろにもふれる雪かな
下折にね覺の枕そばだてゝまだみぬゆきのおとをさくかな

東 景 顯 仁 有
麻 生 季 和 功
呂 子 樹 寺 柳

○山雪 やまのゆき

- あし引の山 ○八重山 ○もゝへ山 ○かさなる山 ○外山 ○外面の山
- しげ山 ○おく山 ○そがひの山 ○遠の外山 ○み山ち ○峯のみみち

- 峯の松原
- 峰も尾も
- 見ざりし峰
- 高れく
- をちの高れ
- 高砂の尾上
- ふもごまで
- 谷のさかげ
- そば道
- 爪木の道
- 岡のべの松
- 松みえ初る
- 雪にまぢかき

萬千勅

足引の山にしろきはわが宿のきのふのゆふべふりし雪かも
 外山には柴の下葉もちりはてゝ遠の高ねに雪ふりにけり
 世とゝもにいつかはさえむふじの山けふりに馴てつもるしらゆき
 かきくもるふる大空の近ければ山には雪ぞまづつもりける
 さびしさはかぎりもみえずなりにけり横たつ山につもるしらゆき
 音羽山はつ雪白しうべしこそ瀧のひきは夜たゞさえけれ
 朝まだきみわたす山のしら雪にあとつけそめてとぶからす哉

よみ人
 顯 宗
 景 樹
 同 輔
 光 長
 宣 輔

○野雪 のべのゆき

- 野づかさ
- 野はら
- 野ぢ
- 野ぢの篠原
- 野中
- 野なる草木
- 野もせの雪
- 小野の細道
- 野への通ぢ
- ふもごの野へ
- まがきの野へ
- そのふの野へ
- かれふの野へ
- 遠かた野へ
- 冬野
- ひなのあら野
- 山のかけ野
- すそ野の原
- 小ざら原
- 浅ぢ原
- 雪もはてなき
- 雪の下草
- そよのしのや

萬勅風

大口のま神が原にふる雪はいたくなふりそ家もあらくに
 玉つばきみどりの色もみえぬまで巨勢の冬野は雪ふりにけり
 高ねにはけぬが上にやつもるらんふじのすそ野のけさのはつ雪

舍人娘子
 籠 兼
 内 大臣

新拾

いとゝ又かぎりもみえぬむさし野や天ざる雪の明ぼのゝそら
 雪はるゝ朝げにみればふじのねのふもとなりけりむさし野の原
 木がらしのはげしかりつる野原ともみえぬは雪のあしたなりけり
 小ざらはらしのゝをすゝきさわげども風のひまにもつもる雪かな

後嵯峨院
 眞 淵
 直 兄
 久 胤

○水邊雪 みぎはのゆき

- 水ぎは
- 川づら
- 川戸
- 清き河原
- 澤へ
- 田づらの澤
- 池水
- さざ波
- 水なわ
- あともなく
- ふりもたまらぬ
- いやはかなにて
- たまり水
- 水のよごせ
- こほりのうへ
- こほりばてたる

駒とめて袖打はらふかげもなしさ野のわたりのゆきの夕ぐれ
 ふみしける島のあとさへをしきかな氷のうへにふれるしらゆき
 もの毎にふりのみかくす雪なれど水には色ものこらざりけり
 けさみれば汀のこほりみづもれて雪の中行しら川のみづ
 とね川や消せて浪にながれゆく雪にもけさはうはにこりせり

定 家
 康 資 王
 貫 之
 景 樹
 春 海

○海邊雪 うみべの雪

- わたつみ
- わたの原
- 海ばら
- 青海原
- はなれ小島
- 磯山まつ
- 磯のすさき
- うの住いそ
- 浦わ
- 浦のこまや
- 浦さびしくも
- さ浦かけて
- 濱松
- 八百日ゆく濱
- 眞砂ぢ
- なぎさの松
- 沖のさな
- 沖のいくり
- 沖つ島山
- 浪もひさつに
- 浪のいろ
- 浪間よりみゆる

○つしらぬ浪 ○汐ひのかに ○まごふつり舟 ○つりするあま

千 新 勅 代

浪間よりみえしけしきぞかはりける雪ふりにけり松が浦しま
ふる雪にたく藻のけふりかきたえて寂しくも有か鹽がまの浦
わたの原八十島しろくふる雪のあまざる浪にまがふつりふね
雪ふかきおまへの濱に風ふけば松のうれこそ沖つしらなみ
けさみれば沖の小島はなかりけり浪にうかべるゆきのみにして
さやけさはこともおよばぬ白たへの袖のうらわのゆきのあけぼの
雪ふればみぬめの浦のうら松に朝日まつまをいのちなりけり
たが爲によみつくしけんわたつみのま砂の数とつもるゆきかな
なみの色にまがひもはてぬはし立の松の薄雪あかずもある哉

顯 前 家 實 三 光 廣 景 有
昭 白 隆 守 冬 憲 海 樹 功 郷

○里雪 さとのゆき

○里わがゆ雪 ○里わ ○里をあまた ○里つゞきふる ○里わく雪 ○遠里
○あまの住ささ ○河づらのささ ○ふもこの里 ○岡のべの里 ○山もこの里 ○み山への里
○すそのま里 ○さこのけふり ○人めかれにし ○一むらふれる

新 代

夢かよふ道さへたえてくれ竹のふしみのさとの雪の下折
里わかぬ雪のうちにもくれ竹のふしみのくれは猶ぞわびしき
初みゆきはれたる朝にみわたせば里のけふりもめづらしき哉
けさみれば麓の里はわかねどもけふりぞゆきのうへにたなびく

有 後 眞 同
家 京 淵
極 極 淵

○山家雪 やまがとのゆき

○外山の雪 ○軒ばの山 ○まくらの山 ○庵ながらみる ○柴の庵 ○谷かげの庵
○隣まごほ ○こけの通路

古 拾 千 新

はるまたでたれかつみけむせり川の竹田のみ雪かき分てけり
みなせ川ありてゆく水みどりにてふる雪白し山もとのさと
けさみれば里はありけり遠かたの雪にをれふす竹むらのおく
しら雪のふりてつもれる山ざとは住人さへやおもひきゆらむ
山ざとは雪ふりつみて道もなしけふこむ人をあはれとはみむ
山ざとのかきねは雪にうづもれて野べとひとつになりけるかな
まつ人の麓の道やたえぬらむ軒ばの杉にもきおもるなり
うちぎらしき雪ふるなりよしの山入にし人やいかにすむらむ
わがやどの庭にはあともなかりけり落葉がうへにつもるしら雪
し 雪のつもるにつけて山里は深くなりゆくとしをしる哉
山ざとはたれまつとしもなければも雪にとちたる窓のあやなさ
けさみれば軒ばの杉もうづもれて初雪ながら日をもふるかな

忠 兼 右 定 眞 同 景 日 美
岑 盛 大 家 淵 樹 善 卿

○松雪 まつのゆき

○松にかゝれる ○松におもる ○松につもれる ○松の梢 ○松がえしろく ○松も花さく
○松をもうづむ ○松の葉しのぎ ○松のすがた ○松のうら葉 ○岡のべの松 ○やまの松

- そなれ松
- 外山の松
- 遠山松
- たゆる松風
- 小松原
- 峰の松原
- 濱松がえ
- 玉松がえ
- 山松がえ
- 下折の聲
- 枝たわに
- 枝もさを々に
- ふりおもる

萬 同 六

池の上の松のをれ葉にふる雪は五百重ふりしけあすさへもみむ
 卷向の檜原もいまだ雲居ねば小松が上也あわゆきながら
 松の上にふりおほふ雪はあしたづの千代のゆかりに來ぬるとぞみる
 雲まよふ峰の松ばら音さえてあらしの上につもるしら雪
 とさわかぬ色をもかへてしら雪の松のすがたにつもる冬かな
 はらへばやかへりて雪のつもるらむさらばとよわる峰の松風

○竹雪 たけのゆき

- 竹のしら雪
- 竹の一むら
- 竹の葉やま
- 竹の林
- たかむら
- 園生の竹
- 軒ばの竹
- そのくれ竹
- 折ふす竹
- いさむら竹
- いくみ竹
- たしみ竹
- くれ竹
- なふ竹のこをよる
- さふ竹
- みざりをうづむ
- なびきふす
- 雪になびく
- 雪折のこみ
- 夜深き雪
- 雪をすがたに

千 同 風

ふる雪に軒ばの竹もうづもれて友こそなけれふものやまざと
 くれ竹の折ふす音のなかりせば夜深き雪をいかでしらまし
 吹はらふあらしはよわる下折の雪にこゑあるまどのくれ竹
 しめおきしまがきになびく吳竹の世にめづらしくみゆる雪かな

春 門
 春 夫
 廣 海
 年 平

○鷹狩 狩場 たかやり かりば

朝日さすまどのくれ竹おきかへりおのれとはらふ枝のしら雪
 くれ竹の葉分の風 音たえてなびくすがたにおもるゆき哉
 うつし繪の筆はかぎりのありけりとしらるゝけさの竹の雪かな
 さ夜更て音を去つる竹村は朝けの雪に未ふしにけり

- 大たかやり
- 御鷹かひ
- 鷹の子
- 鷹をあはす
- 鷹をこす
- 鷹山
- 鷹人
- 鷹をたづねる
- 鷹追ひ
- 鷹そらび
- はし鷹
- 大鷹
- あら鷹
- はや鷹
- ほつ鷹
- 朝鷹
- はこやの鷹
- やがた尾の鷹
- こや出の鷹
- 神のにへ鷹
- うつるふ鷹
- そばみの鷹
- 野ざれの鷹
- わしがほの鷹
- つみがほの鷹
- 羽とびの鷹
- 手なれの鷹
- やせ鷹
- つかれの鷹
- 霜ずりの鷹
- 大ぐるの鷹
- みざりの鷹
- ましろの鷹
- 白ふの鷹
- 黒ふの鷹
- 赤ふの鷹
- みだれふの鷹
- 黄黒ふの鷹
- 鳴ふの鷹
- もみぢふの鷹
- 蓼ふの鷹
- 藤ふの鷹
- な花毛
- を花すり毛
- かたけ
- ほら毛
- つばな毛
- かけの毛
- 赤毛
- 日かけの毛
- さ月毛
- 遠山毛
- 松げら毛
- やかた尾
- つき尾
- さび尾
- たすけ尾
- しら尾
- 遠羽
- ならし羽
- 青さし羽
- 追ひ羽
- 雨おほひ羽
- みぎり羽
- ひだり羽

- 左羽右羽つかふらし ○身より羽 ○みよりのさか羽 ○たなまきさの羽 ○たぶるひ ○鳥がらみの瓜
- 遠目 ○紺袋 ○えをひたす ○口紺 ○ほしえ ○おきえ
- さばり ○ふせぎぬ ○さぐらゆふ ○さやに入る ○さやまさり ○さやふむ
- こやぎばちかく ○こやがへり ○さかへる ○かへりさす ○かたがへり ○跡がへり
- このはがへり ○山がへり ○小やまがへり ○ふる山がへり ○山わすれ ○山ごころ
- 野ごころ ○風ながれ ○あげすつる ○面嫌ひする ○夜ずゑ ○おきかぬる
- 手もろき ○手なれ ○手ばなす ○手がへる ○あひあはせ ○いくつかれ
- ひこもどり ○なが追ひ ○こぬけする ○おこゑ ○ゆるすとなく ○打まばす
- まひおつる ○あたりおさす ○かなくりおさす ○かけおさす ○かきなづる ○なしへ草
- いりぐき ○おち草 ○日もおち草 ○組む ○たゝかひ ○はやる
- 空ごる ○野ごる ○草ごる ○こぬごる ○木居 ○菓おろし
- 菓まさり ○こさけび ○さしは ○鳥がり ○さだち ○さきこむる
- そりなだく ○はふ鳥 ○いけ鳥 ○さゝすゑ鳥 ○つかれの鳥 ○みふする鳥
- ぬすだつ鳥 ○さぶさの鳥 ○ひく鳥 ○ゆく鳥 ○木鳥 ○めざりつきする
- もみ雀 ○かくれかぬる ○あさる ○おき繩 ○大緒 ○鈴をさす
- をぶさの鈴 ○めざしの鈴 ○白ぬりのすゞ ○日つぎのみかり ○みかりの ○狩ちの小野
- 狩ちの小野 ○かりばの神 ○朝がり ○夕がり ○かり人 ○たつる使
- 犬かひ ○さまりなき ○さまり山 ○いで山 ○たつる使 ○駒なべて
- さゝふるす

名所 栗栖野(山城) 宇陀野(同) 片岡山(大和) 奈良志の岡(同) 飛火野(同) 交
 野(河内) 水莖の岡(近江)

萬 矢形尾の鷹を手にする三島野にからぬ日まねく月ぞへにける 家持
 金 はしたかをとりかふ澤にかけみればわが身もともにとやがへりせり 俊頼
 千 夕まぐれ山かたつきて立鳥の羽音にたかをあはせつるかな 同
 同 やかた尾のま白の鷹をひきすゑて宇陀の鳥立をかりくらしつる 仲實
 新 狩くらしかた野のましばをりしきて淀の川瀬の月をみるかな 公衛
 同 みかりすと鳥立の原をあさりつゝかた野の野べにけふもくらしつ 法性寺入道
 月 朝まだきかりばの小野に雪ふればしらふにならぬはし鷹ぞなき 實國
 同 草ふかみあさるさゝすやたちぬらんすゝの音こそ空にきこもれ 季成女
 代 賛まつる豊の明になるほどはみかりの鷹のやすむまもなし 輔仁親王
 同 はし鷹のすゝの篠原かりくれて入日の岡にきゝすなくなり 土御門院
 同 ふる雪のしらふの鷹を手にすゑてむさし野の原に出にけるかな 眞淵
 同 風まじりあられたばしる朝がりに手なれの鷹のきほひてぞゆく 譽正
 同 あら鷹のすさぶ心を引とめて駒のかけよりあはせつるかな 清香
 同 衣手にきのふはすりし小萩原朝立ならし鳥狩するかな 千隆
 同 くるゝ野もかりすてがたき鳥立とてつかれの鷹も猶ぞゆるさぬ 景範
 同 みのり野やはなるゝ鷹のゆきがたはたがくる雪のくまとなるらん 久秋
 同 すらせたる初かり衣のとは山はしぐれの雨に色付にけり 景樹

ますらをのかりばの小野にとる弓のたわむばかりに吹あらしかな
みかり野やねぐらの鳥もはし鷹のとがへるかげに立さわぐなり
鳥さけびの聲もみだれてきこもめり夕山ふいき今や立らむ

清先
魯道
魯重

○野行幸 野のみもき

- 大君のみゆき ○けふのみゆき ○いでまし所 ○御鷹
- 御鷹かひ ○みかりたゞせる
- 御かりば ○御かり野 ○御かりする ○御かり人 ○御さもつかふる ○八十件のを
- ものゝふのこも ○たつる使

新 六 堀次 同 同 代
みかり野はかつふる雪にうづもれて鳥立もみえず草がくれつゝ
やがた尾のましろのたかを引すゑて君が御もきにあはせつる哉
あはせつる真白の鷹も心あらば御興近くて空にとらなん
冬深き野へのみもきのけふもあれしらふの鷹をすゑてける哉
はし鷹もけふのみもきに心ありてふるまふ鈴の音ぞきこゆる
いにしへの野守のかゝみけふみればみもきをうつす氷なりけり
ふみしだくかれふのすゝき霜ちりて鳥立になびくみかり野の原
みかり野の花みだりて吹風にしのぶの鷹のきをひたつみも
霜がれのうだのかや野にいりみだれみもきつかふる御かり人かも
みかり野のさちのあまりのうれしきはかけぬこよひの淀の月かな

匡房
よみ人
兼昌
常陸
大進
叔蓮
長穂
正隆
清香
廣海

○炭竈 すみがま

山のかたそば又峰にても穴を掘り又土にて竈をつくり構へそれに木をこりつめ火を
かけあなの口をふさぎてむしやきにやくを云ふさむさのつよき年は多くやくよしな
り

- すみがまの烟 ○すみがまのささ ○世にすみがま ○峯のすみがま ○やくすみがま ○横のすみがま
- 松のすみがま ○すみやき ○すみやく里 ○すみやく峰 ○すみやく翁 ○炭やき衣
- 炭の小車 ○炭うる市 ○横山炭 ○炭木 ○み山木をやく ○こりつむ爪木
- 爪木こりつめ ○たきそへて ○けぶりたつ ○けぶりにくゆる ○けぶりにくもる ○けぶりの末
- けぶりぞしるき ○けぶりぞかすむ ○けぶりさびしき ○けぶりさだえぬ ○けぶり吹しく風 ○雪よりけぶる
- 木のまにけぶる ○たえぬけぶり ○なびくけぶり ○細きけぶり ○うすきけぶり ○立のぼる烟
- 遠山けぶり ○夕けたく烟にまがふ ○雲に立そふ烟 ○あたりの空 ○雪げの空
- 雪にさぢたる ○雪ふかき遠山 ○外山 ○山かたそば ○山風 ○さし寒き

名所 小野山(山城) 八瀬(同) 大原山(同) 小鹽山(同) 榎の尾山(同)

後 拾 後 拾 金 詞 新 代
人めだにみえぬ山ちに立雲をたれすみ竈の烟といふらん
み山木を朝な夕なにこりつめて寒さをこふる小野の炭がま
こりつみて小野の炭やきけをぬるみ大原山の雪のむらぎえ
すみがまに立けぶりさへ小野山は雪げの雲とみゆるなりけり
山深くやゝ炭がまのけぶりこそやがて雪げの雲となりけれ
日數ふる雪げに増る炭がまのけぶりもさびし大はらの里
此ごろは小野のわたりにいそぐらむ冬まらがほにみえし炭焼

左六臣
好忠
和泉式部
師時
匡房
式子内親王
相模

さびしさは冬こそまさされ大原や焼すみがまの烟のみして
大原や小野の炭がま雪ふれどたえぬけぶりぞしるべなりける
山がつのおのがふせやも炭がへにみえまがひたる夕けぶり哉
すみがまや雪の下折中々にけぶりとなりてあらはれにけり
なりはひの細きしもとの末の雲なびくもあはれ小野の炭がま
山めぐる雲におくれて夕けぶり空にぞなびく谷の炭がま
ひえの根に初雪ふれり今よりや小野の炭がまたきまさるらん
雲はみなかへりつくして一すぢのけぶりまがはぬ峯の炭がま

顯 仲 契 千 粘 春 景 定
仲 實 沖 薩 之 門 樹 信

薪

ふゆき

冬はことに折くべたく頃なれば堀川院後百首にも冬の題として入たり

- 柴 柴をりく 柴つみ車 木柴 折たく柴 真しばかる
- 山のましば つかま木 爪木になつむ ほど かりくぶる かまごにさりくぶる
- 庭につみおく 雪打はらひ

後拾 堀次 同 同 雪

さびしさに烟をだにもたよじとて柴折くぶる冬の山ざと
こりつみしほたなかりせば冬深きかた山ほらにいかですまよし
み山木をおのがかまごにこりくべて朝け夕けのけぶりたつなり
をりくぶるしばはさまく見ゆれどもけぶりはひとつ色にこそたて
岡のべや松のつま木に打しめり夕じもおもき袖のうへかな

和泉式部 忠房 常陸 兼昌 實隆公

○爐火

埋火 うづみ火

二題共同しく今世の火鉢爐手あぶり火桶などもみなうづみ火なり

- うづみ火のま 埋火のあたり 埋火のかげ 埋火の霜 埋火の灰 埋火の灰がら
- 埋火の下の心 おこす埋火 おむかふ埋火 おふせごの下の埋火 ほとたの埋火 柴の埋火
- 夜はの埋火 まごの埋火 圓の埋火 おき火 かり火桶 火桶
- すびつ 灰がちになる 灰の手すさび 灰の下なる 柴折くぶる 炭さしそふる
- 下にこがるゝ のこりすくなく 消のこる 消ぬ 消ぬひかり 光もうすき
- そらたき たきものゝ香 梅が香ぞする おきおこす かしおこす 手すさび
- おきぬて よりそふ むかふ ほのかに向ふ むつがたり かたらひかばす
- れ覺の友 れやの友 まごぬ 冬のまさぬ 春のみち さながら春の
- 冬ごもり 夜さよもに 夜もすがら さ夜中 れられぬ夜は さえさほる夜
- 冬の夜寒 更る夜 更るもしらす 霜夜もしらぬ 冴るもしらす 寒さわするゝ
- 嵐もしらぬ 板間の風

健冬 勝繼 嘉言

後 新

うづみ火のあたりは春の心ちしてちりくる雪を花とこそみれ
中々にさえは消なで埋火のいきてかひなき世にもあるかな

素意 永縁

板間より袖にしらるゝ山おろしにあらはれわたる埋火のかけ
うづみ火をよそにみるこそあはれなれ消れば同じ灰となる身を
うづみ火にすこし春ある心ちして夜深き雪をなぐさむる哉
ね覺してかきおどろかす埋火を冬の夜深き友には有ける
うづみ火のもとの心はかはらねどあたりはなれぬ身となりけり
くれなるに匂ふつゝじの枝炭は花をりくべし心ちこそすれ
ふみ見つゝひとりおもへる埋火にむかしの人もよりてありけり
うづみ火のあたり遠くて松風の音にさはらぬものがたりかな
底ぬるき火桶ばかりを友としてくらす老ともなりにけるかな
埋火のしろくなるまでかたる夜は下のおもひものこらざりけり

越前 相模 俊成 紀伊 黄中 景欽 千橋 廣海 景樹 知紀

○衾

ふすま

冬の臥具にて寒夜をしのぐ心また重ねきても猶寒き由などよめり

- たふすま ○むしふすま ○あつおすま ○もやのふすま ○しきぶすま ○かづくふすま
- 重ぬるふすま ○眞床 ○ゆたげのふすま ○まだらぶすま ○あけのふすま ○花のふすま
- 錦のふすま ○麻ぶすま ○麻手小ぶすま ○妹さふすま ○ひさりふすま ○夕べのふすま
- 夜のふすま ○圍のふすま ○昔のふすま ○をしのふすま ○おほふ ○かさぬる
- 引かさぬる ○引かさぬる ○身をあたゝむ ○ふしわびぬ ○老の夜寒 ○はだ寒し
- れや寒さ ○さゆる霜夜

萬 同 堀次 同 同 同

あつぶすまなごやが下にふしたれど妹としねゝば肌し寒しも
庭にたつ麻手小衾こよひだに妻よびこせぬ麻で小ぶすま
冬さむみ霜さゆる夜は明ぬれど麻衾こそぬがれざりけれ
君こばとはにふの小屋の床の上にあさで小衾ひきてこそをれ
きたれどもうすくれなるのあつぶすま色によりせば寒からましを
寐屋の上にあられたばしる夜半なれど妹と衾はさえずぞ有ける
ふすまなき人もある世に重ねても猶寒き夜をいひつゝぞぬる
わざもこがふすまの袖もかへるらんあまりに寒き山おろしの風
おく霜は猶しるましやむしふすまなごやが下にわれねたりとも
木がらしもよそにかづけばあつぶすま春にそひねの心ちこそすれ
あつぶすま引かさねてもひとりねはすきまの風ぞ寒けかりける
夜を寒みねやのふすまにうづもれて軒の嵐もよそに聞哉
霜こをる板間の風の寒き夜もふすまぞ冬をしばしよそなる

よみ人 しらず
同 顯 仲 俊 頼 忠 房 兼 昌 黄 中 景 樹 御 杖 菅 彦 勝 彪 茂 雄 茂 樹

○新嘗會

にひなめまつり

十一月中の卯日に行はせ給ふ神事なり新嘗會と申すはことしの初稻を神に奉らせ給
ふなる代のはじめには大嘗會といひとし毎のをば新嘗會と申なり

- ゆには ○はつ穂 ○はつ穂 ○ゆにはの穂 ○ゆにはのみづ穂 ○こよみけ

- 大みけ
- あまつ社
- 赤丹の穂に
- ふさのりこ
- かまぎこり
- ゆしり
- うらばみ
- あらたへ
- 日かげのかづら
- あきつ神
- ながみけ
- くにつ社
- 豊の明に明ります
- ものゝふ
- 相づくり
- いづしり
- うらべ
- てるたへ
- 日かげ
- あら人神
- 遠みけ
- 悠紀
- 千かひ
- 酒つこ
- 稲のみの君
- よごさ
- 四國のうらべ
- 青にぎて
- 山下ひかげ
- 大君
- 天つみけ
- 主基
- 八百かひ
- 酒なみ
- 持ゆまはり
- 天津神のよごさ
- すり衣
- 白にぎて
- 天の日かげ
- わが大きみ
- あまつ神
- くろき
- あまつ水
- 粉ばしり
- 持清まはり
- ひらで
- あかろたへ
- ふさたすき
- 神代より
- くにつ神
- しろき
- 天津のりこ
- 灰やき
- 持かしこみ
- 八ひらで
- にぎたへ
- ゆふだすき
- すめろぎの

知奴麻呂

八東

頓乘

眞淵

景樹

光胤

○豊明節會

とよのあかり

霜月の中の辰の日に行はるゝ公事なり是は今年の稻をきのふ神に奉らせ給ひて今日君もきこしめし臣下にもたまふ也ゑに行はるゝ節會なり

萬 同 年中

天地と久しきまでに萬代につかへまつらん黒酒白酒を

鳥山にてれる橘うすにさしつかへまつるはまへつぎみたち

いぬる秋をさめし稻穂手向るぞ年もたかなる始なりける

尊きや天皇は祭ながら神をまつらすけふの新嘗

さ夜中と更しづまりてすむ月にかねなき夜はの時をしる哉

新なめのもにはにてれるほし月夜君がみかげもさやけかりけり

- 諸人のあそぶ
- 山あゐの袖
- 舞のすがた
- 長き夜すがら
- なごめ子
- ひれふる
- くものうへ
- 天つなごめ
- かさし
- くもぬの巻
- 天の羽衣
- 玉もす引
- 雲のかけはし
- なみ衣
- をみの赤紐
- 千代のかざし
- 袖ふりそめし
- 立まふ
- 日かげ草

古 勳 同 緞 堀次 同 同 代

夫つ風雲のかよひち吹とちよをとめのすがたしはしとめむ
 久かたの月の桂の山人も豊の明にあひにけるかな
 あまつ風水をわたる冬の夜のとめが袖をみかく月かげ
 雲の上の豊の明に月さえて霜をかさぬる山あゐの袖
 をとめ子が雲の上まで袖ふれば日かげにまがふあまの羽衣
 をとめ子が袖ふりそめし小忌衣豊の明にたえせざりけり
 日かげさす小忌の赤紐打とけて立まふ人をもてはやすかな
 今日やさはみそぎのはてをとめ子がひれふる豊の明なるらん
 雲の上の豊の明の月ふけて置霜白し山のゐのそで
 豊年のとよのあかりの舞の袖おもへば民をなづるなりけり
 宮人の日かげのかづらながき夜もあけぬとみゆる雲の上かな

宗貞 匡房 式子内親王 今上御製 顯仲 仲實 俊毅 親清 興子 景樹 同

○賀茂臨時祭

十一月の下の酉の日に行はるゝ神事なり公事根源に云く先兼日に試樂調樂などいふ事あり當日は御祓あり庭座に使舞人着く大臣かざしの花を使舞人の冠にさす三献も

しは五献はてゝかさねがはらけのことあり社頭の義はてゝ使舞人かへりまゐりて還立の儀式あると見えたり

- 神のめぐみ ○神垣 ○神山 ○そのかみ山 ○かものみやしる
- かもの川浪 ○みたらし川 ○ゆふだすき ○みや人 ○かものみやしる
- うぢ人 ○まひ人 ○人長 ○衣のあかひも ○大宮人
- なみの衣 ○山あゐにすれる衣 ○山あひの袖 ○さくら山吹かざす ○すれる衣
- かざしの山ぶき ○かざし ○朝くらうたふ ○その駒うたふ ○かざしのさくら
- 立まふほごに ○かへる ○かへり立 ○庭火 ○もさすふ
- くもぬの月 ○ふる雪 ○霜さゆる ○あけぬ此夜は ○庭火うつろふ

拾新勅同同代同
 あし引の山あゐにすれる衣をば神につかふるしとぞおもふ
 もふだすき千年をかけてあし引の山あゐの色はかはらざりけり
 月さゆるみたらし川に影すみて氷にすれる山あゐのそで
 立かへる雲の月もかげそへて庭火うつろふやまあゐの袖
 いかなればかざしの花は春ながらをみの衣に霜のおくらむ
 山あゐにすれる衣にふる雪はかざすさくらちるかとぞみる
 をみ衣みだらし川にかけみえて立まふ袖にあげぬ此夜は
 君みきや櫻山吹かざしきて神の恵にかゝる藤なみ
 小簾のとにまこと日かげのさすまでも諷へと神やおぼしめすらん
 霜さやぐみはしの竹のませのもと世におもしろき神あそびかな
 貫之 俊成 成實 法性寺入道 三條入道 後徳大寺 隆信 直兄 千隆

山あゐにすれる衣の小さくにも雪ふきかくるかもの川かせ
いにしへの竹のうらばにふりし雪ふたゞびかへる世にこそ有けれ
高尙 景樹

○神樂 かぐら

十二月内侍所にて御神樂を行はるゝなり内裡ならぬ所の社頭にあるを里神樂といふ
採物とは柳幣杖笹弓劔鉾杓葛の九種なり本末とは其夜本方末方と人をわかちて歌は
せらるゝなり

- 里かぐら ○さ夜かぐら ○神あそびする ○神のみてぐら ○神の心をさる ○神のみまへ
- 神さびにけり ○神代おぼゆる ○神わざ ○岩戸の神わざ ○天にます神 ○青和幣
- しらゆふ ○ゆふかけて ○ゆふしで ○みてぐら ○柳さる ○柳葉のさきは
- しらにぎて ○こりもの ○人をさ ○くものうへ人 ○八十氏人 ○このもり
- みやつこ ○まごぬ ○しめのうち ○雲の庭 ○雲あにすめる ○御火白し
- 火所なく ○庭火たく ○此ささ ○かなづる袖 ○山あゐの袖 ○をみ衣
- あづまあそび ○あづまごこ ○大和琴 ○やまごこの葉 ○ふえの音 ○糸竹の聲
- 朝くらかへす ○朝くらのこゑ ○朝くらうたふ ○こも枕うたふ ○ほしうたふ ○あかほしうたふ
- あかほしの聲 ○うたふ柳葉 ○から神 ○そのからかみ ○その駒 ○その駒うたふ
- まゆみつきゆみ ○本末の聲 ○さゝ波 ○正木のかづら ○かづらをかくる ○聲高くうたふ
- 折かへすこゑ ○くりかへしうたふ ○おしかへし ○面白し ○月かげさゆる
- 霜夜の月 ○霜夜ふけゆく ○明る夜のなこり

古 神がきのむしろの山の柳葉は神のみまへにしげりあひにけり
よみ人

- 梅の初花 ○かつさく梅 ○冬木の梅 ○雪まの梅 ○菊より後の花 ○さくさく
- 先咲初て ○あまたさく ○ほゝみ初る ○日かげさすかたえ ○かたり初る
- 色香こなる ○まぢかきばる ○春のさなりに ○はるのこなた ○春に先だつ ○春をかすめて
- 春またで ○春まつ園 ○春まつ花 ○春まぢあへぬ ○まだきに時さ ○冬ごもり
- 冬ごもりせぬ ○さしにおくれぬ○さしのこなたに○さしの内に ○雪の内に ○雪にまどりて
- 雪の下なる ○鶯もしらたな

萬 古 拾 同 同 千 織

けふ降りし雪にきほひて我宿の冬木の梅は花咲にけり
 梅のはなそれともみえず久かたのあまざる雪のなべてふれよば
 梅のはな春よりさきに咲しかどみる人まれに雪のふりつゝ
 霜がれに見えこし梅は咲にけりはるにはわが身あはんとはすや
 梅のはな匂ひの深くみえつるははるの隣のちかきなりけり
 山ざとのかきねの梅は咲にけりかばかりこそは春も匂はめ
 鶯のなかぬばかりぞうめの花匂ひは春にかはらざりけり
 大かたは春だに花のまたるゝをとしの内にもはふうめかな
 色うせしわれやなになり年くれば梅は花にもかへりける哉
 梅のはなさけるかきねをたづぬれば必ずはるのとなりなりけり
 もちどりなかなぬかぎりは梅のはな匂ひながらに冬ごもりせり
 雪ちりてまだ春風のしらぬ間は匂ひも寒し梅の初花

家持
 よみ人
 長直景眞顯明元貫同
 穂明好樹淵方快夏之

○歳暮 惜年 としのくれ としをしむ

吟そめて春めく庭の梅がえにこがらしといふ風ふくなめ
 有功 癩

しはすの日かずの残りすくなき頃をもつごもりの日をもひろくよめりさて年のくれ
 のいそぎとは来る春のまうけを物する事を云へるなり

- さしはつる ○さしくるゝ ○さしの暮がた ○さしのはて ○さしは今 ○さしかへりゆく
- さしのをばり ○さしめいぬめり○さしの市 ○さしの末 ○さしの末の松 ○さし木つむ
- さし波の流て早き ○くるゝさし ○くれゆくさし ○通るさし ○さまらぬさし
- 身にそふさし ○身につもるさし○ゆくさし ○行さしの道 ○行年の矢 ○こさしのをばり
- こさしもくれぬ○一年の過る ○うべもさしや ○日かずすくなき○けふにはつる ○くれはつる
- しひて暮ゆく ○おくる ○のどかにおくる○ながれて早き ○さめあへず ○をしむ
- 近づくはる ○春さいふ名 ○春をばあす ○春をまつ ○春のさなり ○春のいそぎ
- いそなくいそく○里人のいそなみ○しださりそへて○ゆづり葉 ○門のまつ ○松の火ふりたて
- 身におごるく ○いたづらに ○雪ふりて

萬 同 古 同 拾 金

みもきふる冬はけふのみ鶯のなかむ春べはあすにしあるらし
 打なびくはるをちかみかぬば玉のこよひの月夜かすみたつらん
 雪ふりてとしの暮ぬる時にこそつひにもみぢぬ松もみえけれ
 梓弓はる立しより年月のいるがごとくもおもほゆるかな
 新しきはるさへちかくなりもけばふりのみまさるとしのくれ哉
 いかにせんくれもくとしをしるべにて身をたづねつゝ老はきにけり

三形王
 伊香真人
 よみ人
 野恒
 能宜
 三宮

新 同 代

けふごとくにけふやかぎりとおもへども又もことしにあひにけるかな
いそがれぬとしのく几こそあはれなれ昔はよそにきよしはるかは
はかなくてことしもけふになりにけりあはれにつもるわが齡かな
けさよりはしくるとみえし冬の日のかたぶくまゝに年ぞくれゆく
定まれる月日のかずはありながらくるとしもなくくるゝとし哉
もよしきの大宮人もいとまなきとしのをはりになりにけるかな
今は世にあるにもあらぬ老が身は捨てとしだにつもらざるらん
いたづらに過る月日のかぎりとおこたりしるき年のくれかな
としなみはよせてかへらぬならひをもわすれぬるゝ袖や何なり
かくばかりながれて早きとし浪をのどかにのみもわたりつるかな
ましらなく山にも年ををしといは世の人まねとなりやしてまし
此とのゝそらだきならでうめの花香にこそ匂へ春ちかみかも

俊 入 清 眞 御 景 同 久 春 知 有 同
道 道 輔 澗 杖 樹 鳳 正 紀 功 痛
成 左 輔 澗 杖 樹 鳳 正 紀 功 痛

○待春

はるをまつ

○春をこそまで ○春のいそぎに ○春をばあすさ ○春たれば ○さなれる春 ○ちかながら
○いそがれて ○ゆくさしたをしみながら ○花のゆかりに ○花さばなしに

後 同

いつしかと山のさくらもわが如く年のこなたに春をまつらむ
關こゆるみちとはなしにちかながら年にさはりて春をまつかな

よみ人
しらす

拾 金 新

人しれずはるをこそまではらふべき人なき宿にふれるしら雪
何となく年のくるゝはをしけれど花のゆかりにはるをまつ哉
君が代にあふくま川のうもれ木も氷の下にはるをまちけり
立かへる春をひとへにまつらがたひれふるともとしはとまらじ
としふりて本の身ならぬ心にははるもむかしの春をやはまつ
竹むらにつばさならはす鶯もはる待がほにみゆるころかな
こりすまにまたこそ春はまたれけれ身にし波のよるもしらすて
世のさがもしらではるまつすみかにはくれやすき日ものどかなりけり

兼 内 家 春 眞 千 禮 春
盛 大 隆 蛭 淵 淵 淵 淵 海

○魂祭

たままつり

十二月のつくる日先祖の魂をまつるをいふゆづり葉をたむけものゝ下にしくことあり

後給 詞 六

○けふにあふ ○たままつる ○なきたまの ○手向する ○かへりば ○ゆづりはの
なき人のくる夜ときけど君もなし我すむやどや玉なきの里
玉まつるとしの終になりにけりけふにや又もあはむとすらむ
なき玉のとしとともにしかへりなばゆくをしとも思はざらん
いたづらのとしのをはりとなき玉にむかふ面わもやさしかりけり
なき人の立かへるべき春ならばいかにうれしきこよひならまし

和泉式部
好 忠
よみ人
延 香
景 樹

○除夜 としのはて

十二月の晦日の夜をいふ又必夜といはてつもごりの日のことをよめる歌も多し又大内にはこよひ追儼といふ公事ありこれはなやらひとひて節分にあることなれど大かたとしの終なれば節分にかゝはらでこよひよむもよろしいへり

- けふになる ○けふくれば ○けふくればつる ○けふをかぎり ○けふばかり
- けふばかりとし ○としはけふのみ ○ことしもけふに ○冬はけふのみ ○こそとやけふな
- 又やはとしの ○ことしも通ぬ ○くれぬとて ○こよひばかり ○こよひかぎれる
- こよひにかぎる ○こよひつきせぬ ○夜もすがらまもる ○まもる夜 ○のこる一夜
- 奥竹の一夜ばかり ○おくりむかふと ○ほるのさかひ ○春明がたに ○あすの霞
- 門松をたつ ○なやらふ ○岡見する ○をしめたゞ ○をしめども
- いつよりも ○いつにまさりて

かぞふれば我身につもるとし月をおくりむかふとなにいそぐらむ 兼盛
 何ごとをまつとはなしに明くれてことしもけふになりけるかな 國信
 さりとともと歎きくてをしみつることしもけふにくれはてにけり 公光
 一年ははかなき夢の心ちしてくれぬるけふぞおどろかれぬる としむれ
 石の上ふる野の小ざゝ霜をへて一夜ばかりにのこるとしかな 攝政
 はる立ときくにも物のかなしきはことしのこぞになればなりけり 長家
 いつよりもけふのくれこそかなしけれかくても年のつもるとおもへば 宗邦

はるをまちとしをしををしみていづかたによるとしもなく夜ぞ更にける
 もりあかす心もしらてみな人をねよとのかねのひやく夜半哉
 夜はすでにふけにけらしも一年をとちむる鳥ぞ鳴そめにける
 門さしてしづけく夜半をまもる哉なしとこたへむ心ならねど
 たきすてゝ過る大路の松の火にことしのかげも今はとぞみる
 水鳥のをしとおもへどふくる夜の年のみなとにねをやなかまし

眞淵 保敬 春門 美痴 芳樹 有功 有痴

今古和歌字比麻奈備

鈴木重胤 編輯

戀之部

○戀 こひ

- こひてふこそ ○こひさゝろ ○こひわぶる ○こひなしこひば ○こひしなん ○こひ疲る
- こひつゝぞふる ○こひ草 ○こひわすれ草 ○こひのやつこ ○こひのけぶり ○こひのしげき
- こひのやまひ ○こひのひも ○こひのみだれ ○こひのやまなく ○こひのせき ○かた戀
- もろこひ ○ならぬ戀 ○わが戀は ○夢にもこふる ○こゝらこひしき ○妹こひしきに
- 妹がり ○我をふるせる ○おもはぬ人に ○人にくからぬ ○人めもる ○人しるらめや
- 人めのひま ○人なき床 ○人の手枕 ○枕もしらぬ ○ひさりね ○いくばえに
- むつごこ ○世々のかれごこ ○打出かれて ○あくがるゝたま ○心づかひ ○心ひさつになげく
- 心のしるべ ○心のおく ○底のこゝろ ○まごふ心 ○あだし心 ○下の心
- そらになる心 ○物おもふ ○中空に物おもふ ○おもふてふこそ ○おもふ思ひの ○身にあまる思ひ
- 打わびて ○あだしちぎり ○露のちぎり ○末もさほらぬ ○ありはつまつき ○あふよしをなみ
- みまぐほしき ○さりさめぬ ○あはれこも ○中のおし月 ○なれまさる ○いろみえぬ
- わりなくも ○わりなくつゝむ ○いひしらぬ ○いたづらふし ○いつしかさ ○かはるならひ
- よその月日 ○ふみづかひ ○かへる玉草 ○袖のうつりが

萬 敷島の倭の國に人ふたり有としもはやなにかなげかむ
古 ほとゞぎすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉

よみ人
しらす
同

現にぞとふべかりける夢とのみまどひしほどやはるけかりけん
あひみでも有にしものをいつの間にならひて人の戀しかるらん
ともかくもいはなべてになりぬべし音に鳴てこそみすべかりけれ
うつゝにはいつあはむとか夢にだにまだみぬ人の戀しかるらむ
戀草の露のみだれのわりなさをいかでならはぬ身にはしるらん
石木よりなりもや出し我おもふ人のこゝろはあるべくもなし

同 同
和泉式部
尊孫
黄中
雲當

○初戀

はじめの戀 はじむる戀

見ても聞てもはじめのおもひそむる心をもいふ又もとより心におもへどもはじめ
かくとしらするなどさまぐによめり

- 初草 ○初花染 ○初しぐれ ○初山いろ ○こひ山ぶみ ○みだれ初る
- わけそむる ○涙かけそむる ○しらせそむる ○露かけ初る ○入そむる ○ふみそむる
- 思ひそむる ○おもひしらずも ○おもひたつ ○おもふより ○何思ふさもなく ○心をかくる
- 戀の山口 ○戀のみち芝 ○なれぬ戀 ○しうぬ戀路 ○いわけなく ○うひくしく
- うちつけに ○うち出る ○今よりは ○けふよりは ○日にそひて ○ほのめかす
- いかでかは ○ふみまよふ ○まよふべき ○いさやまだ ○まだしらぬ ○あたましほ
- しらでしも ○ゆくすゑ ○今よりの涙のはて ○たがならはしの露
- たれにならへる ○かく玉づさ

春日山朝ゐるくものおほしくしらぬ人にもこふるものかも
いざやまだ戀てふこともしらすなくにこやそなるらんいこそねられね

中直女耶
よみ人
しらす

かすめてもおもふ心をしるやとてはるの空にもまかせつるかな
おもふよりいつしかぬるゝたもとかな涙ぞ戀のしるべなりける
よのつねの事ともさらにおもほえずはじめて物をおもふ身なれば
ならはねばまだしらねども戀やさはあやしかるべきながめ成らん
ほのかにも見ばこそあらめみぬ人を思ひそめつる心なになり
さをしかの音にこそたてね初尾花入野の袖に露ぞこぼるゝ
きのふまでなとはなくておもふ事けふ定りぬ戀のひとつに
世の中の一花ごろもいつの間にも身にしむまでは思ひ初けむ

良 題
筑 前
和泉式部
土御門内
隆 子
大 平
契 沖
景 樹

○忍戀

しのぶ

おもへどもふかく心におしこめていろに出さじとするなり

- 人しれぬ ○しられたな ○いろみえぬ ○もらさたな ○軒のしのぶ ○軒ばの草
- つむみなみだ ○人しるらめや ○つむみはつべく ○しのぶの露 ○下のおもひ ○心ゆるさす
- 人もこそしれ ○猿こそつゝめ ○袖のしがらみ ○人目づゝみ ○心の中のおもひ ○もらさたの心づかみ
- 人目の隙をおもふ ○しのぶ心のおく ○みごもりのあし ○みかくれし草 ○いはでのみ
- いろに出さたさ ○忍びれになく ○下のおもひ ○下のこゝろ ○こゝろのそこひ ○つゝむたもさ
- 口なこの下染衣 ○しる人なし ○心ひさつ ○しのぶもちずり ○岩間がくれの水 ○下にみだるゝ
- いはで物おもふ ○むれのくるしさ ○下にこがるゝ ○しのぶ草 ○おさふる袖 ○末つひに
- たれゆゑに ○こもりのみ

いかにして戀ばか妹に紅の末つむ花の色に出ずあらむ

よみ人
しらす

浅茅生の小野の篠原しのぶとも人しるらめやいふ人なしに
忍ぶれど色に出にけりわが戀はものやおもふと人のとふまで
戀すてふわが名はまたき立にけり人しれずこそおもひ初しか
戀しともいはぬにぬるゝたもとな心をしるは涙なりけり
忍ぶるに心のひまはなけれども猶もるものはなみだなりけり
春日野の若むらさきのすそ衣しのぶのみだれ限しられず
あぢきなく心にこめし年月も人にしられで世をやつくさむ
枕にもなみだもらさぬわが戀はあそふは袖やしらはしらなん
しのぶとて戀しきながら世の中の人めに門もとざしける哉
かくばかりくるしきものをうつせみの人目を何としのび初けむ

○忍久戀 忍經年戀 しのびて久し しのびて年をふる

忍ぶほどの久しきなり經年はとしをこえて忍ぶよし也
○さしふれば ○年へにけれぞ ○いつまでか ○おもひふりにし○さし月の ○よをつくさむ
○久しくも ○ふりぬる跡 ○つもる月日 ○しらぬ中の命○心にふるす

池水のいひ出ることのかたければみごもりならでとしぞへにける
人しれぬおもひは年もへにけれどわれのみ知はかひなかりけり
戀しさをうき身なりとてつゝみしはいつまで有し心なるらん

同 兼 盛 久我内大 入道前關白 樂 平 廣 中 竹 翁 景 樹 小野宮 洲 光

わすれては打なげかるゝ夕かなわれのみしりて過る月日を
いはでおもふほどにあまらば忍草いとひさしの露やしげらん
しられじとしのびにぬらすわが袖の朽はつるまで年はへにけり
よそにだにとはぬ思へばとし月をしのぶになれて人やわすれし
わが戀はみ山がくれのいはね松いはねばこそあれとしもへにけり

○難忍戀 しのびかぬ

もとより忍ぶのこゝろなるも今も堪かたくなりぬる也
○忍ばれぬべき物ならば○あらはれぬべき ○もれもやせむこ ○涙ぞしるき ○たへにおもひ
○たへのけしきは ○思ふにも今はあまりぬ○こぼすがたり ○つひにはもらす ○心よわくも

梓弓引てゆるべきますらをや戀とふものをしぬびかねてむ
忍ばんに忍ばれぬべぬ戀ならばつらきにつけてやみもしなまし
つゝめども堪ぬおもひになりぬればとはすがたりのせまほしき哉
もらさじの心をそれとしるらんをそむきてのみもちる涙かな
未つひによりもやせむますらをの忍ぶにたへし心づよさも

式子内親王 よみ人 くらさ 眞 子 眞 信 宜 長 同 枝 直 枝 直

○忍切戀 しのびてせちなる

忍びておもふこゝろのいひしらす深切になりきはまりたる也
○戀はしぬさも ○身をばすつさも ○きえれたッ ○忍ぶるにたへずなる○身にかへてこそ
○ならばしの外 ○玉の緒よたえなば ○滑て物おもふ ○きゆばかり ○こひしなむ

古 新 勅

紅の色には出じかくれぬの下にかよひて戀はしぬとも
玉の緒よたえなばたえねながらへば忍ぶることのよわりもぞする
よしさらば戀しきことを忍びみてたへすはたへぬ命とおもはん
人めもる心にさはる雲もがなふるは身をる雨にざりける
かきならすことの音にさへもれぬやとわが手ずさびもつゝましきかな

友 則
式子内親王
よみ人
しらす
譽 重
英 好

○思不言戀

おもひていはす

心におもへどさすがにいひ出ん事のつゝましくていはざるなり

- いはでおもふ ○いはたゞ ○いはでみだるゝ ○打出がたき ○しる人もなし ○いはればえこそ
- しるやいかに ○よるのほたる ○むすぼゝる ○もらしかれ ○忍ぶおもひ ○かくさだに
- 山吹の口なし ○山吹のいはぬ色 ○しのすゞき ○若しるの松 ○いはたのもり ○おもへども
- あらはさぬ ○おもふさて ○我あらはさぬ ○しられどさ ○いかにして ○おしこめて
- 深きおもひ ○深き心 ○うけひかた ○何ゆゑに ○いかでこは ○おしこめて

古 金 勅

かり菰のおもひみだれてわれこふと妹しるらめや人しつげすは
おもひあまりいかでもらさむおく山の岩がきこもる谷の下水
おろかにぞ言の葉ならばなりぬべしいはでや君に袖をみせまし
言にいであいはぬはいふにまさるをと人のしるらん時をこそまで
打出むことのかたきをおもひぬの夢のうちさへはかなかりけり
ねぬなはのくるしくもあるかさき玉のを崎の池のいひも出ねば

よみ人
しらす
公 實
崇 徳 院
廣 海
英 好
千 隆

○欲言出戀

いひ出むとす

いひ出てつれなからばとさりげなくつゝむおもひぞいといくるしき

声 庵

おもふ心を打出んとするにてまだいひいでざるほどなり

- しらせまし ○しらせやせま(かくさだに) ○それさしも ○もらさばや ○おもふ心た
- 人にしらせむ ○つげやらむ ○いさせめて ○今はたゞ ○さてしもやま(ト) ○あぢきなく

後 拾 續

ゆくかたもなくせかれたる山水のいはまほしくもおもほゆるかな
歎あまりつひに色にぞ出ぬべきいはぬを人のしらばこそあらめ
つらからん時こそあらめあぢきなくいはで心をくたくべしやは
もらさばやさてもつらくて戀しなばそれゆゑなりと人のしるべく
忍ぶれど猶おもふには玉すだれまことしらせむひまだにもかな

よみ人
しらす
同
重 家
直 養
契 沖

○初言戀

言始戀

洩始戀

言始後増戀

初言戀は今はじめてもらし初るなり○言始戀もこゝろ同じ○洩始戀もおもふ心をも
らしきこゆるなり○言始後増戀いひそめてよりいよ／＼おもひのまさりたるなり此
題ども大やう同じかるべしといへどもよくけぢめをわくべし

- しらせそむる ○もらし初る ○いひそむる ○ほのめかす ○うちいつる ○忍びあまり
- おもひかれ ○おもひあまり ○つゝむにあまる ○忍びえぬ ○心にもらす ○うちつけに
- 花すゞき穂に ○いづるここの葉 ○しらせつる ○けふこそは ○心よわくや ○何しかも
- 打出の漬 ○忍びえぬ思ひ ○しらせ下(こ)こ

後拾 千 後

ひとりのみ戀ればくるし呼子鳥聲に鳴出て君そさかせむ
しのすゝき忍びもあへぬ心にてけふは穗に出る秋としられん
歎あまりしらせそめつる言の葉もおもふばかりはいはれざりけり
わが戀は岩間をくゆる山水のもらすにつけて袖ぞぬれける
いくたびも其事となく過ししも打いづることけふはじめなれ
むさしのゝ末にはのめく花すゝきはてなきものは思ひ也けり
やさしとていはでやみなば岩はしるたぎつ心をいかせくべき

よみ人
しらす
輔親
明賢
直重
千正
陸

○聞戀 きく

人傳にきゝて戀ふる也また名を聞ても聲を聞ても戀ふる也

○おとにきく ○人つて ○風のたより ○つてにきく ○まだみぬ人 ○きくからに
○ものごしに ○その名ばかりに ○見ぬおもかけ ○をりくゝよそに ○きく人傳に ○世にもりて
○きくにゆかしき ○よそのならへ ○きよも過ぎで ○このみぞよき ○おもふあたり
○かたりしはなをさりこそ ○おもひやらるゝまごの内 ○吹風の音にきく
天雲の八重雲がくれなる神の音にのみやも聞わたりなん
おく山の木の葉かぐりてゆく水の音にきゝし道忘らえず
初かりのはつかに聲をきゝしより中空にのみ物おもふかな
ほとゝぎすはつかなるねをきゝ初てあらぬもそれとおほめかれつゝ
きゝしより早おもかけの身にそひて知らぬ心ぞまづうごくなる
よみ人
しらす
同 恒
伊 勢
春 夫

○人傳戀 ひとづて

たま〜のたよりにきくの白露もつもればそでの淵とこそなれ

景 け

人傳に書をつたへおもふ心を人していはせおもふ人の事を人づてにきく事などをよむ

○たのむつかひ ○つたふる人 ○ひま傳のここの葉 ○折よくばつげふ ○人つてにいへども
○たよりうれしき

萬 ふる里のならしの岡のほとゝぎすことづてやりきいかにつげきや 田村大嬢
百 こえぬまはよしのゝ山のさくら花人傳にのみきゝわたるかな 貫 之
おほつかないかにつたえてかくばかり世に似ぬ人のつらさなるらむ 太 訓
武陵のまついかばかりつらくともみきとつたへし人をたのまん 枝 直

○見戀 みる

よそながら見て心をつくすなり

○さらぬおも影 ○むらあしのほの ○見かはすほご ○わすれぬかけ ○みぎはまさりて ○見そめつる
○みしおもかけ ○みてのみや ○みし日より ○見しまゝに ○かげもみむ ○しらせばや
○かつくも ○一目ばかりに ○かつみしほご ○よそながら ○みるめかる ○浦のみるめ
○かつみるまゝに ○みしまがまれ ○あかぬみらめ ○峯のしら雲 ○みてしより ○見えがくれする
○目おれせず ○ほのかに ○ほのく ○なにはのみつ ○花がつみ ○目には見て
○花のすがた ○いもがゑまひ ○みか月の ○玉だれの ○ほのみてし

萬 同 後 勅

目にはみて手にはとられぬ月の中の桂の如き君をいかにせん
眞寸鏡手にとりもちて朝なみくれども君をあくこともなし
君によりわが身ぞつらき玉だれのみすは戀しとおもはましやは
袖ぬれてあまの苜ほすわたつみのみるをあふにてやまんとやする
玉だれのをすのすきまにみずもあらずたゞ佛のこゝちこそすれ
思ふかひ浪によるてふうきみるの見るは中く恨なりけり
いつはりをまつ夜とならばいかならん見てしもかゝる戀せられけり

湯原王
ふみ人
しらす
同
業平
景樹
黄中
藤繼

○不見戀 未見戀 まだ見ぬ

いまだ見ざる人ながらうちつけに戀しくなりたるなり

- 見ぬ人こふる ○おぼつかない ○目にみぬ ○おもひやりつゝ ○かげもみぬ ○夢にだに
- 空にこふる ○ほのかにだにも ○見ばこそあらめ ○はつかにだにも ○みるめかづかぬ ○おほくしく
- よそにても ○よそにだに ○なにとして ○わけなくも ○あやしきは ○みぬぞわびしき
- 夢にだに

古 後 同 新

世中はかくこそ有けれ吹風の目に見ぬ人も戀しかりけり
わが心いつならひてかみぬ人をおもひやりつゝ戀しかるらむ
世とよもにあふ戀川の遠ければ底なる影をみぬぞわびしき
にごり江のすまむことこそかたからめいかでほのかにかげをみせまし
ほのかにもまだみぬ人をいかに又きしる袖の泪なるらん

貫之
友則
ふみ人
しらす
同
直道

○僅見戀 纒見戀 はつかにみる

僅に人をみてこふる也

- ほのかにも ○かげばかりみて ○一目からにや ○見しばかりにや ○ほかなきものは ○おぼろに人を
- おほくしく ○よそながら

夏草のみぬめの浦にいさりして眞袖に浪をかけたぬ日もなし

千 陸

萬 同 古 同

夕月夜あかとき闇のおくしく見し人もゑに戀渡るかも
ほのかにもきみをあひみてかげろふの長き春日を戀渡るらん
春日野の雪間を分て生出くる草のはづかにみゑし君かも
山櫻霞の間よりほのかにも見えてし人こそ戀しかりけれ
白玉を手にかくこそはかたからめ光をだにもなどかみざらん
水草のし筒井にうつるもふづゝのかげのみゝてや思ひしづまん
ほのみてしその時よりぞわが心ゆくへもしらすなりわたりける

ふみ人
しらす
同
忠岑
貫之
千代女
千陸
尊朝

○夢見戀 もめにみる

思ふ人を夢にみて戀しさのまさるなり

- 思ひれの ○夢のたゞち ○しねびてぬれば ○うたゝれ ○枕さだめぬ ○夕暮の夢
- みしほごの ○見はてぬ

み空ゆく月の光にたゞ一目あひみし人の夢にしみゆる
秋柏うるや川べのしぬのめのしぬびてぬれば夢にみえけり

娘
子
ふみ人
しらす

袖のうへにかゝれる波はまさしくてみるめかりねの夢ぞはかなき

枝直

○尋戀 たづね

契置つる人にてまさならぬ人にて戀しとおもふ人のやどを尋るなり

- たづねみむ ○しるべなき ○たづねさも ○さめ来ても ○なしへしやぞ ○やぶらひわぶる
- しるべさふ ○さふ方もなし ○分わぶる袖 ○草の原 ○もずの草ぐき ○此さこ
- 三輪の山本 ○杉の楢 ○杉をしるしの宿 ○風をたより ○杉の門 ○いづくさも
- さひふらむ ○さひわびぬ ○こさふささこ ○さふかひもなし ○露のやどり ○さばむ方なき
- 人のありか ○あらぬやどり ○思ふむぐらふ ○いかさまに ○いかにして ○しるべなくさも
- ほのかにだにも ○あらぬもそれさ

もろこしのよし野の山にこもるともおくれむと思ふ我ならなくに

左大臣

白波のあとなき方にゆく舟も風ぞたよりのしるべなりける

勝直

とふやとて杉なき宿に來にたれど戀しき事ぞしるべ也ける

よみ人 芳秀

なき名をもたてなばたてねそれをだに尋よるべき也かりにはせむ

廣足 蘆庵

沖つ浪いかにかづきてしら玉のしづくあたりをそことしるべき

よそながらとふべかりけりうき人のたづねときかば猶やかくれん

○久戀 舊戀 經年戀 ひさし しとをふる

久戀經年戀はともに逢すして年月をふるこゝろなり○舊戀は久しき戀をも又昔みし人の中絶て久しくなりぬるをわすれず戀ふるこゝろをもよめり

- こしをへて ○こしもふる ○ふるさちざり ○中の年月 ○うつりゆく ○年月のおもひ
- いく春秋 ○つれなく過て ○ふるき枕 ○つしるうらみ ○あまたえて ○古川のべの
- この年月 ○こしふる戀 ○猶わすられぬ ○あはぬ月日 ○いにしへ野中のしみづ
- ふる野の道 ○逢みしは昔がたり ○思ひよらぬ ○思ひもこりぬ ○なぐさめきぬる
- つらき月日 ○うきこし涙 ○こはでかひなき ○いつまでか ○いつかはさ ○いつをまつ
- うつりゆく ○同つらさ ○ものわすれせぬ ○つれなきながら ○つれなき色に ○いくたびくつる袖

をとめらが袖ふる山のみづ垣の久しき時もおもひき有は

人戸呂

心にはわすれぬものをたま／＼もみざる日まねく月ぞへにける

駿河廣呂

いにしへに猶立かへる心かな戀しき事にもわすれせで

貫之

久しくもこひわたるかな住の江のきしに年ふる松ならなくに

俊頼

とし月は昔にあらすなりゆけど戀しき事はかはらざりけり

貫之

さりともとおもふ心にひかされて今まで世にもふるわが身かな

西宮

おもひつゝへにけるとしのかひやなきたゝあらましの夕ぐれの空

太上天皇

岩が根の松のためしをたのみしやとしへてあはぬ根ざし也けん

依平

しるしなきたのみばかりにながらへていのちもはてはわれをうとまん

芳樹

むなしくておくりむかへし年月の心ながさは人ぞしるらむ

伴鹿

さきの世とおもふばかりになりぬるを何にわすれぬ夢はみゆらん

黄中

かれしその昔ばかりはしたはぬやわれさへうとく今はなりけむ

真淵

新 後拾 古 同 萬

後 同 古

○祈戀 いのる

おもふにまかせかねて今は神にひたふる祈るよしなり

- れぎかくる ○れぎこさ ○神やうけぬ ○かけてたのむ ○祈しろし ○神のいさむる
- みしめなば ○榊葉 ○神垣 ○ゆふだすき ○大ぬき ○戀のやまひ
- むすびの神 ○むすぶの神 ○貴船川 ○ほつせ山 ○みそぎ川 ○みたらし川
- れぎかくる ○たのみをかくる ○靈幸ふ神 ○千早ぶる神 ○こひのむ ○わかづきて
- 祈る身 ○祈るらむ ○いのりても ○いのるてふ ○神だにも ○岩にくたくる
- みたらしの涙 ○波の白ゆふ ○しるしもみえぬ ○しるしなき ○神のいがき ○貴船川浪にしをれて
- 戀せトのみそぎ ○神もいさめぬ

新拾古同萬

佐保過てならの手向におくぬさは妹をめぐれずあひみしめとぞ
 天地の神をもわれは祈てき戀とふものはかつてやますけり
 戀せじとみだらし川にせしみそぎ神はうけずぞ成にけらしも
 おもふ事なすこそ神のかたからめしばしわするよ心つけなむ
 幾夜われ浪にしをれて貴船川袖に玉ちる物おもふらむ
 神垣に猶ぬさむけてうつりゆく人の心の花しづめせん
 あふせをやさらに祈らん戀せじのみそぎはうけぬ加茂の水垣
 行かよふ貴船のおくも杉むらも敷しるばかり日かすへにけり
 中くく神のいさむる道ならばぬさに泪はかゝらざらまし

長屋王
よみ人
しらす
同
同
攝政
美隆
蘆庵
忠友
枝直

○祈空戀 祈不逢戀 いのれどかひなし

両題心おなじくいのれどもしるしなくしてあはざる也

- かひぞなき ○いのれごも ○うけひかぬ神 ○よそにのみ ○神もたすけぬ ○いたづらに
- なにとして

後拾萬

山しろの岩田のもりに心おそく手向したれば妹に逢がたき
 なにごとを今はたのみ千早ぶる神もたすけぬわが身也けり
 かしまれるつくまの神のつくぐとわが身ひとつに戀をつみける
 わがためはいのるしるしもなきものを何ぞは人のことのまよなる
 いかさまに人をわするよよしもあらばせめてわするよかひとおもはん

よみ人
しらす
同
同
彦麻呂
枝直

○誓戀 ちかふ

行末までかたみにかはらじとふかく契りをかけて誓ふ也

- あさからず ○かはらトこ ○もろごもに ○神かけて ○かけしちぎり ○いひしこの葉
- ゆく末かけて ○千の社 ○神のみまへに ○いのちをかけて ○ちかごこ ○なき世まで
- かはるなよ ○おしへ人 ○ひくしめなば ○ちかひによらぬ ○人のいつはり ○わするよ身をば
- この葉この誓 ○あはれさば ○わすれトな ○我やはさら ○心のしめ ○たのまトよ
- たのまれぬ ○かならずこ ○おぼつかなくも ○かはるさも ○よしやさば ○猶たのむ

古萬

みわ山の山下とよみゆく水のみをしたえずは後もわが妻
 君をおきてあだし心をわがもたば末のまつ山波もこえなむ

よみ人
しらす
同

うれしくは後の心を神もきけ君わすれずばわれも忘れじ
天地の中に出立ちかひてしわれや今更つまふたりねむ
妹とせの中にながるゝ川水のたえむ世にこそ君とかれなめ
よろづ代も引はたがはじみしめなほらしゝ神のなかりし物を

馬内侍
よみ人
千 隆
有 功 卿

○契戀

ちぎる

契約のこゝろ也かならずと契ぬれどかはる世の中のならひにて契もたがひやせむな
どのこゝろつかひをもよめり

- 浅からず ○かはらぐさ ○もろさもに ○神かけて ○たのむ契 ○たのむ中
 - 千代もさ ○かけし契 ○いひし契 ○ちぎりし中 ○後の世を ○來む世の契
 - 契の末 ○かれごさ ○此くれさ ○たのめおきし ○二道かけぬ ○ふかく契し
 - 末の松山 ○井出の下帯 ○もろ神 ○ゆく末 ○こゝろみよ ○もろさもに
 - おぼつかな ○契おかむ ○たゞたのむ ○しらぬゆくへ ○みね行末 ○契ればさても
 - いつはりさ ○かりそめの ○なほざりに ○いたづらに ○はかなくも
- わがせこは物なおもひそ事しあらば火にも水にも我なげなくに
あすか川淵は瀬になる世なりともおもひそめてし人はわすれじ
おもふてふことの葉のみや秋をへて色もかはらぬ物には有らむ
うつせみのむなしきからになるまでも忘れんと思ふ我ならなくに
いつはりにならひても又ちぎる哉まこともたえてなき世ならねば
山松の千年までこそかたからめ葉がへぬ色を猶やちぎらむ
- 安部女郎
よみ人
千 隆
同 深 養 父
宣 長
千 隆

おろかにもおもふらめども今更にまことの外は何をちぎらむ

景 樹

○契空戀

契變戀

契絶戀

ちぎりむなし

これらの題おほかた同じことにて契りしことのむなしくかはれる也

- いたづらになる ○むなごさも ○はかなき中さ ○わりなくたゆる ○そらごさも
- なほざりに ○このたがふ ○いつはりさしらで ○かはるならひの ○人わらへにも
- まだきにだにも ○かはらぐさ ○たのめしごさの ○おほよそに

萬代とちぎりし事のいたづらに人わらへにも成ぬべきかな
契こし事のたがふぞたのもしきつらさもかくやかはると思へば
はかなくぞしらぬ命を歎きこし我かねごとのかゝりける世に
なにはえの朝しほみちの薄氷むすびもはてすなる契かな
玉のをよかゝりし中は絶けるをなにかゝりて物おもふらむ

敦 敏
實 方
式子内親王
契 沖
宣 長

○憑戀

たのむ

契を眞實にたのむなり因にいふたのむとは此方よりかなたをたのむ事にてたのめば
かなたよりこなたを頼にするなり

- しひても頼む ○人の契を ○たのむにつけて ○たのむごさの葉 ○あひなだのみに
 - 偽の世を忘れても ○うしろめたくも ○おぼつかなきを ○さりさもさ ○おほよそに
 - わりなしや ○頼むまごさ ○猶たのむかな ○まめくしくも ○いひしまゝに
- 戀く後もあはむとなくさもる心しなくばいきてあらめやも
- よみ人
しらす

水の泡の消てうき身といひながらながれて猶もたのまるゝかな
つまにおふることなし草にみるからに頼む心ぞ數まさりける
行末のあひなだのみの長き世を心ひとつになげくころかな
いつはりのなき世とおもひ定めつゝ一つ心にわれはたのまむ
松がえのしぐれの後の雪をれをつれなき人に猶やたのまん

友 則
庶 明
春 門
千 隆
契 沖

○不憑戀 たのまれぬ

人の心のかはり安くてたのみになりがたき也

○ながれてきたに ○たのまれずのみ ○我をのみまは ○いかゞたのまむ ○つれなくおもへば
○かけても今は ○今はたのまら ○涙のかけても

うきながらけぬる泡ともなりならん流れてとだにたのまれぬ身は
つれなくと思へばうきにおふるあしのはかなき世をばいかゞたのまむ
雨こそはたのまばもらめたのますはおもはぬ人と見てをやみなん
さゝがにのいつはり多き夕ぐれをかけても今は人にたのまじ
たびくのうきいつはりにならはずばたのみぞせまし人のことのは

友 則
よみ人
しらず
同
涌 蓮
蘆 庵

○待戀 まつ

ちぎりて人をまちこふるなり

○ふけぬども ○よひの間 ○まつかぜ ○松の戸 ○ふくる夜 ○まつよひ

○此夕暮

○待わびて

○人まつむし

○月待出る

○れぬ夜のかげ ○今こむさ

○夕ぐれのかれ

○明るなかこつ

○むなしく明る

○下待がてら

○まつさせしまに○ひさりれの床

○れやの戸さゝぬ○さゝがにの糸

○たのめし人

○たのめても

○更ゆく月 ○涙かたしく

○たのむこよひ

○有明の空

○偽にこりずも

○くめやまは

○おぼつかなさば○いたづらに

○さりさもさ

○よひの間に

○待わぶる心もしらず

○入相のかれ ○むなしく更る

○むなしく明る

○しひてまつ夜

○待よひ過る

○待につけてぞ

あし引の山のしづくに妹まつとわれ立ぬれぬやまのしづくに
君まつとわが戀をればわがやどのすだれうごかし秋の風ふく
あし引の山よりいづる月まつと人にはいひて妹まつわれは
今こむといひしばかりに長月の有明の月をまち出づるかな
ふらぬ夜の心をしらで大空の雨をつらしとおもひけるかな
まつ宵にふけ行かねのこゑ聞けばあかぬ別の鳥はものかは
いつもきくものとや人のおもふらむこぬ夕ぐれの松かせのこゑ
これもまたいつはりぞとは知ながらこりすやけふの暮を待まし
まよ引のこの三日月のおもかげにかならずといひし夕わびしも
いろかへぬためしになどか契けむまつは久しきものとしるく
こぬ人をまつにこよひもいざよひてふけぬとしるき山のはの月
みねにおふる松はひさしとまつよひにおもひのどめし月のはのぼりぬ

大伴皇子
額田王
よみ人
しらず
素性
左近
小侍
從政
右衛門佐
廣海
譽重
景樹
有功卿

○待使戀 待便戀 つかひをまつ たよりをまつ

人のもとより消息などの來らんをまち又そのたよりのいとまちどほにおぼゆるなどなり

- はつかりの使 ○かりの玉章 ○まちわたる ○心そらにも ○音信もせぬ ○たよりだに
- こころつて

萬 後 新

長月の其初かりのつかひにもおもふ心はきこえぬかも
 秋風のふくにつけてもとはぬかなをぎの葉ならば音はしてまし
 初かりのはつかに聞き言傳も雲路にたえてわぶる人かな
 こよひせむたよりを人のたがへなばあらぬ恨のかすやかさねむ
 あふ事はかたしの濱の濱千鳥かよふ跡さへおぼめかれつゝ

櫻井王 中務 前左大臣 勳教 春海

○待空戀 待不來戀 まつにむなし まてどこぬ

大やう二題ともに同じくまちわびつるもかひなきよし也

- たれかこぞむる ○さばりのみして ○まてどこぞ
- 月にだにこぬ ○おもひ絶ゆる ○まつ夜ながらの月 ○待をむなく ○月のいるにも

萬 後 千

あし引の山櫻戸を明置てわがまつ君をたれといむらむ
 八重むぐらさしにし門を今更に何かくやくしく明てまちけむ
 暮にとも契てたれかかへるらんおもひ絶ゆる明ばのゝそら

よみ人 同 しまら

新

かへるさの物とや人のながむらんまつ夜ながらの有明の月
 なはざりにちぎる詞の末の松つひにこよひも浪やこもらむ
 ともし火もかゝげつくして有明の月の光にくたす袖かな
 ねやの戸はさゝでねしかど諸共にうらみ鳥のこゑばかりして
 のこる夜も鳥より後にまちえたるならひなれどなくぞぬる

定家 黄中 廣海 直養 眞淵

○不待戀 またす

人のつらさにこりて今はさらにまつともせぬなり

- またどきの ○我まためやは ○心よわくも ○よそにして ○うき人を ○つれなき人を
- 心の外に ○たれかは人の

萬 古 新

こむとふもこぬ時あるをこじとふをこむとはまたじこじとふ物を
 みわの山いかにまちみんとしふとも尋る人もあらしとおもへば
 今はたい心の外にきくものをしらすかほなるをぎの上かせ
 岩しろやむかしむすびし契さへわすれぬる身はまつとしもなし

大伴耶女 伊勢 式子内親王 千陸

○違約戀 臨期變戀 乍期違約戀 ちぎりたがふ

あはんと約しながらその時となりてかはりたるなり

- そらだのめ ○たのめ置く ○たのめてこぬ ○しらざりき ○引たがへ
 - かはるちぎり ○風かわる ○空さりけなく ○かはる潤瀬 ○むなしこころも
 - かばるちぎり ○かばる潤瀬 ○かばる潤瀬 ○かばる潤瀬
- 拾 露ばかりたのめしほどの過もけばきこえぬばかりの心ちこそすれ 輔昭

後拾 千 同

うれしとおもふべかりしけふしもぞいといなげきのそふこもちする
柚河の浅からずこそ契しかなどこのくれを引たがふらむ
今しばし空だのめにもなぐさまでおもひ絶ぬる宵の玉章
かならずといひしにたがふつらさよりおぼつかなさはたのみ有けり
こむといひて契しかひもなしふなる枕むなしきとふのすがごも

道 盛 通 千 依
命 方 親 隆 平

○來不留戀

とやまらぬ

たま／＼物をさはりにしてとくかへる也

○かりにくる ○あさをさやめぬ ○心さけず ○しひてゆく ○たま／＼きても ○よせかへる 涙
○影もさやめぬ ○きしうつ涙 ○よるほごもなく ○手にもたまらず

後拾 詞 千

やすらはでたつにうたてき楯の戸をさしもおもはぬ人もありけり
涙さへ出にしかたを詠つゝこゝろにもあらぬ月をみしかな
うづらなくしづやにおふる玉ふ菅かりにのみきてかへる君かな
待えたるかひもなごさによる浪の何を恨みて立かへるらむ
人心うきたる雲やわが山にかゝるとみるもとまらざるなむ
しばしたにかげもとやめぬいなづまのよひ／＼何におどろかすらむ

和泉式部 同 道 黄 千 景
部 經 中 隆 樹

○不逢戀

あはず

かならず逢べく思ひてある人の心づよくつれなくしてあはぬよしをも人目のしげく

て逢がたきをよめり

○つれなき人 ○うき人 ○戀わたる ○いたづらに ○かた来の ○思によわる
○心づよくも ○つらき人 ○さしもへぬ ○かたし貝 ○うき中 ○うしつらし
○こりずまに ○夢ばかり ○身ひこつに ○袖はなみだに ○ひさりぬる ○さけぬ心
○さくるけしきもみえぬ ○さばりあり ○かばる契り ○さりさもと思ふ ○たのみなき
○なびかぬ中 ○あふをかぎり ○かけはなれては ○あふこもがな ○つらき月日 ○下程のさけぬ
○打さげおたき ○あふよりななみ ○あはての浦 ○みるめなき ○かへむ命 ○つらきのみして

萬

ふる雪の空にけぬべくこふれどもあふよしをなく月ぞへにける

みみ人
しらす

同

玉かづらかけぬ時なくこふれども何ぞも妹にあふ時もなき

同

古

おもへども人目づゝみのたかければかはとみながらえこそわたらね

同

新

そのはらやふさやにおふるはゝき木の有とはみえてあはぬ君かな

友 則

わが戀は波のよせくるむなし貝あふ瀬もとほくなりける哉
わか如く深くはあらぬおもひせでむかしはものと人のいひけむ
とし月のふりぬるのみか夜々は目さへあはすもなりにける哉
かくて世にいつまでひろふかたし貝あひねの濱は名のみなりけり

茂 樹 安 守 御 杖 慶 海

○難逢戀

あひがたし

あひみむとおもへどもあふよしなきなり
○あひがたみ ○あはでのみ ○つれなく過る ○よしのなければ ○あだにのみ

○いつまでか

○はつなくなりぬ

○かくてこのまゝ

新 後 古 萬

さをしかの入野のすゝき初尾花いつしか妹が手枕にせむ
おもふともこふともあはん物なれやもふてもたもくとくる下ひも
せき山のみねの杉村過ゆけどあふみは猶ぞはるけかりける
あふことをおぼつかなくも過すかな草葉の露のおきかはるまで
いかなればかよふに道のなかるらん心の關ぞすべなかりける
二ばしらはじめたまひしあふ事をいかなる神のさくるなるらん
あふことにかふる命もまゝならでながくぞ人のつれなかりける

よみ人
しらず

○近不逢戀

ちかくてあはず

ほどとはからぬわたりに住ながらあふ事の心にまかせざるなり

○ほどもなき

○遠からなくに

○遠きよりけに

○あひかたみ

○あはでつひにや

千 古 萬

遠くあればわびてもあるを里近くありと聞つゝみぬがすべなき
もろこしも夢にみしかばちかかりきおもはぬ中ぞはるけかりける
よそにては中／＼さても有にしをうたても思ふきのふけふかな
つたかづらはひわたるべきほどながらうき中がきぞこえんかたなき
目にちかくみるものからにはがたあはとばかりも戀わたるかな
糸竹の聲はかたみにかよへどもなどあひがたきしるべなるらむ

大 兼 花 眞 鶴 千
嬢 藝 山 直 夫 陸

○不來戀

こす

來むといひてとはすなりたるなり

○きまざる君

○こぬ人たのみ

○こはぬ君かな

○こはねはつらき

○こはれずて

拾 古 萬

我門の榎實もりはむ百千鳥千鳥はくれど君ぞきまざるぬ
山城の淀の若菰かりにだに來ぬ人たのみ我ぞはかなき
さを鹿の爪だにひぢぬ山川な淺ましきまでとはぬ君かな
露おもる草はあらしもたのむらんこぬ夜の袖よいかにはさまし
ふゝめりし花のちるまでとはれねば身をうぐひすの音にぞながるゝ

よみ人
しらず
同 同 光 眞 千
同 同 秋 庭

○來不逢戀

くれどあはず

くる人のあはでむなしくかへる也

○みるめなき

○きてかへりにし

○くるさみて

○からくいひても

○かへしつるかな

六 後 古

みるめなきわが身をうらとしらねばやかれなであまの足だもくくる
から衣きてかへりにしさ夜すがらあはれと思ふをうらむらんはた
いれひものさしてきつれどから衣からくいひてもかへしつるかな
つれもなき心をみせてもく人にくやくしく門を明てける哉

小 桂 眞 廣
町 の み 人
足

○行不逢戀

ゆけどあはず

ゆきたるさきの人にえあはざる也

○いたづらに ○あふ坂山の道まじひ ○ゆきてはそらに ○ゆきがへる ○我いたづらに

古 いたづらに行てはかへる物も忍に見まゝくほしさにいざなはれつゝ 小 しみ人

後 夜もすがらぬれて詫つるから衣あふ坂山にみちまどひして 同 計

○不逢歸戀 あはでかへる

はいとげずしてむなしくかへるなり

○あはでしくれば ○あはでこし夜ぞ ○中々にても ○いさはれて ○道芝の露
○あふここのなみ空 ○たざるくも ○涙に我身を ○いたづらに立歸 ○あはでのみ
○たゞにかへるは ○いづれか渡る淺瀬 ○かへるべき方も ○かへりしは ○くれにはたゞに
○吹かへさるゝくず

古 秋の野に笹分し朝の露よりもあはでこし夜ぞひぢまさりける 業 平

後 くれぬとてねて行べくもあらずになどるくもかへるまされり 同

後拾 かへりしはわが身ひとつとおもひしを涙さへこそとまらざりけれ 師 賢

いたづらに露わけがへる小ざゝ原月のみ袖にしたしかりけり 依 平

あふことのなかぞらにしてかへらずばあはれとしらじ夜はの月かげ 光 胤

○逢戀 あふ

わふ夜はことにこゝろもうちとけてうれしきにつけてもく末もいよいよかはらざらむことをたのむなどさまぐなるべし

○新枕 ○あふ瀬うれし ○かはす枕 ○こくる下履 ○中の契 ○打こくる
○逢みては ○床の塵ほらふ ○心もさけて ○待かひ有て ○月にまばゆき ○衣かさぬる
○うかりしも ○あふ夜さなれば ○逢坂の關 ○あふの松原 ○袖かはす ○袖さしかへて
○此夜な明そ ○君さしぬれば ○あふは夢路 ○あふで ○まくらまく ○もろれ
○さゆるこよひ ○明るわびしき ○うれしさは ○手枕 ○さ夜枕 ○あふ夜さなれば
○たのむかな ○さけそめて ○心さけたる ○宵過て ○心もこくる

萬 戀くゝてあへる時だにうつくしき事つくしてよ永くと思はは 坂上耶女

同 かりごものひとへをしきてさぬれども君としぬれば寒けくもなし 小 しみ人

古 秋の夜も名のみなりけり逢といへば事ぞともなく明ぬるものを 小 町

後 逢みてもわかるゝ事のなかりせばかつゝ物はおもはざらまし 小 しみ人

後 あひ見てもおもふばかりはいはれぬに色に出ぬる袖ぞうれしき 仁 和 寺 宮

代 物おもひはけさこそまされつらかりし事はことにもあらぬ也けり 小 辨

命やは何ぞとあだにおもひしは今宵をしらぬ心なりけり 依 平

とけぬればかくもとけぬる下紐のとし月なにもむすばれけむ 景 樹

○初逢戀 はじめてあふ

はじめて逢ふ夜はことにつましく打とけかぬるよしなどをよむ

- おもひくして ○つゝましき ○けふよりは ○わたりそむる ○ものいひそむる ○おのづから
- かばかりも ○うらなくも ○つらきただにも ○心やすくも ○一夜の夢 ○あふ夜も袖は
- まづあひみては ○うれしさの心さわざに ○こよひこそ ○心さけたる

千 戀／＼てあふうれしさを つゝむべき袖はなみだにくちはてにけり 公 衛
 新 忘れじのゆく末まではかたければけふをかぎりの命ともがな 儀同三司母
 こよひしもまづ打いてむことの葉のうひ／＼しさぞもろごゝろなる 春 門
 ほに出しかひはありけり初尾花こよひぞ人にむすばれにける 枝 直
 初尾花むすび初ける夕露に秋てふ風はふかすもあらなん 眞 淵

○會後戀 あひてのち

一度あひて後はなほそのかみよりもあふ事をまつこゝろ切なり

- あひみしは ○見し日より ○うつりがに ○袖なつかしき ○わかれし日より ○立かへりてし
- 戀はつきせぬ物 ○あひみては ○ほかなき夢も ○人はゆくへも ○逢みすは ○ほごもへなくに
- あかさりし ○あひみて後ぞ ○中／＼に ○なごりしもこそ

万 妹の袖わかれし日より白妙の衣かたしき戀つゝぞぬる よみ人 しらす
 古 あひ見ずは戀しき事もなからまし音にぞ人をきくべかりける 同
 拾 あひみてはなぐさむやとぞおもひしを名ごりしもこそ忘がたけれ 是 則
 勅 あひみてもつゝむおもひのかなしきは人間にのみぞねはなかけける 伊 勢

○夢逢戀 めめにあふ

つらしともかこつかたなく打とけてあひし後ぞ戀はそひぬる 千 隆
 雲とみてあらましものををりえてはなかく花にそふおもひ哉

- 夢の内にも ○夢のたゞち ○ものはかなくて ○ながさむべくも ○うつゝよりこそ
- 夢路 ○ほかなきものは ○おもひれ ○夢にあふ事を ○現さもがな
- 夢にみゆさも ○おもひれにみし ○現はかひなき ○つれなき人もあふ ○おもひながさむ
- 夢ならぬかは ○其夜の夢 ○さめて後 ○夢なりけりさ ○衣かへして

古 君をのみ思ひねにみし夢なればわが心からみつるなりけり 野 恒
 後 夢のごとはかなき物はなかりけり何とて人にあふとみつらむ た の む
 新 さめてのち夢なりけりとおもふにもおふは名ごりのをしくやはあらぬ 左 大 臣
 月 夢さめてなごりにたへずなりもけばあふとみつるにかへむいのちか 忠 度
 世にもるゝちぎりならぬをあふとみし夢さへ鳥のおどろかしけり 直 養
 たまだれのうち／＼かけて思ひしをへだてぬものは夢ぢ也けり 直 兄
 うつゝにはたつなもうしとうば玉の夢ちかよひて人のあふらん 尊 孫
 忍ぶれば衣かさぬとみし夢のうらさへみえてあはせざりけれ 景 樹

○稀逢戀 邂逅會戀 まれにあふ

二題ともに同じくほどへてたまさかにあふなり

- たまさかに ○たましくに ○待えたる ○年にまれなる ○たまさかのあふ夜
- たまさかの契 ○まれなる中は ○まれの契 ○まれにあふ夜は ○まれなる夢
- 棚ばたの契にたぐふ ○たえまがち

萬 後拾

さぬらくは玉の緒ばかり戀しくはふじの高根の鳴澤のごと
 はるくと野中にたてるわすれ水たえましくを歎くころかな
 とし月を待かね山のかげにこそうべたまさかの池は有けれ
 わくらばにあへばおもひのまさる哉またれて人をとふべかりけり
 くまもなく月すむ夜はの星なれやまれなる中に思ひきもらん

○逢不遇戀

あひみし人のふたゝびあはぬなり

- なげまこや ○又やはよそに ○うさくなる ○遠ざかる ○たえれさて ○かほることろ
- つらき契 ○浅き契 ○かへりこぬ ○みしや夢 ○末もさほらぬ ○中たゆる
- 一夜ばかり ○おもひ出る ○そのまゝに ○ありし一夜 ○あらずなり行 ○又もあひみぬ
- しのべども ○うつるあき ○わかれきて ○又こそこ ○うつり香も ○わりなき方に
- もこのころ ○かけはなれにし ○もこのつらさ ○もこの身ならぬ ○わすられぬ

古 後

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとのみにして
 あふさかのこのした露にぬれしよりわが衣手は今もかわかず

業平 大輔

千 六

ながらへてかはる心を見よるはあふにいのちをかへてましかば
 かげろふのひと目ばかりはほのめきてこぬ夜あまたに成にける哉
 立かへり又こえがたきあふ坂は關もる人やあらたまりけむ
 枕さへあらぬ方にぞ背きたるみしは夢にもあらぬちぎりに
 一夜ねし淀野のあやめふさかへて長くやわれにねをなかつらむ

○稀戀

まれ 逢事のまれなるなり

- 千夜に一夜 ○逢夜まれなる ○たえく ○まれなる中 ○まれの契 ○あはすして
- おもへば遠く ○絶間がち ○逢夜がされぬ ○つもる年月 ○枕のちり ○さだえのみして
- 月日へだてゝ ○まれにあふ ○あはぬまの ○さだえこし ○天の川 ○たまさかに
- こよひだに ○立かへり ○まれの契

萬 金 詞

獨ぬる夜をかぞへむとおもへども戀のしげきに心利もならし
 めづらしや岩間に淀む忘れ水いく世を過ておもひ出らむ
 たが里にかたひかかねてほとゝぎすかへる山路の便なるらむ
 しろたへの袖にいつよりかゝるらんよそにおもひし天の川浪
 天の川まれによりくる楳の葉に露の命はなほかゝりつゝ
 しら波のたよりによするむなし貝あふせもまれになりける哉

よみ人 同 同 同 竹 太 三 同

○語戀 かたらふ

逢夜もの語するをまたい戀ふる人に物語るをよめり

- むつこと ○物がたり ○言の葉は ○こまかたらへば ○おもひためたること
- こさばのこりて ○こまかたらはん ○こさしかたらば ○かたりつくまで ○かたらふ夜は

古 後拾 後 古
 むつごとともまだつきなくに明ぬめりいづらは秋の長してふ夜ぞ 野 恒
 言の葉はなげなるものといひながら思はぬためは君もしらなん よみ人
 みちのくの安達の眞弓君にこそおもひためたることは語らめ しらす
 こよひだに物はおもはじ逢みての後のこころはさもあらばあれ 年 平
 つれなさにたへし月日のうき事はかたるもつきぬさ夜のしまくら 葛 平

○別戀 わかる

今立わかるゝなり但別て後の事をよめば後朝戀になるなり

- まきわかれ ○わかれ路 ○つらき別れ ○こりのれ ○鳥がれ ○又いつこ
- やすらひに ○あくるそら ○いそぐわかれ ○見送るかた ○きぬく ○あくる夜
- 曉おき ○有明の月 ○うらむ鳥のれ ○この朝露 ○おもかけのこる ○あり明のかけ
- ここの葉のこる ○分まよふ ○なごりの袖 ○あかずしも ○しばしとて ○今はとて
- れやの月 ○庭鳥の聲 ○見おくる影 ○見おくる月 ○しのゝめの空 ○横雲の
- 曉のかれ ○おきわかれ行 ○白露の ○道芝の露 ○ひかふる袖 ○夜をこめて
- 袖のうつりが ○あかぬわかれ ○逢夜契て ○あまり夜深き ○残る夜深き ○わかれかなしき
- かへるさの道 ○しのぶわかれ ○峰にわかるゝ雲

萬 古 後 同 千
 しらま弓今はる山に行雲の行わかれなむ戀しきものを よみ人
 しのゝめのほがらくと明也けばおのがぬぐなるぞ悲しき しらす
 うき世とはおもふものから天の戸のあくるはつらき物にぞ有ける 同
 わかれをば悲しきものときしかどうしろ安くもおもほゆるかな 同
 をしみかねげにいひしらぬわかれかな月も今はのあり明の空 同
 時しもあれおなじ心にわかるらんわがしのゝめの峯のよこ雲 同
 よしさらばしひてもとめじうきながらわかるればこそあふ事もあれ 同
 なべて世につらきならひの鳥のねもきかねに人をなでわかるらむ 同
 とまれとやけさの朝風さらでたにわかれがたみの袖にふくらむ 景 樹

○欲別戀 わかれんとす

別の時に近づきたるなり今わかるゝ前の事をよむべし

- わりなくも ○更ゆけば ○おもへども ○いひしらぬ心 ○今はの心つく ○わびしかりけり
- あけゆくほさは ○有明ちかき ○山の端近き月みて ○月みれば ○のこり多くも
- つきせぬなこ

古 後
 明ぬとて今はの心つくからになどいひしらぬおもひそふらむ 國 經
 獨ぬる時はまたるゝ鳥のねもまれにあふ夜はわびしかりけり 小 町 姉
 立出てかへりみすべき山のはの雲もわかれはちかづきにけり 譽 重
 かねのねはまだよひとしもしいふべきにいつはりがたき鳥のこるかな 茂 承

○歸戀 かへる

逢てわかればかへるなり道のさまなどを専よめり

- おきてきつる ○曉かけて
- みち芝 ○みちのゆくて
- かへるをりにや ○音になきて
- 露にぬるゝ ○夜をこめて
- かへる道 ○かへる空
- みちいそがれぬ ○かへりみらるゝ ○露分てかへる
- 有明の空
- きぬくに

古 後 代 同

○後朝戀 のちのあした

玉くしげ明ば君が名立ぬべく夜深くこしを人みけむかも
 天の戸を明ぬくといひなして空なきしつるとりのこゑかな
 白露のかやく月のかげみればくやくままだきおきにける哉
 露分てかへるたもとにいとしくしぐるゝ空のつらくも有かな
 かへるさはかならずおくる有明の月のかげにもしのぶ夜はかな
 わかれこし妹が袖にもやどるらんかへさをおくる有明のつき
 かなしともうしともものゝいはれぬはわかれてかへるこゝろなりけり

よみ人
しらす
長 能
朝 光
廣 海
千 隆
景 樹

わかれて後のあしたなり今わかるゝ心は叶はず別れかへりての心またかへる道すが
 らの心をもよめり

- 玉章 ○おもかげ
- 露分わびし ○つきやるふみ
- 暮をまつ間 ○明けと出し
- かへるあした ○けさのおもひ
- うつき姿 ○おき出し床
- 露分し袖 ○朝まだき
- おもしろい ○うつり香
- おき出し床 ○あかてわかれし
- 朝まだき ○なごりの空
- おもしろい ○道しほ
- あかてわかれし ○わけての朝け
- なごりの空 ○わかれこし

- 名ごりのみ ○くれまつま
- あかてこし ○曉おき
- またさながらの
- 今朝のおもひ ○山の端の月
- おもなくて ○やさしき
- またれの床 ○われかのけしき

萬 同 古 拾 詞 後拾

立ておもひぬてもぞおもふ紅の赤も裾引きにし姿を
 朝ねがみわれはけづらじうつくしき人の手枕ふれてしものを
 ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな
 いつしかとくれをまつ間の大空はくもるさへこそうれしかりけれ
 心をばといめてこそはかへりつれあやしや何のくれをまつらむ
 明ぬればくるゝものとはしりながら猶うらめしき朝ぼらけ哉
 わかれ来しそなたの空の影ならば物いひかはせ有あけの月
 こがれしも猶おほよその心とは今朝のおもひにくらべてそしる
 いつかひむなみだをさへにとりかへてきたるかたみのきぬくの袖

よみ人
しらす
業 平
同
顯 廣
道 信
廣 海
由 之
景 樹

○名立戀 立名戀 なたつ

なまき名もうき名もあだなもたつをいふなり

- たつ名 ○あらぬうき名
- むなしき名のみ ○あた涙
- くたすうき名 ○世にもれむ
- 契らぬを
- あらぬ名 ○ねれぎぬ
- 水鳥のたつ名 ○あだなる名
- 世にもるゝ ○うき名取川
- 立田川 ○たつの市
- かされぬ袖 ○つらき名
- まだみぬ人に ○風にさきだつ涙

こりすまに又もなき名は立ぬべし人にくからぬ世にしすまへば
君によりわが名は花に春がすみ野にも山にも立みちにけり
世の中をしらすながらも津の國のなには立ぬる物にぞ有ける
こゝろにもあらでわかれしあひづ川うき名を水にながしつるかな
よしやよし千名の五百名と思ひしもしられ初てはくるしかりけり
人のうへにおもひくらべし歎より戀すてふ名は立はじめけむ
みな口を岩根にこそはかためしかなどこひちより名のもれにけん

よみ人
しらす
同
同
同
廣 海
久 秋
契 沖

○歎名戀 歎無名戀

なをなげく なき名を歎く

逢てたつ名をもいまだ逢もせざるに逢みたる名の立をもなげくなり

○たつばなき名

○かくれなき世を

○うきなをながす

○名なきへ戀に

○なき名よりては

○身はあぢきなし

○みちのくに有てふ川○名とり川

○ぬれ衣

○あまのぬれ衣

陸奥に有といふなる名取川なき名とりてはくるしかりけり

忠 守

いかにせむなげきのもりはしげれど木の間の月のかくれなき世を

俊 宗 女

なみだ川袖のしがらみかけとめてあはぬうき名をながさすも哉

有 房

君によりあまのぬれ衣われきたり思ひにほせどひるよしもなし

よみ人
しらす

まだきよりなき名に人のことよせていとゞのれなく成ゆくぞうき

藤 庵

うきなのみよそにながれてともねせし水は昔にかへらざりけり

時 繼

立そめて世にうづもれぬうき名こそ昔のしたまでかなしかりけれ

景 樹

○惜名戀 惜人名戀

名をよしむ 人の名をよしむ

惜名戀はわが名をしむ也惜人名戀は我もゑに人の名さへたてんことをしき也

○ものいひさがなき

○わがためをしき

○つらきにつけて

○つれなきよりも

○をしき名の

○我はなき名の

○心のこぼし

○戀にくちなん名

○名こそながれめ

○立けん名だに

○うき名もらすな

○名なきへ忍ぶ

○後のうき名

○かちなば君が

○かひなくたゝん

橘の花ちる里にかよひなば山ほととぎすとよもさんかも

よみ人
しらす

なき名ぞと人にはいひて有ぬべし心とはいいかゝこたへむ

同 房

君が名のたつにとがなき身なるをばおほよそ人になしてみましや

忠 房

春のよの夢ばかりをるたまくらにかひなくたゝん名こそおしけれ

周 防 内 侍

春霞立事やすきうき名ぞとおもへども猶人のこひしき

秋 成

戀しなば草の原までとはれじとおもふ君もゑ名こそうづまね

廣 海

○無名立戀

なき名たつ

いまだあひもみざるにはやく名のたつなりおもはぬ人にうき名の立事にはあらず

○あやなくて

○まだきたつ

○風にさきだつ涙

○あふ事なきに

○あひみぬほごに

○わがぬれぎぬ

○あた名はたちぬ

○むなしき名のみ

○浅ましや

○すぐべき方なき

○わぶるなみだ

○なき名すゝがむ

○うき名取川

○またみぬ人に

○契らぬを

あやなくてまだきなき名の立田川わたらでやまん物ならなくに

有 助

ぬれぎぬをいかゞざらん世の人は天の下にしすまんかぎりは
まことにやそらになき名のふりぬらん天照神のくもりなき世に
立しよりはれずもものをおもふかななき名やのべの霞なるらん
大空にわがなの種もまかなくにいくのなきなこゝら生けむ
心なき岩木の山の峯の雲うきたる名さへ空にたちなき
世の中にたつ名おもへばうたゝねの夢にあひしやまことなりけむ

よみ人 相 俊 美 景
しら 模 頼 樹 樹

○不惜名戀

なををしませ

あまりに深くおもひ入てわが名も人の名もたつをいとほざる也

- 何かその ○をしからず ○君によりては ○おなづくは ○人はいはれむ ○つらきにまさる
- うき名をも ○おもはましかば ○人はいふさも ○今はわが名の ○つれなき人も

千早ぶる神のいがきもこえぬべし今はわがなのをしけくもなし
何かその名のたつことのをしからんしりてまどふは我ひとりかは
戀しなむおなじうき名をいかにしてあふにかへつと人にいはれん
水鳥のみなれん末をたのみにてよそに立名もいとほさりけり
立ねたゝたれもゑならぬうき名とはつれなき人もおもひしるべく
戀するになどかうき名の立ざらんことわりなくも歎くころ哉

よみ人 興 長 和 有 直
しら 風 方 平 秋 道

○顯戀

あらはる

忍びて通ふ事のあらはるゝのみならず心にもおもふ事のおしこめがたくしてつひに
あらはるゝよしをもよむ

- 世にしらる ○世にもるゝ ○もれしうき名 ○色にいづる ○名のたつ ○あらはれ初る
- 人目にも ○みだるゝ色 ○心よわくも ○忍びかれ ○袖よりもるゝ ○心にあまる
- しらずくも ○涙にあらはるゝ ○はしかれし袂 ○袖にあまる涙 ○つゝみえぬ ○名さり川
- 磯松かれ ○もれそむる ○さればよつひに ○かくれなく ○かくれなき世を ○まつのれながら
- うき名たつ ○人にしらるゝ ○いろやみえけん ○もれにけらしも ○淺はかに ○心づかひは
- つゝみこし思ひ ○なべて世に ○涙せく袖より ○玉章のいつちり初て ○さがなき世に
- 人のものいひ ○つゝみえぬ涙 ○ほに出にけり ○ほにあらはるゝ ○さがなき世に

つくま野におふる紫きぬにそめいまだきすして色に出にけり
池にすむ名をゝし鳥の水を浅みかくるとすれどあらはれにけり
かた岸のまつとうきねと忍びしはさればよつひにあらはれにけり
つゝめどもなみだの雨のしるければ戀する名をもふらしつる哉
出てこし曉月夜たれかみて名さへさやかにいひもらしけむ
木かくれてあふ坂山の岩清水いつよりもれて名にながれけん
やすらひにおくれし朝もありつるやかくあらはるゝはじめなりけん
よせきつる浪のかへさのためたひに磯がくれなりにける哉
わが戀は木かくれ傳ひゆく月のしらぬひまよりあらはれにけり

笠 女 耶 直 美 景
しら 人 樹 樹

○増戀 ます

日々に思のまさるをも逢みていよ／＼思のまさる心をもよむべし

- おもひのます ○いやましに ○おもひそふ ○ふかくなりゆく○きのふに似ぬ ○よごの澤水
- まさるみぎは ○ますみのかゞみ○ますだの池 ○日にそへて ○見るたびに ○ちかまさり
- ありしよりけに○いさゞうき ○まし水 ○染ますいろ ○淺からぬ ○袖の露そふ
- いやまさりゆく○ふかくなら ○よごの澤水 ○さちにおもひの○つさぬ思の

紅の八しほの衣朝な／＼なるとはすれどいやめづらしも

かくこひむものとはわれも思にき心のうらぞまさしかりける

雨やまぬ軒の玉水かすしらす戀しきことのまさるころかな

こりもせず猶うき人の戀しくてわが心さへわれにつれなき

消そむる雪間の草のみどりより日にそふものはおもひ成けり

○逢増戀 逢後増戀 あひてます あひてのちます

二題ともに同じく逢みて後いとおもひのますこゝろなり

- 逢ざりし時 ○猶なぐさまぬ ○昔は物を ○いやまさりなる ○さてしもしいさゞ
- いさゞおもひを ○戀しき事のまさる ○逢みての後こそ ○かはるに色の増る ○ふかき心は
- おもひそふ ○ひたすら ○ひたすら

あひみての後の心にくらぶれば昔は物をおもはざりけり

君がためをしからざりし命さへながくもかなとおもひけるかな

千

戀しさはあふをかざりとさししかどさてしもしいとおもひそひけり

かわく間もありこしものをいかなればあひみし袖のぬれまさるらん

中／＼にあはざらましをとし月のつれなかりしやなさけなりけん

○切戀 懇切戀 ねもころ

大かた戀の心のせちならざるはなきを殊に命をもかけて切になりきはまりたる也

- かくてもいける身 ○中／＼よその ○さこそはつらき ○あらばあふ世を ○いきてかひなき
- 後の世 ○今をかざり ○けふを現の命 ○戀しなむ ○なみたせく
- こよひかざり ○おもひあまる ○なき世まで ○なげきあまり ○せきせせくとも
- よわるいのち ○ながらへてまつ ○こゝろひさつ ○むもひの露 ○わりなき
- 白露の ○夏むしの ○なにせんに ○つれなき戀に ○あぢきなく
- けなげねべく ○ながらふべくもなき○わするまなく ○暮をまたぬ命 ○やらんかたなき
- ひたすらに

かぐ山の菅の葉しのぎふる雪のけぬとかいはん戀のしげよく

朝かげにわが身はなりぬかざろひのほのかにみえていにし子も忍に

わりなくもねても覺ても戀しきか心をいづちやらばわすれむ

あはれともいふべき人はおもほえで身のいたづらになりぬべきかな

いきてよしあすまで人はつらからじ此夕暮をとはいとへかし

あはれてふことの葉だにもつみえてばしなぬ薬とならまし物を

人 足
よみ人
同 攝 政
式子内親王
知 紀

戀しなばつるぎのえだのよぶこ鳥後の世さへや君にまよはむ

求てもみな戀おとろへてひをむしの日をへて世にはあらんさまかは

○思戀 おもふ

戀のおもひをいふ大かた思ひと詞にあらはしてよめり

- 思ひあれば ○おもひ草 ○思ひ川 ○おもほすば ○おもひしらば ○おもふ心
- こにかくに ○さまくに ○いかにして ○いかでかは ○わすれめや ○思ひかわらで
- 思ひしなるゝ ○おもほむ人 ○おもはんかた ○思ひさをしれ ○うち出ぬ ○中くの
- 思ふか物を ○さばかりに ○たれゆゑならぬ ○おもひしられん ○中のおもひ ○大かたならぬ
- たゞ大かたの ○わりなくも ○おくさほめさば ○下のおもひ ○おもひこがるゝ ○思ひのけぶり
- 心ふかめて ○うきておもひの ○いさかく ○心にたぐふ ○心づからや ○こがればつべき
- しのぶ ○しのぶ心 ○しのぶみだれ

廣瀬川袖つくばかり浅きをや心ふかめて物おもへらむ

朝な立川ぎりのそらにのみうきて思ひのある世なりけり

かすしらぬおもひは君に有物をおき所なき心ちこそすれ

天地の神ぞしるらん君がためおもふ心のかぎりなければ

君によりおもひならひぬ世の中の人はいを戀といふらむ

つれなさをかこつなみだの水にしも消ぬぞむねのおもひ也ける

いかばかり深き思ひにしづむらんくみても今はしる人のなき

萬 古 終 拾 代

よみ人 しまら ず 景 樹 業 平 同 同 同 景 樹

○初疎後思戀 はじめはうとし

これは先の人の心をいふはじめのほどは疎かりしが今は打かはりて深く思ふなり

- 引ッへて ○そのかみのつらさ ○なに今更に ○今さらに ○たのまれず
- うさげにも ○かはる心か ○それもさすぢに

千

今更に戀しといふもたのまれずこれも心のかはるとおもへば
つらかりしおのが心のはやながらあましかばとおもふわりなき

讀 岐 千 隆

○片思戀 片戀 かたおもひ かたこひ

かなたはおもはぬにわれひとりわすれがたきなり

- かた糸 ○かたわれ月 ○うつせ貝 ○かたし貝 ○あひもおもほぬ ○心かよはぬ
- わればかり ○身をいさふ ○我のみや ○あはれもしらぬ ○よりあふ事も ○打あふ事も
- おもふさも ○おもほぬ人 ○こゝろかよはぬ ○あはびの貝 ○つれもなく ○かたこひは
- 我のみの涙 ○かひなしや

ますらをや片戀せんとおもへどもしこのますらを猶こひにけり 舍人皇子

いせのあまの朝な夕なにかづてふあはびのかひのかたもひにして よみ人

ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもほぬ人をおもふ也けり 同 しまら

あふとだにかたみにみゆる夢ならばわするゝほどもあらまし物を 同

片戀はくるしきものときのふまでよそにきゝしもくやしかりけり 同

おなじよにすむかけならば月よなどやどりやとらぬ袖をわくらむ 成 章

萬 同 古 後

舍人皇子 同 同 同 成 章

山のゐの浅き心をとるかへて人の袖をばぬらしてしがな

有功卿

○互片思戀 かたみにかたおもひ

我は先の人を思はずとおもひ先の人にはわがおもはずとたがひにおもふなり

○おもはぬ中 ○かたみにうさむ ○うさまれてのみ ○あひもおもはぬ ○われのみや
○いたづらの思ひ ○心づくし ○うきをたのまば ○心づかい ○心もしらぬ

古 われをおもふ人をおもはぬむくひにやわがおもふ人の我を思はぬ よみ人
しらす

後 おもふ人おもはぬ人のおもふ人おもはざらんおもひしるべく 同

六 世の人のこゝろくくに有ければおもふはつらうきはたのまる 同

わがおもふ人をおもはぬ人にしもあへなば人のわれやおもはん 廣海

○相思戀 あひおもふ

そなたこなた相へだつる事なくおもひあふ也

○たまあへば ○心ぶかき ○やむ時もなく ○深さくらべ ○心ざしには ○あひもおくれ
○おもひおくれぬ○我のみか ○君ひさりやは ○君のみや ○ひたすらに ○ひたぶるに
○もろこもに ○我さ君さか ○しなばこもにさ

後 わたの底かづきてしらん君がためおもふ心のふかさくらべに 是則

代 ひれふりし松浦の山のをとめこもいとわればかりおもひけんかも 崇院

同 もろともにはなれじとおもふ中ならばわかおもかけや君にそふらん 長時

後の世のおぼつかなさの一ふしぞ相おもふ中の歎なりける 常操

おもはぬをおもひしほどにくらぶれば思ふをおもふ事ぞすくなき 眞淵

○不相思戀 あひおもはぬ

相思戀とはうらうへにてたがひにおもひかはさるなり

○あだにのみ ○いたづらの ○打あはぬ心 ○おもはぬ中は ○おもはぬ人も
○おもへども ○おもはずさのみ ○おなド心につらし ○つらからば ○つれなき人を
○いなやおもはし

萬 相おもはぬ人をやもとな白たへの袖ひづまでにねのみしなくも 山口女王

後 おもへどもおもはずとのみいふなればいなやおもはじ思ふかひなし よみ人
しらす

つらからばおなじ心につらからんつれなき人を戀んともせず 同

打とけぬ人に心をおく山のそばくしくもなりまさるかな 春海

思へどもおもはぬ人としらぬまに戀しなませばやすからましを たみ子

○思煩戀 おもひわづらふ

心ひとつに定めかねていかやうになさばよげんと思惑ふなり

○ひさりくが ○かくばかり ○いかでかば ○いかにして ○さげかりは ○いへばえに
○いはれむれに○くもてに物を ○こにかくに ○なにぞは人を ○うらめしながら○あふ事は

萬 紅のすそひく道の中をきて我やかよはん君やきまささん よみ人
しらす

古 君やこむ我やかんのいざよひに横の板戸もさらずねにけり 同

おもはじとおもへばいと戀しきはいつれかわれが心なるらむ 同

いへばえにいばねばむねにさわがれて心ひとつになげくころ哉
かなしきもあはれもたぐひ多かるを人にふるさぬ言葉ともがな
人をわがおもふ心にはだされてむすらるゝをもしらすざりける
いとしくあくがれよとやつらからぬけしきばかりに人のみすらん

○思昔戀 むかしを思ふ

戀につけてそのかみに有し事などをおもひいづる也

○いにしへ ○むかしへ ○そのかみ ○ありし世 ○つらき昔 ○野中の清水

後 千 六

いにしへの野中の清水くむからにさしくむものはなみだなりけり
なほざりの空だのめかたまちし夜のくるしかりしぞ今は戀しき
おしかへしおもへば人ぞつらからぬくれも昔の契なるらむ
わすれめや昔の春の花かづらうつろひはてよとしはふれども
みし世にはたなほざりのひと言もおもひいづればなつかしき哉

○分思戀 わきておもふ

相思ふ中にもとりわきて此方のおもひまさる也

○おもひそめてき ○ましてぞおもふ ○そはるおもひ ○われのみふかき ○君つらくとも

後

おもふてふ事をぞねたくふるける君にのみこそいふべかりけれ

忠 平

業 平
藤 公
藤 鹿
契 冲

千 六

たれゆるにあくがれにけむ雲間より見し月かげは獨ならじを
おもふてふことより外にまたもがな君獨をばわきてしのばむ
いかなればわきて心のひかるらんまおもつきもみ品はあれども

○思疲戀 おもひやす

思ひの切なるによりて疲おとろふるなり

○朝かげにわかみはなりぬ ○やせわたる ○戀のつがれ ○おさるふる姿
○かげさなるみ ○淺ましきまで ○ほだされてのみ ○いとあつしく ○あつしくのみ
○われかのけしき ○われにもあらず ○すがたかはる

萬 朝かげにわが身はなりぬ玉垣のすきまにみえていにし子ゆるに
古 戀すればわが身はかげとなりにけりさりとて人にそはぬものゆる
千 心さへわれにもあらずなりにけり戀はすがたのかはるのみかは
なよ竹の世にあるべくもあらぬまでおもひほそるとしらせてし哉
うき戀にやつれはてつゝほそ布にむねあひぬべくみは成にけり

○無實戀 會無實戀 乍臥無實戀 まことなき

大かたにしてまめだちたる事なきなり

○くるまはすれど ○目には見れども ○心はけずも ○いつはり ○そらなきしつゝ
○いたづらふし ○うはの空なる ○事ありがほに ○うつりがばかり ○ゆるさぬ關

千

むすびおおくふしみの里の草枕とけでやみぬる戀にもあるかな

顯 仲

新 同 月

わびつゝも君が心になふとてけさもたもとをほしぞわすらふ
けさはしも歎もすらんいたづらに春の夜一夜夢をだにみで
何とこは事有がほにさよ衣うつり香ばかり身にとまるらん
かさねてもあしの下根の下とけぬをしのふすまはかひなかりけり
うちとけぬ野澤の雪につむせりのねしかひもなくあくる夜はかな

九條入道
和泉式部
維時女
依平
美卿

○厭戀

いとふ

さきの人のわれをいとふをも又われより人をいとふをもかよはしてよめり

- うき契 ○身をうらむ ○うきをしる ○いさふすがた ○我さへいさふ ○おもふないさふ
- 人のつらさ ○つれなき人 ○うき人 ○いさはれてのみ ○うしや身は ○すさめぬ戀
- 心の秋風 ○くるなもいさふ ○しらぬにあらす ○さぞなきは

後 同 拾 代

ひたすらにいとひはてぬるものならばよし野の山にゆくへしられし
つれなきをおもひしのぶのさねかづらはてはくるをもいとふ也をり
いとふにはしらぬにあらす知ながら心にもあらぬこゝろなりけり
わするゝを恨むる人はなになれや思ふをいとふ世にこそ有けれ
いとほるゝうき身をなげく心だにあはれと人のおもはましかば
玉だれのひまもる風に身をかへば花のすがたに猶やいとほむ

贈大政大臣
よみ人
くらず
長能
重之女
廣足
枝直

○被厭戀

いとほる

我は戀切におもへども先の人にいとほれてせんかたなきなり

古 千 月

- いさはれてのみ ○うき身には ○つらくのみ ○人のつらさ ○音づれもせぬ ○うきをいさふは
- 君ひさりかは ○いかにせむ ○こりぬ心に ○いさはれながら ○さりさもさ猶

雲もなくなきたる朝の我なれやいとほれてのみ世をばへぬらむ
いとほるゝ身をうしとてや心さへわれをはなれて君にそふらん
いかにせむしばしはさこそいとほめとおもひしほどにやがてつれなき
いかばかりつらきにまけぬ心とていとほるゝ身をいとほざらむ
君がぬるとこのちりにもあらぬ身をばらふばかりに何いとふらん

友則
隆親
忠度
親教
契人
沖

○厭身戀

身をいとふ

身のいやしく或は老たる或はかたちのすぐれざるによりて思へども人のつらければ
我とわが身をいとふ也

- いさふうき身 ○しづたまき ○おもひかければ ○およびたえたる ○うきにたえたる命
- 身をしるくも ○かひぞなき ○おもひくたして ○野がげれこ ○盛なられば

新 同 月

過にける世々の契もわすられていとふうき身のはてぞかなしき
かすならばかゝらましやは世の中にいとかなしきはしづのをたまき
いとほるゝとしはすがたにしるければわびかへすべきかたもなきかな
いとほるゝみ山のくち木いかにして心の花を人にみえまし

辨
莖
行盛
枝直

○偽戀

いつはり